

No 6785

小原正太郎先生著



精吟洲  
本集  
空室延佳紙  
全

書肆

東京屋藏版



頃日菊廼舍主人東籬。携其所著蟲廼雙紙來。請予  
一言。取而閱之。託名蟲豸。而叙忠臣奸賊之事。寓意  
於勸懲。結構新奇。措辭流麗。不流於猥褻。不戾於正  
經。奇幻幽。妙使讀者不能措卷。豈世間情史謔話之  
比哉。主人嘗講昆蟲學。兼長養菊之術。乃有此奇著。  
苟非精本草者。則奚能臻此哉。余恐讀者唯喜其新  
案奇趣。不知作者深意之所在也。乃辨一言於卷端  
以還之。

丁亥雨水後一日

綠麓樵者識



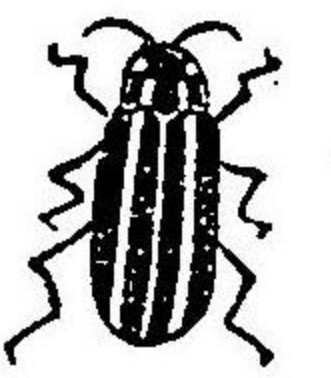
# 蟲廻雙紙小引

莊子は夢ふ胡蝶に化し、自由自在に飛廻り、花英の興味を喫しといへ、其時胡蝶の心ふして、莊子の心はあらざるべし、覺て再回莊子より回れ、最早胡蝶の心と離れて、舊の莊子ふありたるなりされど夢のうちになりとも、一回胡蝶にならぬれば、蟲類社會の情態は、大概知られしものさうん、余はいまだ夢にだも、胡蝶にありたる事のなかりぬれ、其情態を知るよしなけれど、思惟小人間社會といふとても、貴賤尊鄙の差別ありて、各其社會の情態あり、夫すら容易にしれがたし、况て蟲類と動物中の、いとも微々なるものなれ、いよゝゝ其情態しれがたし、然あれ各造物者より、其飲食機官を興へられて、生々繁殖するを見れば、喜怒哀樂愛惡欲の、七情とてもあらざること、いあかるべま、冥索をま都つ

けて、年來好めるところより、蟲廻雙紙を編んと欲し、書には戯に腹稿を起しけるに、今回は活業の助けとなし、ぬ道は夢ふも思量らぬことなり、いどふかし喜夢にぞありなる、此草紙もねざめ草の、花も實をさきものなれども、胡蝶の夢の所縁により、彼の莊子が寓言に倣ひ、本草綱目を根據とあして、蟲の生質舉動を枝葉に繁茂らせ、世の童君達ふ愛翫されて、勸善懲惡の花を咲せん、鳥許ある作者が寐語と、見給へといふもの、東京青山の片部原驛に住む、菊は舎の主人東籬なり

明治二十歳彌生





吉丁蟲 キチンチュウ

皂莢木工頭房長  
息女 玉蟲姫 タマムシヒメ



火垂宰相 ヒタリサウザウ  
光明卿 クワミョウキョウ  
宇治侍從 光輝卿 ウヂノサマノヨロイ

螢天 ホタルテン  
和名 赤丸 ニホナカマ

以次郎 イジロウ



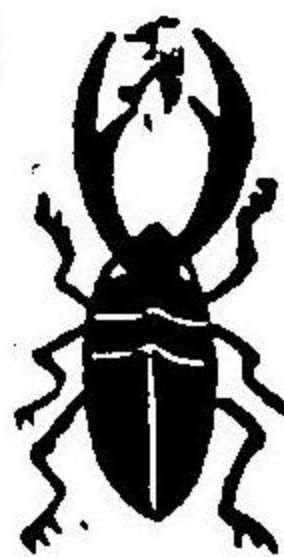
皂莢息男 ソウカクノノボ  
蟻蝟丸 後木工頭實房 アリゾウマル ゴノボ

天班忠仲娘 テンパンチュウノネ  
水遊 スイユ

初生蟻蝟 ハツシヨウアリゾウ  
和名 スクモ スクモ



飛生蟲 トビシヨウチュウ  
和名 カブトシ カブトシ



豉蟲 シウチュウ  
和名 カブトシ カブトシ







蝦蟇

和名  
ミミシ  
ルガ  
ニヤ  
ガ



貞茂家被官  
蝦蟇眼八郎

後  
沃貫

田父禪師

科斗

和名  
カハ



由利花介養女

阿玉

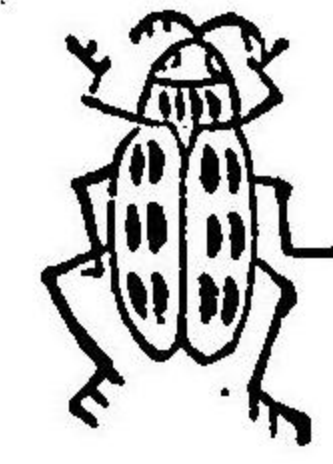


龍虱  
和名  
タシ  
コシ  
ウ

佐曾利全蝦蟇一子  
同源吾龍虱

吉丁蟲一種

和名  
マカ  
ハタ  
マシ



玉蟲姫乳母

松川局





天孫忠仲即世  
鋸蛭平一種



天孫忠仲猶子  
蛭螂推九忠郎





蠅虎  
和名  
ハヒ  
グモ

螳螂  
和名  
カマキリ

蜘蛛丸壁臣

螳螂左衛門  
齋通

竹節蟲  
和名  
タケノコ

竹節前平  
長成

全蠅虎九郎造  
跳高



龍蝨一種

呀蝨  
和名  
カマシ

由利花介養子  
呀藏  
二代目花介忠貫

蜘蛛和名クモ

女將土師蜘蛛丸綱則







目録

第一回

火垂尾茨姫を約す 井土師蜘蛛丸が性風

第二回

源吾水葦赤繩を過て家法を破る

第三回

後室の仁慈才子佳人を助命す

第四回

源吾栗津の列松に悪棍と戦ふ

第五回

源吾堅田に由利花介を訪ふ

第六回

源吾堅田に浪居を搦ふ

第七回

花介終命に望て妖藏阿玉結婚を

第八回

蜘蛛丸膽吹山に狩して怪物ふ會ふ

第九回

源吾浪居小眼病を患ふ

第十回

永莖苦節身を露で夫の眼病を治せしむ

第十一回

蛭螂被擧用て皂莢の寶器を奪ふ

第十二回

蝦蟇被捕て隠形の術を施す

第十三回



蝦蟇滑七九二六を荷擔て天龍太郎を誅す

第十四回

蜘蛛丸道に玉蟲姫を奪んとす

第十五回

蜘蛛丸鬼茨の館に夜討せ

第十六回

源吾館の焦土に主れ骸を探索む

第十七回

鬼茨主從石山に獨角仙に會ふ

第十八回

鬼茨主從仙洞ふ入て神藥を相傳す

第十九回

蜂菴地膽山に後妻を媒灼す

第二十回

惡漢毒婦姪姪を逞うす

第二十一回

蝦蟇水莖を購て山寨ふ歸る

第二十二回

蛭藏草津に水莖を訪ふ

第二十三回

冥野入江に怨魂奸夫毒婦を屠る

第二十四回

蜘蛛丸膽吹ふ城郭を築く并蟻螂們雜旋伎と塞て敵城に入る

第二十五回

蜘蛛丸が嬖妾阿菊別角幸介と密會す

第二十六回



石鷄尼佐曾利に松川が再生を告る

第廿七回

皂莢主從貌像を窺て味方を集め主從吉身に再會す

第廿八回

阿菊幸介館を逐電し蟻螂們主家の寶冑を奪返す

第廿九回

蜘蛛丸阿菊を責殺す阿菊ハ靈山女臍と成て蜘蛛丸と逢す

第三十回

蝦蟇苦計阿玉死を極て玉蟲姫を助く

第三十一回

蝦蟇往時を語て桑門に入る

第三十二回

皂莢義兵を揚て蜘蛛丸と戦ふ

第三十三回

蜘蛛丸誅ふ伏して皂莢家名再興す



凡例

本編は李時珍々本草綱目を本據として法橋寺島良安が和漢三才圖會法眼  
栗本瑞見が千蟲譜並ふ近世昆虫家の諸説を取り余が年來養蟲の實驗を加  
へて編成せるものあり

卷中人物の行狀ハ大概有益無毒の者を以て善人とし有毒有害の蟲を以て  
惡人に作る利害相半ざる者は始性惡あるも終に善心になりて終を全  
然れとも昆蟲として草木の爲無害なる者は稀あり其故ハ草木ハ昆蟲の  
生命を繋の食料あれハ害無さを免がれず本編は人に害なき者を以て多く  
善人に作るなり

本編は近江國を以て専らとして儘山城國宇治を加ふ還は吉丁蟲と螢火  
とは卷中の主人公あり螢火は本邦宇治を以て名物とモ第十八回 吉丁蟲ハ  
和漢三才圖會に江州及城州山崎攝州有馬多有之と云ふ本文ハ據る  
卷中人名モ漢名和名諸國の方言と其蟲の形狀舉動を捉て稱号たるものな

リ其解釋左ふ詳にす

○宇治火垂宰相光明卿並公達光輝卿 宇治ハ螢火の名所にて其形狀優美

ふまて黒く公卿の束帶の形容ふ似て身より光を放つに據る又幼名を光若  
鷹と稱号都て光の字を諱に置しハ源光公の血統を引されハなり

○北の方胡蝶前 此書發端夢より起れモ所謂莊子夢に胡蝶に化しとる故  
事より捉とる名あり

○火垂家の雜掌白髮治部太夫并一子太郎魚釣樟蟲の方言「シラカタラ」又  
會津ふて「シラガダエウ」と云魚釣と「テクス」を以て漁獵ふ用るに據る

○近江國勢田大領皂莢木工頭房長入道玄中 皂莢の實房長うして夫に生  
ずる飛生蟲の原蟲といふ意あり飛生蟲の原蟲を方言入道蟲といふ又「マン

チウ」蟲といふにより多田滿仲の後胤とす  
○内室姥玉御前 玉蟲姫の母公なれハ吉丁蟲の一種に方言「ウバヌマムシ」

といふ者あり故に如斯稱号く



○息女玉蟲姫 是吉丁蟲なり蟲体美麗ふして佳人の如く日本邦昔時より  
婦女鏡函に納て珍重をるハ恰も高貴の姫君深窓に養るゝに似たり本綱ふ  
曰吉丁蟲甲蟲也背正縁有翅有甲下人取帶之令人喜好相愛媚藥也三才圖會  
にハ婦女納鏡奩以爲媚藥用白粉赤粉藏之歷年不腐とあり又長明か四季物  
語八月の所ふ前畧此むしハやむことありささちあるものにて宮のさうにて  
何くれの汚つねねにを汚くしけの中白ふんの中にまろひてからハ人をさ  
へ野にすてためるならひあるに十とせはたとせ後までも汚ものの中につ  
ゝませをのせ給ふことよかうやうのものに雲井ふまうのかる下畧以上の  
諸説に據とまるあり  
○息男蜻蟻丸 是飛生蟲の初生蜻蟻なればなり蜘蛛丸の爲に夜討せられ  
一回没落して石山の山中に蟄居し獨角仙人の教により傀儡師と成て世に  
顯れ終に皂莢の家名再興したるハ蟲体の初生入蟄脱皮の變化を示すもの  
なり

○玉蟲姫の乳母松川局 吉丁蟲の一種方言「マツカハマムシ」に比するな  
り是忠勇の女性栗津の原に於て忠死す後蘇生して石鷄尼の從弟となり松  
川禪尼と名稱り愛智川清涼菴に住し主家回復の後神山神宮寺の住職とな  
る

○元老天班牛之輔忠仲 天牛の二字を分て然稱号く此蟲捕る時ハ必ず聲  
を發す其音「チウ、」と云故ハ諱を忠仲と号く世の人子弟に教るに常に忠  
孝の道を以す其習慣性となつて終に忠信孝悌の人となる此蟲体大ふして  
角あり身に堅甲あるハ恰も武夫の甲冑を帶るに似て常に忠忠の聲を發す  
以て番中第一の忠臣と爲す主家没落の後幼君を補佐し琵琶法師となり味  
方を集む其時天牛と改稱ふ是琵琶蟲髮切蟲の名あればなり

○娘水莖 鼓蟲和名「マヒ」ムシなり本綱に曰く此蟲正黒如大豆浮遊水  
上也華人此蟲を寫字蟲と号く本邦方言以呂波蟲又狀書蟲といふ水上以浮  
遊る形容艸書を畫に似たり本邦入木道を水莖の跡といふ且富國の名所



に水莖岡あれは如斯号く舞を工とに奏るハマロく蟲といふ起り夫の爲苦節して身を隠て妓女となり其眼病を治たるは高洪が肘後方に江南有射工在溪間射人影成病或口不能語身体有瘡取水上浮走鼓母蟲一枚口中含之便瘥已死亦活とある本文に據る

○佐曾利全蠟が一子源吾龍蠟 漢名龍蠟和名ゲンゴラウなり此蟲古池に多く生ず水面に浮て烈日に甲を乾して飛ふ活魚を捕へ肉を啖ふ岡書に水龜の名あり故に一回開隙を鑽牆を踰るの徳より主家を退き堅田に浪居して漁夫とあり源吾郎と改め琵琶湖に鯽魚を漁て活薬とを主家没落の時玉蟲姫を佐て回復の大功あり此蟲清俗之を盪醜して食用に供を又本邦羽州米澤の人醬油にて煮て喰ふ美味ありと云然れハ至極の益蟲なり余幼稚より此蟲を愛て翫弄とす故一一個の才子も作る看客作者の最負を笑ふあり

○佐曾利全蠟 全蠟和名佐曾利此蟲本邦嘗て無き蟲なれハ依て死者に作

る

○源吾が一子孫太郎 龍蠟の初生なり然れとも奥州ふて曰ふ孫太郎蟲ハ之より異り夫ハ水中大石の下に居る石蠶なり一名石下蠶婦といふ小兒小炙食しめて瘡を治す今暫く浴に隨て龍蠟の初生とするものなり

○蝦蟇眼八郎沃貫 漢名蝦蟇和名ミツチャガハル其形容に依て稱号る所あり沃貫息茨家の被官にして一個の英雄あれども始め好色懶惰なりしハ本綱に在人家濕處不能跳不解作聲行動遲緩の文をとり一朝寃を得て獄に繋られ身を遁ん爲に隱形の術を自得しとるハ抱朴子云蟾蜍千歲物上有角腹下丹書名曰肉芝能食山精人得食之可仙術家取用以起霧祈雨辟兵自解縛と以ふ文により主家退去の後行の活發にして野洲河原に滑七九二六們を從へ三上山に山賊天龍太郎を退治せしハ蝦蟇在陂澤中能跳接百蟲解作呷呷聲舉動極急といふ文と時珍が淮南子を引て蝦蟇青龜長蛇而制蜈蚣の文による行行品行端正にして野洲川を開拓し俚民を賑し人の艱難を救ひ竊



に主家回復を佐しは蛙屬常小田園の害蟲を食ふ事幾萬なるを知らる世に  
治益ある者あれは其善行を賞し普く人に知しめん作者が老婆心あり蜈蚣  
を制する後ち天龍屈の額を登藝仙洞と改め且功成て後ち禪門ふ入て田父  
禪師と稱呼せられしは時珍曰接王荆公字説云俗言蝦蟇懷土取置遠處一夕  
復還其所雖或遐之常慕而返故名蝦蟇或作蝦蟇蝦言其聲蟇言其斑爾雅作蟇  
蟇といふと又接文字集略云田父釋名蟇々蝦蟇也大如履能食蛇此即田父也  
功謂蛇吞蟇而有食蛇之鼠蛇制豹而有啖蛇之獾則田父伏蛇亦此類耳非怪  
也といふ文に據る天龍の蜈蚣の異名なれども字義は據る龍陀同屬なれは  
終ふ蝦蟇に制せらるゝふ作る從僕滑七九二六の蛙蟇の二字を分て稱号し  
ものあり後ふ野州川原開拓地の庄官となる

○侍女河鹿後石鷄尼 河鹿は俗名にして錦襖子なり谷川ふ住て秋より鳴  
ものなり河鹿始免沃貫の母に仕へ沃貫と密會して阿玉を産む後尼となり  
愛智川の邊に菴室を設け清涼菴と号す是其聲の清々亮々たるよより号る

處なり後具野の入江ふ蟻兵衛蝦蟇阿姐妃何の怨鬼を追福の爲に定念佛の  
菴を結ひ雨鬼菴と号く雨鬼ハ雨蛙の異名にして雨蛙尼蛙訓同じく且此頃  
鬼茨家の事小官係て一霎時俗塵に交りたればなり

○阿玉 科斗和名カヘルコ又オスマンヤクシあり是河鹿の産處にまて百  
利花介ふ養はれ後呀藏と結婚す玉蟲姫の危急に望んで身代に立しハ名陰  
自性といふべし守本尊阿彌陀佛の利益によつて蘇生したるは忠臣節婦の  
赤心を天監愆たざる道理を現す阿彌陀佛ふ作りたるは金花蟲なり其形状  
佛像に似るを以て方言(アミダムシ)といふ又手枕蟲の名ひり故に阿玉再生  
の後ち名を手枕と改め首赤兒佛像を阿玉釋師と法号を附けたるハ名ハ休  
を招くの語によれり

○百利花介 是水蠶ユリノハナスイ又ミカラヤカラあり此蟲水中ふ生し  
て魚子を食ふ夏日晴天の時石山ふ翅を隠して高飛す晚に至れば復水中に  
飛入る兩手螳螂の如く其身扁薄ふして肉なし故ふ身殼空の名あり青年編



妓に戀着して皂莢家を辭し大津の驛に餅屋を渡世とし後小堅田かたかに移りて漁夫とある一子なきハ身空みからなり阿玉を子とし呀藏あざを養て始て親族やうちの出来たるなり

○養子呀藏 龍蝨りゅうしの一種ガムシガムシなり是花介が兄の太鼓打たいこうちの子にして水みづ莖かきが乳母の田龜たがめが産處と太鼓打は水莖の属あり呀藏花介に養へれ阿玉を妻とす後に二代目花介忠貫たけつらと名稱り忠孝義膽にして皂莢家回復の一個なり都龍とら蝨しか因に據る處あり

○蛭螂推丸忠綱 釋名蛭螂しりし和名サラムシ醫師弄丸ろうわん齋の子ふして後に天班忠仲の猶子となる弄丸推丸の名ハ莊子曰蛭螂之智在於轉丸喜入糞土中取尿丸而推却之故俗名推丸とあり又時珍曰崔豹古今注謂之轉丸弄丸とあるにより稱号く推丸武勇拔群の少年よして館没落の際幼君すくも蛭螂丸しりしと名乗血戦したるハ本綱に此蟲深目高鼻狀如羌胡背負黑甲狀如武士故有蛭螂將軍之稱といふを捉て後に黒牛兒と名乗雜旋伎ざくせんぎとなり敵城に入り終に重代の

胃を奪返したる大切あり黒牛兒と本綱に載る處の異名雜旋伎ハ言方サラムシの名ふ起る

○天班あまびが郎黨のこり鋸蟲のこり平一種 是天牛の属鋸蟲のこりなり館落去の時主人忠仲の影武者とあり方戦す其蟲体の髣髴たれハなり後ハ八角兒と稱て推丸と共に敵城に入り大に功あり八角兒は天牛の別名なり

○茶道塵塚ちだうじんづか行夜 是行夜和名ヘコキムシなり粟津に蝨螂しりしの爲ふ殺ざる

○地膽山蟻兵衛 地膽ありのまの一種方言蟻親仁ありのまなり大津の驛に住を始博徒なりしが後に商となる蟻藏ありのまを養て子とす奸夫いさこ蝨螂しりし毒婦阿姐あね妃あねの爲に殺ざる

○養子蟻藏 大頭蟻方言庄屋殿殿篤實義膽の者にして養父蟻兵衛の讎を復し皂莢家義兵を揚る時土工隊を作り蟻屬馬蟻ありのま郎黒蟻くろあ作赤蝨あか平へい引て舊國司を助ハ逆徒平定の後ち其賞として大津の驛長とある

○草津妓樓葛上亭長豆屋班兵衛 是葛上亭長和名マメハンメウあり時ハ豆班まめはんと呼ぶ是妓樓に附ての滑稽なり



○堅田村々長蜂郎兵衛 蜂蟻の義をとる

○村民蚤蚰郎 異名入耳蟲といふを以て王蟲姫を訴入し後呀囃し殺さる

○姦將士師蜘蛛丸綱則 漢名蜘蛛和名「クモ」本綱時珍曰接王安石字說云此

蟲設一面之綱物觸而後誅之知乎誅義也故曰蜘蛛綱則博多小女郎の産處

にして筑紫權介蜘蛛人か子とす實は昔時源頼光に亡されたる土蜘蛛の一族

海賊蜘蛛太郎の子あり土蜘蛛の靈に妖術を授り惡逆暴戻ふして驕奢に慕

り終に國司息茨家を倒し近江一國を并呑し近江大掾ふ任す驕吹山に城郭

を構へ勢宏大なり後妖婦玄武蟬が爲に淫慾を恣にし嬖臣竹節節平蠅虎九

郎造が爲ふ弑せらる

○別角幸介高綱 絡新婦の一種方言「ベツカツコウ」といふ是土師足高が正

流ふまて權介蜘蛛人か實子なり賤女の腹に出生するを以て臣下となる一端

綱則が愛妾阿菊と密會し大に品行を愆といへとも本性篤實忠勇の人なれ

後綱則の危急を救ひ討死せんとして息茨家の廢れ庄園を賜て土師の家

を繼く是賊中の君子あり

○妾阿菊 縊女和名「オキクムシ」綱則の愛妾あり情慾の迷より別角幸介と

密通し終に綱則に責殺さる其靈玄武蟬となして綱則の勇威を折く松川露

尼か佛事作善に得脱して情夫高綱が後榮を導引く玄武蟬は縊女より羽化

したる者なり

○蠅虎九郎通跳高 蠅虎「ハイトリグモ」なり綱則か嬖臣主の惡意を助る姦

曲なる癖者なり綱則勢盡て滅亡の際竹節節平と侶に綱則を殺し息茨家に

降参すと雖とも其不忠を惡て誅らる

○竹節節平長成 竹節蟲あり是又綱則が嬖臣姦曲佞辨の惡棍なり跳高を

薦めて侶ふ綱則を殺し降を乞ひ終に誅らる

○蠅蚰左衛門斧通 蠅蚰「カマキリ」なり始名鐵切斧八といふ綱則ふ仕て重

用せらる智略膽勇あつて大に綱則を助く息茨家の寶冑を奪ひ且王蟲姫を

奪んとして粟津に討死す流車に對て辟さる俠勇是蠅蚰が性なり惡中の豪



傑といふべし

○砂場すなばた越郎こしろう 越こし和名「イサゴムシ」本編の砂いさご授子まねこを以て當つ性姦曲不慚の惡漢なり粟津原に龍たつみ蟲を惱なやせ後阿姐あね妃めかけと密會して地膽山ちたんざん蟻兵衛あひべゑを殺し其怨魂の爲に怪鳥に殺さる然れとも死しぶ望のぞんで悔悟し則すなはち知し狐この濫らん蕩たうを殘す

○毒歸どくかへ七節ななせつ和名「ナ、フシ」なり螳螂せうらう斧きりぎりす通とほが姉あねあり始め攝政家しやくせいけに仕て蜘蛛丸くまづめと内應し後退けられて地膽山ちたんざん蟻兵衛あひべゑが後妻となり阿姐あね妃めかけと改め越郎こしろうを密通ひそかえて夫を殺す夫の怨魂の爲に又殺さる

○石山寺いしがやま獨角どくかく仙人せんじん 獨角どくかく僊せん一角いっかくの「カフトムシ」なり唐山太古神農氏たんとくしんぬうしより出て漢末青牛道士の孫まごふして醫いふ通とほし仙せんとなる息茨いきつ家回復の功いさをと此仙の助に據る處ところなりを與へ且妖術を折よくの法を授く息茨家回復の功いさをと此仙の助に據る處ところなり

○大津驛おほつ針はり醫い蜜みつ門かど蜂はち菴あん 密蜂みつはち和名「ミツハチ」あり大津は針の名物なまものあれは針醫はりいに作る

○葛上亭かづかみの中居なかゐ阿氣樂あきらく 蝶帖てつてい和名「オケラ」あり

以上

本編に掲る處の地名なづな多く近江おうみ者所ものところふして琵琶湖八景びわこはつげいを始はじめ其他ほか多く歌集うたしむに入いたる者ものを載のす山城やましろの京都宇治きよとけううぢの外ほかふ出いず其證歌そのしやうかを左ひだりに出いす

近江國

膽吹山いぢふき 在栗本郡

藤原實方

後拾遺ごしゆい 此ことたにかひやは膽吹いぢふきのさしも草くささしもしなあしな燃もるも思おもひを

竹生島たけなま 在淺井郡湖中

法橋親教

拾遺しゆい 水海みづうみと秋の山邊やまのへを寫かしてかたはり廣ひろき錦にしんとを見る

唐崎からさき 在志賀郡 黒住社

大伴黒主

思おもひを出いて戀こしし兒こ時ときの初雁はつかりの鳴なてわたると人ひとのころすや

關せき 在志賀相阪

蟬丸

後撰ごせん 是この行ゆも歸かへるもわかれてわかれてわかれるもまらぬもあふさかの關せき

三上山みやま 在野洲郡



新勅撰 遙ある三上山をめぐり懸て幾瀬たりぬやすの川波  
三井寺 在大津

玉葉 をかむれを心の底に澄まざる三井の清水にうける月影  
相坂山 在松本濱

俊 頼

金葉 音羽山紅葉ちるらし相坂の關の小川小錦なりかく  
打出濱 在湖邊

駒なへて打出の濱を見渡せし朝日にさへく志賀の浦浜

栗津森

慈 田

拾玉 栗津野の尾花は風ふちりやうらてにるる露は笠にけり  
勢田 在栗津南

有橋百九十六間於是望湖上風景無双

比良暮雪

吹入雲分飛入瀾比良嶺雪暮紅寒  
輕舟短棹與何盡莫作剡溪一樣看

矢橋歸帆

雪はる、ひらの高根の夕くれのはなの盛にすくるところか  
釣竿朱熟白頭翁辛苦客船西又東  
幾度風帆歸去後呂公榮達一盃中  
真帆飛ひて矢へせし歸るふねはいま打出の濱をよどの追風

石山秋月

秋風蕭殺一天涯霜滿四山不帶霞  
古木回岩寒月影吟殘葉々霧中花  
以し山やにの海てる月影のあかまも浪摩も外なふぬかの

勢田夕照

沙鳥風帆帶夕陽夕陽人影與橋長  
勢田隱網東山月一色江天兩景光  
露くれもり山遠く過ぎつ、ゆふひのわたる勢田の長橋

三井晚鐘

湖面朦朧畫不成昏鯨高閣出園城  
霞間好是客船月十倍楓橋半夜月  
おもふろの曉ちかきとし矢そとまつたぐ三井の入相の鐘



堅田落雁

鴻雁幾行更不孤  
晚風帶月落東湖  
囊砂背水堅田浦  
猶是孔明入陳圖

粟津晴嵐

峯頂またこえて越路にまつちかき堅田に  
あひき落る雁かね  
嵐度粟津春興長吹霞吹雨似相狂  
山花片々一蘆浜湖上閑鷗夢也香

唐崎夜雨

雲はらふ嵐につれて百船も千ふねもなみのあはつにそよる  
漸澗湖光朝露晴玲瓏山色暮雲橫  
唐崎一夜摸稜手半作松風半雨聲

夜の雨に音ををとりて夕風をよそになたつる唐崎の松

大津

右近江八景

詩ハ相國寺林長老  
哥は近衛關白時熙公

志賀浦

在三井寺坂本間  
唐崎花園里唐崎の一松古跡

性 憲

千 載

いつとちかく鰲の高根に住月の光りをやとせしかの唐崎

眞野入江 在坂本北

金 葉 鷗なく眞野の入江の濱風に尾花波よる秋の夕くれ  
堅田浦 在眞野北

櫻谷

逢ことひかた、の浦ふ引あみのめふもとまふぬ我涙かな  
湖津南流自勢田此處落宇治川出

夫 木 に係てるや櫻谷より落來つる波も花咲宇治の足代木  
信樂城 田上川 前左大臣

新古今 衣手の田上川や氷るらんにはほの山風さへまぎるなり  
金 葉 都なほ雪降りぬれぬまかきさのまきの杣山跡とへぬらん

山田矢橋 在湖東邊山田在北矢橋在南

鴉てるや矢橋の渡りする船をいくたひも見つ勢田の橋守

鏡山

在守山東

黒 主

古 今 か、と山いさ立よりて見てゆかん年へぬる身は老やしぬると



老曾森 在鏡宿良

大江公資

後拾遺 東路の思出にせん時鳥老曾の森の夜半の一燈  
鳥籠山 在犬山郡

犬山のとこの山なるいさや川いさと答て我名もろそを

比良嶽

萬葉 さ、浪や比良の山風海ふけの釣するあまの袖のへる見ゆ

醒井

汲てしる人しもあふの醒井の清き心を哀とや見ん

多師山

散木 比かばりり泪の時雨色あれとなれさかふしの山を染らん

來増山

拾遺 我せこを死ませの山と人いへと君も死ませぬ山の名なうし

櫻山

家集 松う恵ふ枝さしかハす櫻やま花も千と勢の春や匂はん

小竹生山

名寄 田上のさ、ふれたるもしくるめり今や真弓の紅葉しぬらん

五十師峯

散木 白妙の花の梢をめぐりかけてはるまのみねを、りそわつふ

託馬野

萬葉 つくま野に生る紫衣ふ染いまとぎすして色ふ出にけり

水莖岡

古今 水莖の岡のやかさに妹のあれと結ての朝けの霜のふるかも

見遣岡

夫木 はるくと見遣岡の小笹原むすひやすらんちよの初露

萬木森

在高島郡

花垣里

光 俊



新續古今 白妙のゆふよとして、神まつる卯月に匂ふ花垣の里  
暗部里 在甲賀郡

俊 光

玉 葉 古に今をくらふの里人の世よふ越さる歩心をそつく

輔 親

安良里 唐人の願ふ心に近江なる安良の里のやまうけはかな

俊 成

吉身里 君賀代はよしみの里の民も皆春を待とや急立らん

俊 頼

家 集 承もせく玉津小川のとなめに思ふおもひふ面替りせよ

玉津小川 けふよりのあらふる神をあふしかき一歩抜川にそみそきしつれり

夫 木 名 寄 ちち川に岩みす棹のえもあへつ下す筏のいちはやきよや

余吾入江

名 寄 名 寄 ふはてるやよこの入江に波晴て月よと上に船風うふく

餅宮

俊 直

家 集 打はへてあな風さむの冬の下や山城は霜のをける朝道

山城國

平安城

秀 直

宇治川

君賀代の免くみあまねき春にあひて花の都そなへてさかふる

仲 綱

伊勢武者は皆ひをとしの鏡きて宇治のあしろにのりける朝

以上 寇中食物器具等土地の名産を載しは其下に産と記といへとも再是ふ出す  
記なきハ山城の國ナリ



近江國

荻籬 麻布 高宮 縮緬 絲織 長濱 葦草 染樹 日野 塗盆 朽木  
 磁器 信樂 城 銅釜 辻村 硯 高島 水品 煙管 升 圓座  
 八幡 鞍轡 草津 鞍守 山 鐵 針 大津 鳥子 紙 小山 江  
 鯛 織 鮒 源五郎 鮒 以上 湖中 鯉 勢田 山葵 獨活  
 納豆 觀音寺 大豆 名 蠶 大豆 赤小豆 名 大納言 山葵 獨活

山城國

天鷲 絨 緞子 金縷 緞子 綾子 八絲 緞 縮緬 京八丈  
 京都 郡内 光絹 紅梅 絹 鬘斗 目 鳥帽 子 袈裟 扇 伊影堂  
 弓 絃 釜 罐子 瓷器 清水 甜瓜 東寺 水菜 東寺 松茸 北山  
 茶 宇治 人形

特 12  
172

蜻蛉洲本草蟲廻雙紙

東京 菊廻舎東籬著

蟲廻雙紙

○第一回 火垂身茨婚姻を約す并蜘蛛丸が性質

日月常々昭明ならんと欲れども雲霧起り暴風迅雨到り光輝を覆ふ天氣定  
 まれハ再び又明なり人君仁政を施さんと欲れども亂臣賊士有て其明德を  
 覆ふ然れとも忠臣節婦其間に出て君を補佐ま終ふ其賊を誅し人君の人君  
 たる所以を顯る古今其例一なり昔時何れの御代にや山城國宇治の郷に火  
 垂(虫名)宰相光明卿とてやんとある兒公卿の御座ましけり其北に方は深草  
 の何某卿の御令妹にして胡蝶前虫名)と申ける妹君の御間いと睦しく  
 かしけるが光明卿年輪四十歳になり給へと御子一個だもなかりなれハ深  
 く歎せ給ひつ、北の方とも相談給ひて同國仲達寺(虫名)の虚空藏(虫名)菩薩  
 (蜂族)鶯花娘子甲蟲類米象ナレドモ假コ本文ノ如ク作ルヘ立願を籠三七箇



日參籠して深く信仰まゝに満ずる夜の曉井の左の御掌よと一侍  
の光明を放ち給ひ胡蝶の前の懐中に入と見給しは是南柯の一夢よして  
て後光明卿に語を給へん最欣喜給ひつゝ是正しく芥の納受し給ふあらん  
と未頼母しく思召けるが程なく胡蝶の前懐妊御身とあり月満て玉の如き  
男兒を産せ給へは御夫婦の歡喜大方なす芥の示現思合されて若君を光  
若磨と稱せ給ひ挿頭の花掌中の玉と慈愛幼育給ひたるに早總角の頃  
あり給ひて一染御姿の艶妖さに彼の光る源氏の君の幼稚も斯やありけ  
んと世人皆光る君とそ賛美ける伊年二八ふして元服し給ひ侍を光輝  
とぞ稱えける爰にまた近江國勢田の城に息莢(虫名)木工頭房長入道玄仲(息  
莢虫ノ原虫ヲ方言入道虫ト云コト稱せしハ先祖ハ多田滿仲又方言マンチ  
ウムシトモイヘリ)の後胤にして弓箭取てハ隣國ハ肩を並ぶる者もなく數  
度の軍功ハ木工頭ハ被拜朝家の御覺も芽出度ありたる殊に祖父顯光朝臣  
土蜘蛛(虫名)退治の軍功により禁中(虫名)金虫ナレトモ假に本文ノ如ク作ル

二 紙 雙 廻 蟲

より鐵甲に金鍔形(虫名)の前立打たるは兜蟲を賜り彼の蜘蛛切の太刀と俱  
ふ家の重寶として代々相傳を頭殿ハ二個の子あり長女ハ玉虫姫(虫名)と号  
け二男ハ蜻蛉丸(虫名)とぞ稱ける滿ハ欠る世の習慣此愛子十四と十二とに  
あり給ふ春の頃より頭殿病氣ハ罹り針灸藥餌の効驗なく終に亡くなり給  
へて奥方姥玉御前(虫名)を始め上下の歡喜大方なすを然とも斯て有べに  
非れハ葬祭禮式の如く懇に營給ひぬ婿姥玉御前ハ未だ三十歳を二つ三越  
給ふ程の年齢なれども貞烈の女性あれハ縁の黒髮切捨つ蜻蛉丸未だ幼稚  
なれハ家政ハ老臣天斑牛之輔忠仲(虫名)天牛の字を分て如斯名ツクに委任  
せ其身も俱ふ之を佐け能く二個の子を教育給ひたる天斑又無雙忠臣にて  
其上文武ハ秀しかむ幼君を輔佐し家中を撫育し旗下を懐て頭殿在世の時  
より家勢を少しも頽と晝夜心を勞しける光陰に關守なく玉虫姫にも早二八  
の春を迎へ生質いと美麗く容姿ハ芙蓉の曉を凌て開初るるか如く面は桃  
花の露を帯たるに似たり四時折々の衣裳の好む鳥雲ハ蟬の翼の如くに結

三 紙 雙 廻 蟲



なしたるに玳瑁の爪櫛の白銀の簪に映し振の袂に緋の裏したると肌膚の  
 雪を消かど疑ひ眼には秋の波を横へ指頭の尖細ある春の筈に依倚姿細々  
 として風に撓る嫩柳の如く態度風流よして風韻常あらざるの形容描まが  
 とく又畫きがたし其上天性才賢く讀書入木道はさうなり和歌絲竹の道小  
 も暗からず豫て宇治の公達光輝卿とは振分髪の頃よりして夫婦の結約あ  
 れハ早卿にも十八歳に成給ひぬれば迅く婚姻を整へて初孫の面を見た  
 し二つには鱗鱗丸か片腕ともあれかして老臣天斑牛之輔にしかくの  
 よし談合給ひ此件宜ふ計ふへしと仰れば天斑畏み了承り頓て宇治の御館  
 に赴き雜掌白髮治部大夫(虫名)につひて聞上ける小光明卿も御歌ひ斜な  
 うそ急ぎ吉日を撰み入興あるへしと萬端治部大夫ふ命し給へは白髮天斑  
 協議して幸ひ來る卯月八日と黃道吉日あれハ御婚姻の規式然るべしと兩  
 家其準備頗あり不題同國贈吹の庄に土師蜘蛛丸綱則(蜘蛛ノ名)といふ者あ  
 り其祖足高(蜘蛛ノ別種)といふ者土蜘蛛の一族なりしか土蜘蛛遺志を企て

蟲 廻 變 紙 四

火雷光明卿胡蝶  
 前一子を授り給ふ





王意に背しかは源の頼光朝臣勅命を奉し追討せられし時足高願ふ歸え一族をいみれ頼光は屬ひ軍忠比類無しかは逆賊悉く亡てのち膽吹の庄に所領を下され代々皂莢家の幕下たり嚮に土蜘蛛没落の時最愛の妻小喜母(蜘蛛の別種)といへる者あり既に懐妊てありけるを竊ふ落しけるに筑紫に以ぎ、か所縁あるををて彼國に透引れ一女子を出産けるが喜母の程なく没死て稚兒は所縁の者の掌小養育せしめけるふ夫さへ人肉經紀の手にわたり同國博多の遊里に活渡され名を小女郎(蜘蛛の別種)と稱けるが蜘蛛丸の父の蜘蛛人といふ者筑紫の權介ふて下りしとき小女郎に深く馴染任滿て歸洛の時小女郎を贖得て都ふ上りなる程なく一子を産ければ頓て蜘蛛丸と號ける實に蜘蛛人か實子にあらき小女郎博多ふありし頃情夫ありて其胤を妊せしが世に憚るとあれ蜘蛛丸の子ありと偽たるにぞ有ける左有る蜘蛛丸其質暴惡にして領民を虐げ過分の課役を取立て自己が居宅に造營の大廈高樓軒を列ね庭に名木珍石を置築山遺水小亭茶室瑠璃の

五 紙 雙 麴 蟲

綾馬腦の雪下駄百般の調度ハ和漢の器物を集め驕奢國司の上に出づ其上天性恣淫して謀計神の如く極て淫亂にして酒食に淫と美麗婦女を見るとさハ高門富門他人の妻子の差別なく誰彼となく召抱へ尙違背者あれば理不盡に引立て其暴謂ん方もなし酒飽足で皂莢家の息女玉虫姫に戀慕し同家の被官蝦蟇眼八郎沃連(虫名)に所縁を帯め金銀を以て之を懐け永語の歸を委託せしめ既に光輝卿と結約あれハ其儀調ハざるを憤りよしよし其儀ならそ吾又爲べき事ころあれ吾嘗て慈母の臨終に密言ふ聞たぞ昔時頼光に滅亡されたる土蜘蛛ハ正しく外戚の祖父にして吾當家の子とはあるもの、實ハ蜘蛛丸の胤ならず慈母が筑紫に有し頃人知れすかたらひ一情夫ハ蜘蛛丸と稱たる海賊の首領ふして大志を企北海西海を横行し去のびくハ味方を聚免ありなる一歳官船小夜討せしとき過て流矢に中り海庭に落入其儘行方しれざれハ止事を得ず蜘蛛丸に贖はれ實子と偽り養育せしよし左あれハ皂莢わ吾が爲ふハ仇ある家今迄ハ旗下に屬して有もの

六 紙 雙 麴 蟲



房長入道世を辞て蟪蛄丸幼稚なれ取るふ足ねぞ老臣天斑牛之輔ハ能く家政を佐れそ彼だに竊に押片付該家を討亡去吾此國の主たふんと深き望を思立寄々味方を集めける同氣需て隨ふ虫共鎌切斧ハ蟪蛄別角幸介蟪蛄九郎藏(以上蜘蛛ノ別種武野伏平(竹節虫)云んぞ言放蕩不類のあふれ虫躡も座邊小阿諛て御髭の塵を撫にける蜘蛛丸深く心小叶ひ四天王と呼なして蜂のこつゝ悪謀を企けるにぞおろろしき

○第二面 源吾水莖赤繩を過て家法を破る

爰に又元老天斑牛之輔ハ女兒水莖(豉豆)漢土寫字(蟲ノ名有本邦のノ字虫又狀書處虫ト云フ寫字ヲ和言ニ水莖ノ跡ト云フ故ニ仮ニ本文ノ如ク名ツクわ幼稚して母ふるくれ亂母の田龜(虫名)か手小養育七歳の春より奥方の侍座小召されつ、母のなき兒と愛憐給ひいと、不便を加へられ萬の愁も膝元にて自かゝ教導給ひけるに其性直質に賢て學ぶふとく上達しいと老實小仕へける今年は二九の憎からぬ容姿の其上に新曲舞に巧小して入道

蟲 廻 雙 紙 七

蟲 廻 雙 紙 八

殿にも無二個者と愛させ給ひ賓客ある其時は毎も酒宴の席上に侍らせ自慢こゝろに奏させ自己も樂とま玉ひけれを觀客何れを感激して皆水莖とハ不稱してみままいとこそ稱賛ける是ハ美事なる舞といふ詞を零語とるにてミコマ(虫名)の名ハ之より起れり同家中に天斑ハ同役にて先年没死たる佐曾利全蟪蛄(虫名)ハ本邦ニ無キ虫ナレハ以テ死者ニ作ルが一子源吾龍武(虫名)本年三七の春を迎へ器量骨柄人小勝れ文武の道にも暗らし又風雅ある壯俊ふて侍史務め萬端表裏なくものすれハ入道殿と始として皆未頼母しく思ひける水莖とは同館に生長て歳も二つか三つ越て四つやい(五)しか筒井筒振分髪(髪)の頃よりして假初の遊びの戯にも世帯與似る飯事(飯)のてふ(調度)似合た妹背振互ふ成長ふつけうら耻かしき若草の萌る思ひの深き(藻)に住虫のわれ(ら)判亮虫名(心)を警仕ふれども日毎夜毎(面)會た(び)焦る胸の草莖(虫名)いつその腐うちつけに言ふたか宜かいふ蝸牛(虫名)人眼も茂き篠薄穂にあらはれて諸共(憂)目や見んかさりとては



蠶 酒 雙 紙 九

如何可爲と爲左杜右女こゝろの遺悶あく昨日と暮し今日と過ぎ浮かぬ月  
日を送るうちに入道殿の病腦にて終に無果敢あり給へは上下の歎き大方  
ならず館は燈火の消しか如く手の舞足の踏所さへ差別もなき時節おれは  
自然と捉もゆるみける夫を宜ととは思ねど戀は曲者忍び寐の枕屏障に盡  
きたる鴛鴦の襖の羽重に巫山の夢を予結びける館の被官に蝦蟇眼八眼圓  
に口大く其上痲瘡のあどありて人假名して面斑(蛙ノ一名)と呼ふ顔に似合  
ぬ好色者後に眼ありながら先の見ぬへか戀の欲年も隣家の甚太より越て  
三十歳の豆男妻子もかへりまづくさのかず書よりも果敢あきはをもはぬ  
人をふた(こ)つ文字牛の(い)角文字直(し)文字錦襖子(蛙の一種)の鳴ぬ日はあ  
れと思深田の畔道に泣ぬ日とては無ものを你は情も薄月の見へて降夜の  
雨鈴(蛙ノ一種)これ如斯小手を突てたのむ(田面)の雁の假だにも色能返答を  
金琵琶(虫名)と枝垂か、れは水莖は捕て突退聲振はし是は無禮なり眼八  
し女子と設給ひてか戯言も程こそあれ不義密通は館の嚴禁知給はぬ事よ

も有まし不肖なれども吾慈父は國の政事も關る身尙白地に告たらは你的  
身の爲善有まし向後慎給ひねと言つゝ立んとする所を尙不戀に袖引止又  
搖口解を腌臢と蛙の面へ水莖か床に有合花器を捉てさんぶと投懸る折し  
も廊下に人來る様子咳嗽音の聞ゆれば眼八眼亂視せ腹立しげ小咽ふく  
せ口に喃々詮方もなくて次間へそ立歸る早夜も毎か更闌り月夜鴉も可愛  
も啼聲どひとしく響ある寝よとの鐘も物想ふ身に眼をへも春ならで涙  
かへりたる夜嵐に軒音信る、戸の闔も尙其人やと胸轟きうと立出る様の  
先き源吾は四丁願回して庭の切戸を忍入足音させじと泉水の飛石傳ひ遣  
寄を水莖見より飛立嬉しさ逢さかつとも口のうち互に掌に掌握合し掖れ  
入たる席上のうち暫時言語もなかましが源吾は漸く詞を發し玉章の便も  
數回けれど兎も角人眼の關多く相會ことも疎かりき今宵ハ幸ひ寸暇を得  
て漸く小忍たり告ねむならぬ大事とやら夫ハ何事ハ侍るかし逸く聞しね  
と褌急問へば水莖面をうち仰ぎ其大事とて彼の眼八顔面にも耻ぢず無休



の戀慕人さへ居らねばかにかくと妾を捕へて口解言與耻辱か、して呉ん  
どの思ふものから此方にも過失なきふらざるを了得強も難言て風の機  
と受流し居れば倍々衝上り今日も今日とて手籠の無禮愛事のみが直れる  
妾も斗り煩襟せ爾ハ此程疎々敷千束の文も参しに何とて忍び給へさりま  
ぞ不知顔にて居給ふと妾小愛相盡たるか他所小増花出来たるかと流石女  
の愚小歸り常の利發に引換て最怖け小怨ずれば源吾ハ嘆息つくくくと水  
莖の顔うちまもり夫ハ爾の得勝手左斗り恨み給ひとよ吾とてをなす煩襟  
ひ开も此ほどの疎々敷は先頃爾の尊父の月並講義の席に臨し日其之孟  
子滕文公の章闕隙を鑽牆を踰親の許可ぬ不義淫奔教戒られし語に至つて  
思ハ竹背に汗したり講義終りて人々も皆退散せられしかを吾身も暇を告  
んとせまに留て書齋又招かれつ、平常より一染打解て過來方の物語父全  
蝎か在世の切勞一々擧算へ終命の際又吾身上を顧み置ぬる時までも語り  
出づれ何となく常小異し教訓は身にひしくと打たる、釘無と新なる其

縁故を悟られしも亦知べからず就てつくく思案にハ互の心の感情より  
無理問どハなりたれせ吾のみならず備まで不忠不孝の名を取らせ人口小  
もかゝりてハ大恩受し尊父へ對し何と對顔あるべきや飽彼飽去小はあら  
ねども只是迄の譯とまも果敢みき夢を見しとのみ思ひ詰今日限り吾身の  
上とふつくくと思ひ切て給はれかしと言に水莖打難き其面じつとうちま  
もり男の心前楚と捕へ膝うち叩き涙を流しうハ一箇とて解え侍らす副  
の節の私言ふも翼比ふる鳥あつたの枝を連る木となりて終身苦樂を俱に  
せんといハれし事を虚憑ふ吾儕は樂しと侍るものを早晩御身の忘れ給ふ  
か薄情の人や薄媚や深山鳥を白鷺も我雄鳥を忘れざる事と女子の眞實  
なれ貞女兩夫に見不見といふ本文を有とか聞にき賤妾媒妁をまたずして既  
に夫婦の契約を御身と俱にせしなれば節行虧て有にあらざるやか、れを御  
身と縁切たりとも又他夫に嫁べき心は更に侍らぬあり這心緒を一点ほど  
も哀と思し翻さる賤妾が言事も聞て給へ又要事の二ッには過し月より氣



三十 紙 雙 廻 蟲

色生月経も見ずなりぬ環て覺悟と言なから陰方もなき身の上となり侍りぬとよゝと泣源吾は愕然とうち驚夫は仕舞たり你まで妊娠身となる上は三月四月は袖にも包めいつか五月人目にもかゝらば何と縋帯結ぶ縁は五の身の仇となりたる腐縁落て那里の浦邊にも身を諸共に忍びなばまた陰方もあらんかと言は水莖涙を止め仰所實に然あり初め逢見ぬ其内は一回思を成就し上は死するもやとか厭はしと想しものを今は將子送出来し身の因果流石に命惜うなり譬貧しく生活とも夫妻諸共營業て山に紫こる愛わさも川といふ字に世を送らは嬉しき事に侍かし左はさりながら指て行宛とてなけれと妻か乳母田龜(虫名)は片田の在の者乳母は速くに死去を其子係藏(虫族)といふ者はいと老實の性と聞く彼所を便に立退んか是て如何ならんとさゝやけを源吾は合點夫は宜らん差當ては路費の貯へなくては何共便あからん調達て明晩忍ばん你も心捕へして我音信を待玉へかし人たる悟られそと相語所へ離かは知らず隔の穢さと明き不義者あり其所勤

四十 紙 雙 廻 蟲

くなど大音あげて入來るは是なん蝦蟇の眼八なり二人は愕然今更に何と返答も言語なく逃るにも逃られず兎せん角せんと猶豫しが源吾と胸を居へ形容を改め是は蝦蟇氏能忽なり男女同席にあるを以て不義の嫌疑も尤なれども吾儂は若君の御用の筋申次べき事ありて斯相諱所なり左のみ怪む事かと言ハ眼八冷笑言譯暗き闇所に密會たる証據は夫れ魚家の軒端に釣しある鮫鱈の如く腹ふくだみ詮方なしに大それた館を立退密談を始終蔭にて立聞イヤサ立所に露現て御家の控釣し切近頃笑止千万かなどいハつゝ水莖を尻目につらければ吾亦人につらしとやら不義は家法の重き禁制杯と最前我にイヤサ我から言た口の舌乾かぬ内の此不始末流石國政を執事仁の息女の行状また搭別のものなりと自己か懸路の叶はぬ腹愈飽迄惡口嘲哂なし大聲揚て噎くにぞ與殿より女官の大勢何事やらんと馳集る中に局の松川(虫名)松皮玉虫ナリは源吾か叔母にてありければ何と言へき言語もあく忙果たるばかりなり



○第三回 後室の仁慈才士佳人を助命す

此時天斑牛之輔は表正殿に宿直して自己の詰所に憲法の書籍に眼をさらしつゝ、諸士の勤怠に心をつけ種々に工夫をこらせし折柄俄に奥殿の方騒しければ變事出来しと追捕刀馳付見れど娘の進退何と詮議も身の上計ひ兼て忙然たり夫と見るより二箇の男女ハツと斗ふ平伏て消も入度思ひあり天斑陀度思案を定免娘の襟上無手と捕へ側より引寄疊に扱付老の一徹双眼涙をろ、ぎ聲振立爾水莖たしかに聞け不肖なれども此父の御家の政事を委られ諸士の司と仰がれて其實罰を決するにも晝夜心を省て邪なかれと思ふ身の親の心は汲もせて重死御家の法度を犯し父が一世の忠義をも空しく顔に泥なする加之幼少より御側に召れし後室君海山重る御高恩忘脚あして自儘の振舞不忠不孝の人非人父か日頃の潔白を言譯せん覺悟せよと柄小手を掛ハツタト白眼まへ既に手打と見へけれど源吾ハるはやと押隔て其言譯ハ某よりと肌押服て自殺の覺悟後室通ふ聲かゝる圧ひ不

義の罪人自殺ハ叶はず慎んで成敗待よ又天斑も科ある娘私の仕置と憐あるべま寡婦自から旋を正さんと侍女共に燭とせ徐々上座ふつき玉ハ衆人ハツト恐入發令如何と扣へり其時後室蝦蟇眼八を屹と見遣玉ハヤヨ眼八よ其方儀は外様の侍表正殿を守護なして苦待等の怠を正す役目てありながう誰も免さぬ奥殿へ夜中の出入驚忽なり屹度沙汰する其時科亦輕き小非れど日頃の勤務思ふ故今回を別段咎に及す向後慎み侍るべし速く退出すやと宣ふ小眼八始て心付ハツト斗りに恐縮心ハ此處小殘れども主命難欺けれハ畏と表へ退ぬ跡見送て姥玉御前二箇を靜ふ打見遣温吾水莖よく聞ね若氣の過失とハ言なろう家の法令を犯せし上の定法の如く兩個とも我手小かけて成敗せんソレ一侍兒共源吾か兩刀召上て庭小曳居用意せよと言語ハ立派小宣へ源吾といひ水莖といひ幼稚より侍坐に置かれ慈愛も他小越れハ心中にハ二箇とも容顔容姿さへ心意ぎへ丁度揃ひ一能兒夫婦豫て様子ハ知るものかう時節を見合せ表向添せてやらん



と想ひも今なかく失望家法ふとて替られず不便の者やと思すれ  
ハ御聲音さへうち曇膝に降來る夜半の雨他所の袖ぎへ濡しなる婢女輩も  
年頃の懇意も深き二個か身の上氣の毒面に兩刀請取二個を庭に引立て芝  
生の上小座せし先ハ源吾水莖わろびれを兩手をつかへ言様言上るも恐多  
けれを法度を犯せし吾儂を縛首ふも可成を御手に下玉るだん冥加至極  
の御情此上の身の面目草葉の蔭より御家の御長久を請たてまつると涙  
ながらに伏拜み西に向て合掌を後室やをう御身を起ま切柄かなし白箱の  
御刀佩をとり玉ひ庭に下り立玉ひつ、又兩個に宣ふ機汝等二個が裁違ハ  
優らず劣らぬ忠義の者其功勞に報る爲此成敗が妹脊の固此世ハゆるか二  
世かけて夫婦となして得さすべし夫を婆の思出に心裂さそ成佛せよと  
振上玉ふ御佩刀南無阿彌陀佛の聲と共に首の前ふと思ひさや今を穿出に  
ちしほなす楓の指枝はつしと切折是も芽出の二個が死體親と叔母どに與  
するを後吊て得させよと服紗に包みし賣金虫名天孫松川に屬りつ、二個

に與へて落せよと謎に懸たる御詞解て二個が父と叔母流る、さかりの涙  
川かくまで深き仁惠何の世にかは報まつらん冥土黄泉の至嶋も左こそ難  
有かりぬべしと言は後室宣ふやう時刻や移る速々と御座を起して立玉ふ  
此時までも源吾水莖婆冥土の差別なく忙然としてありけるが氣付ても  
言語も出す四つの掌うち合せ仰上るつ、見上る面見願玉ふ御眼も涙に  
うるむ顔と顔ハツと二個は又平伏す婢女輩ハ前後を守護し腐の襖に入玉  
ふ四個の後影伏拜み涙に其身も浮ばかり天孫松川に眼成して服紗包み源  
吾の帯刀俱に携へ庭に下り立二個共靈あらば能く聞けよ義理分明の御成  
敗恐れ多き事ながら女性に稀なる御明断若人らしき心あらは只此儘に朽  
果てな一功立て埋木の花咲春にも逢よかし猶豫は重々恐れあり速く退け  
よと二品與へ小門の外に押出す二個ハ地上に謝居重々の御教訓骨身にこ  
たへ今更に言上べき言語ハ無れと御老体れし方々小許多の苦勞を懸たて  
まつり浮む瀬もなき吾儂あがら一功建る其時ハ何卒恩免下さるべし御身



大切に御長壽を願まつるも口のうち了得親子と叔母甥の切に断れぬ恩愛の血筋の御切戸口ハ夕ととて死る内と外父上あふと水莖か探る板目の子割より覗く此方に松川も必弱くてさし覗き烏羽玉の闇小顔さへ見へ分ねばこつへく溜涙泣じと爲せ女氣ふワツと斗りに打伏の道理至極と天班か胸にせえ來る涙を呑込めさと言語を勵して上への恐れ松川殿慎めされと言聲も曇りがちなる五月空山子規音信て八千度八聲啼渡り血吐ハのりの想なり

○第四回 源吾栗澤の列松に悪棍と戦ぬ  
斯而源吾ハ伏沈む水莖の脊を撫不覺の歎に時移り尙も人見ふ懸りあハ後室君の厚情に繋止たる玉緒を磨きも不取としあふハ重々の不忠なり唯此上ハ諸共小何所の里も落着て世の生活を營業て時節を待て御詫せん今宵にも備か言る、如く先差當り片田へ立越河藏とやらを憑て見ん夜明ぬうち小街道までイサ速々と急すれハ水莖漸く涙を止免腰帶曳締裾端折良

殿の方數回伏拜つ、立上手小掌を採て裏道より大津を指て落て行急とをれと歩行徒既まゐて水莖ハ切稚より御館小のミ成長歩行惜ぬ夜行疎に隠き木の根に折き歩行腦を源吾ハ屬し漸く瀬田の繩手道栗津か原の手前なる松原にこゝ差懸實に此時侯の空癖にて雨さへ頻く降出れば二個とはどく、因果ト並本の間を觀れば爰ふ些細き野茶店有是僥倖と馳入て四丁を見ハ蘆簾もて屋根を掛上小酒麩を置烈又三方を葦にて圍へり越の際もる點滴ハ此所彼所の土を穿ち左有共外にハ勝と濡たる衣裳を絞あさ爲内土竈の下にぶつくと音するに氣付ば誰の焚捨し掃火にや未だ消やうで煤居しが蘆を渡る夜風に燃付てパツと立たる火影小鷲ハ且歡び見れば側に並松の枯枝まで添て有是究竟の事小こゝ濡たる衣服を乾て來と枝折加て火勢を熾衣類を乾し手拭製て兩刀の柄を看せ互に帯なご締直す時に源吾の懐中より撲地落る服紗包急ぎ採上押戴仁惠籠し此賜物二人が上の命綱幸無人此松原拜見せんと解開ハ中ハ黄金二包各二十五片と發差別小



一個の紙包の紙端に後室の手跡ふて水莖へと記存バ水莖周章開き見バ石  
山寺の觀世音の御影ふ安産の護符を添又短冊一片有火影ふ爵祝ハ一首の  
和歌竹川のそしうち出しひとふしにふのきこ、ろの庭ハしりさや二個ハ  
鼻と鼻とを突合せ數回うち吟し不覺に涙はふり落啼呼勿休なや主君親の  
目を掠たる淫奔者なは憎まとも思われず行末迄の説諭毎に偶が懐妊も迅  
速知食されしか安産の此守大慈大悲の芥にも劣らせ給ハぬ御慈悲心肌身  
離せ持給へ又此黄金も二包あり分て持との御心ならん程遠のうぬ道な  
がう是も又旅にし有なれば非常の事れ無にも限らき一包つ、分配行んと  
守札と俱に一包を水莖の守袋ふ納させ肌ハ掟と着さする折かう人音がや  
くと此方を差て來る者あり源吾ハ驚愕包を手早く懷中なし屹と水莖に  
胸して立出んとする處へ撥夫四五個入來り先に進とし男を見れば年餘ほ  
ひ三十歳許月代の跡眞黒ふ延び眼圓に眉太く鼻は鷲の嘴の如く口方にし  
て青髭生ひ中肉にして脊高く色淺黒く骨過し體ふと辨慶綱の俗衣を着手

綱染の三尺を臂の先に締左下りに尻からげ豆絞の手拭を首の邊に巻付て  
鬼骨の大黒傘に挑灯屋文字に砂塙と書たるをさま銀杏齒とか名稱たる高  
やかさる足駄に芭運結といふ鼻緒を足の爪先に突掛懸現して歩行寄る  
後小續て入來と額を方に披上げて燈籠といふものふし頂ふ小曲結たるが  
女給のハツ口に茜の小縁とりたるハ七ツ下りの品物あるべし次ハ乱髪を  
草束ね突込といふものふして尻切の古番天又其次ハ突禿を月代の跡判明  
しハ俗ふいふ一ツ籠とかいふ物にて禍ひとつに持たねども身に懸たる  
荒布の衣鼻汁飲て歩行來る少し後れて空籠擔神社佛團の納手拭刻合せと  
るを身小纏ひ繩もて帯を飾丸き頭ハ賭録の負目に刺し坊主くり染る夜  
風を手拭に包廻せし角冠鬼の眼に持涙聲毎れも顔に一癖ありて言ねど知  
き狡猾者旅雲介といふ者ならん畢竟彼輩何をか爲夫は次を見て知ねかし  
○第五回 源吾堅田に花介を訪ふ  
借も先に進一一個の男は此群の頭と覺ま二個の男女を縦見横看何角心



中にうち領故意笑顔を縛て扱言やう若冠人々の夜更の旅行殊も足跡を周道玉ふ事故は大概推量せり時節悪き此天氣嘸のし困じ果玉ふゆめ幸籃興も二挺あり大津までの戻り駕籠乗て御足を休免玉へと言つ、後を顧て和郎等もどふで戻り道酒料で乗て進らせよイサ速々と進るにど遅吾の腹中に想ふやう此奴等吾儕か風俗を怪しみ酒香料をねたる物あらん何程の事ハ無れとも荒立てハ面倒あり体罷いふて外をにまかすと莞爾としてうち點頭諺にいふ世界小鬼ハあしとやう不見不識の吾儕をいと懇切に言る、を無に爲るにては無けれども是なる女の生賈ての駕嫌ひ吾身の元來旅好にて此街道ハ平常に馴たり幸雨止み夜明も近し結句歩行が氣散じある御等の緩々憩日れよイサ退ると立上るを彼男ハ抽引留駕に乗ると乗らざる共夫ハ爾等が隨意あり然し此茶店ハ吾儕が中間持合で建たる物あり小断て憩れしぞ宵にも皆の焚きして戻りの用意に埋火せし曲突の火さへを吾物顔に焚散し素面て此場を立出んとはいと虫の能人ふかな不知や目

己を誰ぞか思ふ大津の驛に人も知る砂場ハ伊三五郎(虫名射工)和名イサコ(ムシ)を見違して直簾張でも自己が家留守を附込我儘せし愛撥して失ふろふと打て扱て目に角たて尻引寒股の邊を丁々とうち叩きて方賢たり源香ハ憎しと思へども差當る理の當然いよく言語を和げて言る、感實ハ然なり有様は雨の夜道に因果不思馳込此茶店呼門しが人ハ不居折柄風ハ楕の火の燃移りしを幸に濡たる衣類を乾まく思ひ側ハ有合務さへ断なくして焚捨しは重々も危忽の振舞夫ハ幾重にも詫入ぬと言つ竹懐中へ手を指入彼一包の封そと切り小判一片採出し是ハ些少にハ有あれ急ぐ旅路の事ふして用意金とても薄ければ心計の今宵の茶料受納て玉ハれと伊三ハ五が前に差出せを男ハ阿々と打笑ひ三片や五片の目腐金貸ふ男と見違ハか懐中の金有限出地上に平伏詫して行くと傍若無人の振舞ふ源香は不堪怒を起し事穩便を想ふ故先刻より言語を賤うし事故を演れば街上り過言の數々武士に對て無禮至極品に寄てハ手ハ見せぬと感して此場を避れ



んと躰構の伊三五の源吾の容貌の優美あるに慢て何にちよございあ三一  
 野郎爾か鈍刃金にて切れる物あら肩まど腕まり切て見よと諸肌押脱とつ  
 か坐せを後に居並四個の擔夫手ふく息杖追捕て親分の出る幕には早の  
 り高の知れゝる欠落者叩き殺せと教團猛四個等しく取巻て打懸らんす勢  
 ひに今源吾も引ひひかれす一刀の鞘抜拂ひ水莖を後に圍て白眼つくれ  
 パそりや抜たへと四個の悪棍息杖振上免つた打源吾は括て空を打たせ掻  
 抓て人礫或ハ刀の胸打に向脛肩先打懸せ命まゝすの狭帯者尙不懲ふ打か  
 る水莖ハ最前より夫又過あらせじと氣を焦燥せ腔方あく有合小石木の  
 枝あど投付るを伊三は見るより小賤な女郎汝ハ此方小目算ありとつと斬  
 寄て引捕へ矢庭よ小脇ふ抱込て逸足出して駈出す水莖アレヨと叫つ、振  
 放さんと腕ども嫌女のかあしさの争兼し様子を見るより源吾ハ打驚き之  
 を救いんと馳出きを四個のやらと四方へ分れ道を遮り止たり源吾魚操  
 是迄と先に進し突禿か振込棒と受流し肩先丁と切込ハアツト叫んで向倒



佐曾利源吾  
 粟津の原小恵  
 棍と戦ふ圖



る後よと橙鬚が窺ひ寄て利腕を無手と捕るを身を沈まし振解つ、早速の  
脇當うんと斗りに平伏張を獲る二個の難敵と物をを言ハす逃て行得たり  
と源吾ハ伊三五を追駈救取んと馳出しが早八九段隔りて遙小聲のみ聞ゆ  
れハいよく焦燥て草駄天走り漸追すがり聲振立騙賊奴待と呼懸れ逃  
れぬ處ろと伊三五郎女を放し引歸有合並木の傍爾杭エイと引き抜さうち  
てかゝるをもものしや身を轉し眞向望て切つくるを得たりと杭もて受け  
たれど刀ハ業物手利たり杭を二ツ小断り折て余る切先き伊三五郎が鬚の  
外を切裂れ浅手なれども敵しがたく眞しぐらに逃出を逃しはせじと追駈  
て既に危く見へたるに伊三五と爰予一生懸命砂を括で投付しに源吾ハ用  
眼に砂入てたけたふ隙に逸足いだし命からく逃失けり水蒸暗く走寄水  
を此所彼所と需るに松並木にてあらざれを幸行涼のあるを見て先源吾に  
顔洗せ面部の汚を淨つゝ互に無事を欣て身繕して立上れを時を離る、群  
鴉聲はれくと啼つれて東方空天にあから引夜ははのくと明にける斯

而源吾水蒸は辿々て行程に道の側の傍爾杭に従是南北片田郷と記しあれ  
ば二個は嬉しく今は、や牙藏(虫類)許へも程遠からじと断連つゝ行程にあら  
る窺しげなる賤家あり左有共徴なる店を開き晩茶を煎て往來の客を花香  
に招牌の目標をいだし右手小環餅加久細の部類なる菓子菓子るいを安排へ  
店頭懸たりし方行燈に御憩所と記つけたり源吾は空を仰き見て早日も  
いたくたけたればいと空腹覺ゆるなり此處にて暫時足を休め牙藏か家を  
も問極て然して行かん店に立入り縁檔に腰打掛茶一碗給ねと呼門と置  
火の側に主と思しく年齢五十歳許の頭は半白していと壯健に思氣なき異  
の草鞋造りて居りしが手を止めて藪莖拂ひ詰來ませしと立上り木節もて  
拵へたる運草盆に火を入れてまづ一ふく召上べし今茶を沸騰させんと言  
つゝ脊戸を打見遣玉よ賓客を速く來よと聲に應じて庖厨より三五許りの  
小女か出來て二個に會釋して埋火はさて柴折加茶漙に染一筒茶碗へ汲で  
出したる山茶の養花竹折敷小箱の菓子能程に採分て此頃の雨積きに温ま



て味無思れんが點心に一個召れよと信樂焼の土瓶添回兀たる塗盆に乗て  
側に指置は身の荒布の筒袖ふ垢染しるど何となく愛敬づきし容貌育へと  
まれ宇治近き里と薫りにまられたり一ツ二ツ箸探て源吾の主にうち向ひ  
此邊に漁父を家業とする牙藏といふ者ありとなん其住居の何邊あるや又  
里程と何程ありと問は曳の不審顔されば牙藏は愛よりして十町許も濱手  
の方に漁師町と稱る處に母子諸共住たりしか牙藏か母の田圃(虫名)と言ひ  
僕の嫂にて一昨年の夏死去ぬ牙藏は正しく甥の事あり壯校一人住せりも  
心もどなき業なれば今ハ吾家に同居て今日しも漁獲ふ出たるあり夫を尋  
給ふ刀柄達の萬一も瀬田御館の御内人には坐すやと問返れて源吾ハ點眼  
實ハ吾儕ハ瀬田の藩中吾身の左曾利源吾と稱者是なる妻は同藩の天璋氏  
の女小して名を水莖といふ者にて牙藏か母の田圃ガ乳をもて養育られ  
る處女なり此度無嫌子細ありて吾儕館を退去せしと官給水莖を會釋して  
左様云譯で有なれば牙藏ぬしとの乳兄弟稚だちよと馴染も有ハ身の落付

を依頼ため遙々訪來つるなり聞て爾と伯父御とやら其人さへも此家に在  
どの盡せぬ縁予かまいと便なき吾儕が力となりて給はれど面耻氣にさし  
低ハバ主は急に謙退牙藏のみかハ僕にも大恩のある貴所方諸ハ貴君か佐  
曾利君ハ若旦那貴嬢が天淵君の令嬢かハハ不思儀の御來臨何ハとも  
あれ此所の端近事故ハ緩々言上ん先々奥へ御雙方を腰も輕げふみむ籍塵  
掃淨め奥の間の戸棚より出す花莖の裏表なき扱ハ田舎堅氣の眞實に見も  
飾りも荒壁ハ張列たる大津給ふ心の錦見へふなる二個ハ引れて席に着き  
先初對面の禮終り扱言やう語るも面無譯あがら今回退去の事故といふハ  
始をいへハ個様々々終を言ハしかぢのふて後室君の御仁慈もて命と禁止  
たれと主君小離れし羽拔鳥身の置處に困じ果たし近頃迷惑ハ察入さ百事  
談合を頼んと志たる途中ハ悪棍共小出會て斯々の事及ひ旅金迄も棄  
れたり然れ共半ハ水莖ハ懷中に殘たれど先當分の事足らん生活の道今よ  
りて能き小指南を頼入といと慰勉に手を突ハ主ハ急に其手を止先分に



たる其御詞先僕の來歴を一通御聞下され僕以前の館の足輕亡父の由利蟲  
藏とて尊父全蝎君の紐下なりしが兄の病身なるを以て能太敏を替古せ  
終に其業ヲ熟し竹生島の太敏打(虫名)とあり田龜か蟹とありたるあり僕十  
七歳の年續て兩親亡命の僕跡目ハ繼なれと叱人の無一人者像て好る力業  
角力或は腕力小手小たつ者の無程に自然と我慢の心生じ酒を嗜女小淫り  
毎度人と口論し打擲あどせし事あれば尊父君にも御仁慈厚く毎度御見  
下されまが馬耳東風と聞なして倍々暮る放狩に大津の驛の遊女ふうちこ  
み其女の事よりえて同役と喧嘩を生じ過失て撃殺ま終小死罪ふもなるべ  
きを全蝎君の御裁許ふて事穩便に濟されど中間よりの言立によと内々御  
金を下されて御暇の身と成るあり其時僕も疵を蒙り右の腕の筋つまり  
大ふ力の衰へしかば是より心も和さぬ女も其頃年明されバ角力中間の肝  
煎ふて大津の驛の棒鼻へ餅賣店を開きしふいつしの力餅と仮名して名物  
といなりたるなり後に住事十歳余り去れども妻の不産女にて兒一人はま

と思ふうち或時唐崎と通行し小松の根がたに赤兒の啼聲立寄見れを捨兒  
にて産衣の色も花色小裾山吹の染摸様まじくひたの摺箔し襦の紋福和名カ  
ヘテ「カヘルヲノツメナリ」の五所紅梅色の下着首に懸る守袋小腰帯と  
黄金の阿彌陀蟲とを納たり賤まき者の胤とも愛へす何ある子細のゐると  
や世小兒々しく捨けりと抱あぐれば懐にすやく眠る可愛さ小立歸來て  
灯影に妻と能見れば玉の如ある女の兒又さまじく小授りま兒なればとて  
其名を玉と呼おして乳母置程の家にもあらねは近所の知己に賣乳し春の  
朝の旅の粉夏の日永の湯と翌秋の夕の葛粉餅冬の夜寒の白雪香と丹精  
ひとつで育し守本尊の方便か虫氣もなく成人しか五ツの年に妻は死  
亡男曠夫と懶くて客應對も面倒と家諸共に店を譲り兄の所縁に此里へ移  
轉つ、小家を借親子暮しの氣安さ小於玉もはやく孝行にて送る月日も十  
歳越一昨年嫂の死亡て牙齦も吾家小同居させ妹上兄よと呼をれを從兄同  
志の水入す頼で夫婦と爲ん心如此譯にて候らへハ御両君共御恩ハ同じ人



て味無思れんが點心に一個召れよと信樂焼の土瓶添回元たる塗盆に乗て  
側に指置は身の荒布の筒袖ふ垢染しのおど何となく愛敬づきし容貌育へと  
まれ宇治近き里と薫りにえられたり一ツ二ツ箸探て源吾の主にうち向ひ  
此邊に漁父を家業とする牙藏といふ者ありとなん其住居の何邊あるや又  
里程と何程ありと問は曳ハ不審顔されば牙藏は愛よりして十町許も濱手  
の方に漁師町と稱る處に母子諸共住たりしか牙藏か母の田圃(虫名)と言ハ  
僕の嫂にて一昨年の夏死去ぬ牙藏は正しく甥の事あり壯俊一人住とるも  
心もどなき業なれば今ハ吾家に同居て今日しも漁獲ふ出たるあり夫を尋  
給ふ刀柄達ハ萬一も瀬田御館の御内人には坐すやと問返れて源吾ハ點眼  
實ハ吾儕ハ瀬田の藩中吾身の左曾利源吾と稱者是なる妻は同藩の天璋氏  
の女ふして名を水莖といふ者にて牙藏か母の田圃ハ乳をもて養育られ  
る處女なり此度無據子細ありて吾儕館を退去せよと言射水莖を會釋して  
左様云降で有なれば牙藏ぬしとの乳兄弟稚だちよと訓染も有ハ身の落付

を依頼ため遙々訪來つるなり聞て備て伯父御とやら其人さへも此處に在  
るとの盡せぬ縁予かまいと便なき吾儕が力となりて給はれど面耻氣にさし  
低ハバ主は急に謙退牙藏のみかハ僕にも大恩のある貴所方借ハ貴君か佐  
曾利君ハ若旦那貴嬢が天淵君の令嬢かみハ不思儀の御來臨何ハとも  
あれ此所ハ端近事故ハ緩々言上ん先々奥へ御雙方と履も輕びふみで符塵  
掃淨め奥の間の戸棚よと出す花苴の裏表なき扱ハ田舎堅氣の眞實に見も  
飾りも荒壁ハ張列たる大津繪ハ心の錦見へふハ二個ハ引れて席に着き  
先初對面の禮終り切言やう語るも面無譯あがら今回退去の事故といふハ  
始をいハバ個様々々終を言ハしかまのふて後室君の御仁慈もて命と禁止  
たれと主君ハ離れし羽拔鳥身の置處に困じ果た近頃迷惑ハ察入ハ百事  
談合を頼んと志たる途中ハ悪棍共ハ出會て斯々の事ハ及ハひ旅金迄も棄  
れたり然れ共半ハ水莖ハ懐中に殘たれと先當分の事足あん生活の道今よ  
りハ能きハ指南を頼入といと慰勉ハ手を突ハ主ハ急に其手を止先分に過



たる其御詞先僕の來歴を一通御聞下され僕以前ハ館の足輕亡父ハ由利盡  
藏とて尊父全嶋君の組下なりしが兄ハ病身なるを以て能太鼓を替古せき  
終に其業ヲ熟し竹生島の太鼓打(虫名)とあり田圃か蟹とありたるあり僕十  
七歳の年續て兩親亡命ハ僕跡目ハ繼なれど叱人の無一人者像て好る力業  
角力或は腕力小手小たつ者の無程に自然と我慢の心生じ酒を嗜女小澄り  
毎度人と口論し打擲あせせし事あれば尊父君にも御仁慈厚く毎度御異見  
下されえが馬耳東風と聞なして倍々募る放狩に大津の驛の遊女ふうちこ  
み其女の事よりえて同役と喧嘩を生じ過失て擊殺去終小死罪小もなるべ  
きを全嶋君の御裁許ふて事穩便に濟されど中間よりの言立によて内々御  
金を下されて御暇の身と成るるあり其時僕も疵を蒙り右の腕の筋つまり  
大小力の衰へしかば是より心も和さぬ女も其頃年明されバ角力中間の肝  
煎ふて大津の驛の棒鼻へ餅賣店を開きしふいつしハ力餅と仮名して名物  
といなりたるなり爰に住事十歳余り去れども妻ハ不産女にて兒一人はま

と思ふうち或時唐崎と通行し小松の根がたに赤兒の啼聲立寄見れを捨兒  
にて産衣の色も花色小裾山吹の染摸様はくひれの摺箔し襦の紋(堀和名)カ  
ヘテ「カヘル」テ「ソツメ」ナリ)の五所紅梅色の下着首に懸る守袋小臍帯と  
黄金の阿彌陀蟲とを納たり賤まき者の胤とも覺へす何ある子細のゐると  
や世小鬼々しく捨けりと抱あぐれば懐にすやく眠る可愛さ小立歸來て  
灯影に妻と能見れば玉の如ある女の兒又さましく授りま見なればとて  
其名を玉と呼あして乳母置程の家にもあらねは近所の知己に黄乳し春の  
朝の旅の粉夏の日永の湯とぞ粥秋の夕の葛粉餅冬の夜寒の白雪香と丹精  
ひとつで育し守本尊の方便か虫氣もなく成人しか五ツの年に妻は死  
亡男曠夫と懶くて客應對も面倒と家諸共に店を譲り兄の所縁に此里へ移  
轉つ、小家を借親子暮しの氣安さ小於玉も以て孝行にて送る月日も十  
歳越一昨年嫂の死亡て牙藏も吾家小同居させ妹よ兄よと呼せれど從兄同  
志の水入す頓で夫婦と爲ん心如此譯にて候らへハ御兩君共御恩ハ同じ人



目も遠く片山家草の軒端の幽況も月の風景はたかしきふ無心置御出世の時節來迄坐ませかしと最頼母しく聞ゆれば二箇の嬉しく心安堵源吾の味を進つ、不計き叟の索性吾幼少ふて父に後れ事の上さへ知ざりし不思此家小笠卸しも父が靈の導玉ふの今より叟を父とも頼ん心限あくせられよと永物語りに時刻移火燈し頃ふなりければ暫時許蒙りなんと庖湍の方へ立出て燈臺取出し灯を點じ皿につきとす魚油さへはづれ筋の臭中此時牙藏は表より番と網とを擡もて荷ひ伯父よ今戻りしよ今日は平常より得物も多く間屋の仕切も多あれの諸白伯父に買て來り番に魚も獲してあり阿玉よ鱗ひれて俗も食ねと言ふ花助願て思しよりの早りき家にもこよなき賓客あり和郎の年來案ト居し瀬田の嬢君の來ませしと言ひ牙藏ハ驚て夫不計事にこそ今朝の鳥啼のいと善くて茶柱さへも二ッ建しハるの兆にやあつらんと言つ、草鞋の紐解て霞の子縁に回り來て嬢君能あそ來ませしと稚馴染の遠慮なく明る障子を待兼て水盃周章立出て懐し

二十三日 紙 雙 廼 蟲

の牙藏ぬしと互ふ見合を面と面十歳越したる對面ふ先づつ物の泪あど牙藏ハ源吾を見るよりも急に容を改めて初見參の禮をなす花助源吾小引合せ彼ころ牙藏ハ候なれ片田舎の野等育辭義する作法も知ざれ共只正直が一徳なり御目懸られて給はれと言ひ源吾の會釋して委細ハ叟小問へ置ぬ能に厄介願入と禮を返せを願て庖湍の方へ退出りつく、其容姿を見れば年十八なれと大體ふて丸顔なれとも鼻筋通り眼ざし清く愛敬あまて月代廣く刺明て奴鬚ふとりあげまの興ある髪のか結ぶりなり鳴海紋の筒襦伴ふ柿澁染の手甲脚半腰簪結し出立は其活業こそ履ければ何處ふの威ある生質激ざれを禮讓あま氣輕して言語少く未頼母ハ兒壯俊と見送りてこそ居りける暫まて出居より阿玉か運び胡挑足の襪二個居雙へ跡に續て花助が心を生地の廣蓋に鋼鍋盃洗取揃へ嘸物はしう思されん何がな奉らんと存され共心に任せぬ片田舎されを魚ハ湖水の名産生鮮が御禮應殊小昨夜よりの御心勞御禮散小酒一盞過させ給へと差出ハ源吾ハ頼に

三十日 紙 雙 廼 蟲



手を當て是は種々の心遣近頃痛入たるな左有折角の志吾情を少の用也  
れにいぎ馳走小預からん先段よりと差戻せの花助席を進つゝ給るべきか  
本筋なれと今宵の主振に御毒味せんと阿玉に酌を取らせつゝ、衝と吞干て  
源吾も呈そ源吾また主に返せは今回も水莖ふうち迎ひ好せ給いぬかハ存  
糸とも馴ぬ夜道の御心遣雨にもいたく濡給へハ濕氣拂の大妙薬平に過さ  
せ給へかし斯言ては無禮なれと是迄は何不足なくましゝても又何角に  
就ての御心勞今よと吾家小居給ふを御縁も深き湖水魚妹と脊こゝの鮎鱈  
世間晴ての御夫婦か千代を壽く雀焼頓て和子君産給へハ家内の數も六々  
魚手前味噌かハしらねとを其濃漿の羹の冷ぬ契りる願ハえん牙齧も速く  
來て嬢君へ御馴染早斐に御酌せよ阿玉も一盞御相せよと口小調子を取寄  
質朴なれと物馴し昔もぎそと花助の色ハ覺ても香そ残る響應振の眞實よ  
二箇ハ頻に興ふ人いたく醉を發せしハ再三再四辭するものから花助漸  
く盃を納め飯を薦る汁平の主心も根來未ふ赤心見ゆる響録ハ厚き馳走と

織獨活小きみか情も見へずきし散し卵の黄漆に塗箆を先捉擧て盡情に興  
完れハ宿衣さへ取出て今宵ハ早く寝まじ給へ願ハ實の子の向ふあり兼足  
にてハ釘浮雲し足中召て行玉へ御用も有ハ遠慮なく掌鳴去給ひねと阿玉  
がのふる敷物の皆親々の余光ふて身巾も廣き三布蒲團二箇か上に覆たる  
五布蒲團の客夜着は領垢つかず温氣に旅の勞に熟眠せり  
○第六回 源吾堅田に浪居を構ふ  
夏の夜とまだ霽あがら明ぬるをど彼の深養父が詠せし如く早曉を告むた  
る家鶏の垂尾の長からぬ夜は朝に明はるれ東の空にあかねさし敷妙のた  
への木枕取収め眼敏は老の癖主人を疾より起出て雨戸探明箆拵下り立庭  
の籬の梅もはや黄熟つゝ、梅雨あけの晴たる空に有明の月は眞白に影残る  
山の方よりとなやか小音信て行く子規箆を杖に仰見る眼よし耳よし給は  
固き勇健は人の一徳なり頓て朝飯も濟ければ源吾は花介を座敷に招き昨  
夜よりの心遣を深謝し措言やう諺にもいふ如く郷に入ては郷に隨へて吾



儂か姿の人目だちて宜しからず土地相應の衣服を求又家屋もあらば肝煎てよと頼めを花介思索して何迄弊家に居給ふとも夫は厭ひ侍らねどもまあじい店も開きて有る人の出入も臆腫ければ宜ふ處も至極せり幸隣地も明家あり近來まで醫師の住てさうらうが都の方へ赴とて村長許にて買求め未だ明家にて其儘あり廣からねども奇麗にて湖水へ望む小座敷ある田舎あがらも物好なり價もさのみ高直からじ僕村長許へ赴て事の故を嘲て見んと納戸に入て脱更し縹の袴の晴着衣へ手製と見えし太織の焦茶の帯の香も高く胸元に引結び鬚の颯を搔撫つけて半履引穿その儘に踏出す足と共侶に手鼻拭宛咳嗽一つ、村長許へ出行ぬ正午すぐる時歸り來て門口より聲高きいと上首尾なり歡び給へ僕村長に言やうの無禮なれども刀禰達を甥夫婦と装誣て家を求さきよし言入し小彼方にもいと歡ばれて明家で置バ火も浮雲なし叟か親戚であるかふの席筵陳も其儘に厨器財もちとのあり買得し直價小讓るべしと快く承諾れ直價も至極下直ければ買求

ることに取り極侍り歸路に折善くも大津から來る故衣商に行會たれば是もまた戻りに寄る筈なり牙藏よ和郎へ阿玉を誘て隣の家を掃除せよ梅雨に讞たし明家あれば今日の天氣に風透せと萬事抜目のな兒老人偕又源吾にうち向ひ刀禰には村の童等に素讀手習を教へ給ひ嬢君小と裁縫絲竹なよくれとなく教へ給ひ、兩君の活業には事充分に足あんか村長許も五人組も皆僕と懇信なれぬ追々事を計ひあんと其日の何くれ用意して翌日隣家へ移轉ぬ湖水へ望む禰室を源吾の書齋と定めつ、まづ其所に落着たし水莖と馴ぬ厨房の賤業も樂し兒夫婦匹偶朝な夕々に音信る、花介親子を力草別て阿玉と女同志咄敵に永の日も一日二日と居馴て初て心安堵しうば四方の好景も眼も止り家の後を眺れば空に鐘し此嶽山時いま夏の初あれを峯にの残の雪を頂き實に白銀の鎔もて繋くか如くよりりて比良の嶽まで打續き風猶冴る山下しされと湖水の穩な風さへ夏の未刻下り眠氣登しに欄檻小倚て湖上を眺る折しも牙藏の魚を手も提てこへ朝潮に漁し鱒の



魚いさなふて侍るなり夕飯ゆふめしの料りょうに當給あたいへと言いつ、内うちに進入しゅいる二個ふたこの欣よろこひ會釋あひらして日毎ひごとの禮らいを述終のりり別わかて源吾げんごのつれづれの能よに折まりと引留ひきどめて和主わしゅの所ところに産うれたれば其名そのな所ところも委くわからん見渡みわたを所ところを敷しへてたびねと問とハ軒のりのうち笑わらて土地ちちにハ生産せい侍れとも諺ことわざ曰い燈臺とうだい下閣げかくし能よくも覺さへ侍まりねとまづ試こころ又また言上ごんじやうんと東南とうなんを指さして船ふねの往來わうらいの絶間たつげんなく曳ひや綱引あひひの梓弓あしゆみ矢橋やばしより來くる渡わたし船急ふねいそがハ廻まれ勢田せいでんの橋はし近く見ゆるハ元山田もとやまだ少し東あづまハ八幡やつかたの郷さとこれぞ當國たうこく第一だいいちの繁はな花はなを競まふ福地ふくちにして其産物そのさんぶつハ眞綿まゐわた麻布あはぶ蚊帳あぶら疊たたの表おもてなと諸國しよこくへ送わる入船いりふね出船でふね集あつる港みなとと思召おもしめせ「源げん湖水こすいに浮うふ島山しまやまハ「野のあれる名なふ負おふ竹生たけう島小島しまこ幾個いくこか隔へだりて遠とほく見ゆるは竹たけの嶋しま「源げん東北とうほく遙はるかハ隔へだて雲くもふ鐘かねへし高嶺たかねハ如何いかに「野のあれるさしも名な高たかき挿さ艾あ生せいふといふなる船吹ふねふ山やま少し此方こゝに黒々くろくろと圓まるく見るハ三上山さんかみ昔時むかし藤太とうた秀郷しゆけうか亡なし玉たま去い大蜈蚣おほむしハ此山こゝ住すたると今猶いまなほ世俗じよこに彼の山このやまを百足ももぢ山やまとぞ言いなり露つゆに隠かくれて見みへねとも米原まいはら彦根ひこねハ良よき縮緬ちぢめん織出おを長濱ながはまハまた其後そのちに當あるなり海津うみづ鹽津しほづは

八十三 紙 雙 廻 蟲

正北せいほくハ當あり湖水こすいの末すえハ沼ぬまふ續つき越前えちぜん敦賀とんがふ出でると聞きぬ湖水こすいハ南北なんぼく二十四里にじゅうよんり東西とうざい七里しちり狭せまき所ところハ僅わずかに一里いちり湖中こちゆうに産うる魚うしほ鱒ますハ江註えぢゆ鱒ます鱒ます附別ふくべつハ味あじよし鯉こいハ勢田せいでんの名物ななふつなり此湖このうみハ往古かうこ一夜いちやに涌出わいしゅつしと里俗りじよくハ言いれど其故そのこゝろ委ましく知しる者ものをハ刀禰たうねには諸しよの書見しよみ給たまへハ譯やくの始末しじまつ知食ちじくされん教おしへ給たまへと問返とこたせハ源吾げんごハ領りやうきされハとよ吾情ごじやうも深ふかくハ識しねとも書かて録書りくしよを見しとと有あり人皇にんかう七代しちだい孝靈かうれい天皇てんかう五年ごねん乙亥おつゑ近江ちか國地くにぢ拆湖ちか水涌出みづわいしゅつし駿河しゆんが國富くにとみ士山見しやまみハると云いふをりながと此事このこと日本にっぽん記きにも載のざる處ところ民俗みんじよくの稱說しやうせつにて信しんずるに足たざれども往昔かうかよとの言傳ごんでんあれハ敢あて捨するにも及およばじ疑うたがはらくは草味くさあじの時ときにあたりて雲霧うんむ深ふかくして外ほかより見えすこの時晴ときはて見みはれしやまた其始そのしあらをして後突出のちしゅつしゅつするものあり所謂しよゐん人身にんじんの癭瘤しやうりゆうの如ごとしこれ等の例れいも多おほくあれハ夫おつもまゝ知るハのらん夫おつと博士はくしに會あひ尋たづねし其後そのち人皇にんかう十二代じふにだい景行けいかう天皇てんかう十二年じふにねん八月はつげつ二十四日にじゅうよんにち一夜いちやに島始しまして見みれ二岐ふたぎの竹生たけうす故ゆゑに竹生たけう嶋しまと名なづく其竹周そのたけしう一尺いちせき今剪いまきて什物しつぶつとあすといへり磯石いそいし氷品ひやうひん等の寶珠たうじゆ多おほく島の周圍しまのくわい

九十三 紙 雙 廻 蟲



ふ群蛇游行す文章博士大内記都良香といふ者此島小詣で詩を賦して曰く  
三千世界眼前に盡と下句未だなす其夜の夢小神女出見して告曰く十二  
因縁心裏空と良香の都腹赤の子當時秀才儒にして文人なり菅原相繼廣相  
臣勢文雄等と時を同そ貞觀帝に仕へ桂下に至り翰林に秀つ元慶三年小致  
す古譯本朝寶祿及ひ家集小ありと説聞されは牙藏はしきりに耳を傾れ味  
の進むを覺へざりしがいと嬉しげに額て僕田舎に生長て漁るとには巧な  
れを習字ひとつせし事なれば眼ありても本節同様吾名も書得ぬ明盲幸  
ひ刀禰に値遇して斯る所以も承りぬいと臆腹と思されんが今日より活業  
の余暇にせめて毎夜も學びたし教導き給はれと眞實而小顯はれて頼  
聞えバ源吾は喜悅夫の能き心懸に侍るかし吾儕素より淺學にて人を教る  
才となけれを學の央とかいふ語もあれは識たるだけと相談せん不審き譯  
あらちちとも遠慮なく問れよと互に實意を盡し合ふ心もあつて夏の日も  
黄昏近く夕風の湖上にわたる小浪や志賀の浦邊に照月も心限なき朋友三

個をゆる夕飯も對膳に腹赤の魚の炙物志賀菜飯のよろし酸小酒三盃を傾  
て晝の苦熱を忘れけり

第七回 花介終命に望て姪藏阿玉結婚を

借も源吾夫婦と花介か肝煎にて村の男女の童を集ひ素讀習字を教導き水  
莖は女の童に裁縫の業を教へ中には豪家の娘などハ新曲舞を習ふも有り  
て富るにハあふざれとも其日の食を欠にもあらず心長閑けく暮をうち  
つしか夏往秋の來て菊見月の中旬にいたり産の氣つきてやすくと男兒  
を生産ければ夫婦はさらなり花介親子もうち歎ひ其名を孫太郎(虫名)と稱  
號つ別て永莖ハ初産の案よりハ安うかに重荷卸せし心地して掌中の珠  
挿頭の花と鍾愛幼育るに幸に乳も太く敷而男兒ハ育憎き者なるに虫氣も  
なくて健に生育つ、冬去あらず玉の春も來て霞薄麻四方の山木々の梢も青  
葉して名乗出たる子規迎梅雨五月雨の空また晴て氷無月の初旬の頃より  
花介か不圖中風の症發り身體麻木言語不通牙藏阿玉を源吾夫婦もうち驚



きつ、介抱あし種々療養を加へしるも僅に病の怠りて言ことのみ通しが身偏ハ猶自由あらず日増に瘦勞を覺へしるを四個ハ交代枕邊に附添吾夫婦を去年よりして杖柱とを憑ふし恩人のよとなれハ眞實の父に仕ふる如くいと懇看病ハる或日源吾は童等の誓古終りて入來り牙藏阿玉に會釋して七夕祭の捧物教兒等ハ淨書させいま時やうく仕廻たり夫故今日ハ訪ざりし皆の衆も晝夜の看病殊にきよのふけおの殘暑の強き賑か一勞を覺つらん今宵ハ吾情引請て朝迄更を看護へし心安堵て寝り給へ水莖も孫達て能く饋して疾く寝給へど夫々に休息て一個花介の枕邊ハ立寄顔さし眠けハ花介はすやく眠てありけれハ驚かさせしと靜小座し枕頭ハ蚊遣火を裾の方へと押廻し燈臺の灯を挑つ、熟々裏面を詠れハいと雙傑の老人も一月余の病腦ハ肉落骨露て亦活へうもあられハ源吾ハ不覺歎息未ハ年齢とても耳順の央一つ二つ越しのみ今四五年壯健ふて置た死ものと思ひしが此瘦勞にては覺束あしせめて吾僕ハ身體も今一回世に出て安堵

させての上なうバ善るべきに心中に想ふ折しも花介ハ出る候共ハ眼を覺し刀雨にてわたらせ給ひまか晝夜ハ厚き御介抱冥加に餘る老か醫の逆も今回ハ存命ハあるはず就てハ僕ハ一つの願ハ憑參らす件ハあり候て知食す如く牙藏を今年ハ十八歳玉も破爪ハなりました此冬頃ハ祝言させ除障渡にても自願えて庄屋との初め組合の懇意の難彼招よせ繼目披露をした上で彼等に自代讓與へ心安堵て初孫の顔でも見しと思ひしも今ハなかく虚願ハ明日をもしらぬ此腦せめて吾眼の黒きうち歪させて死たく侍り思ひ立ころ吉日なれ丁度明日ハ節句あれハ赤小豆飯でも焚て焼灼れたく庄屋との小立會憑と結婚たハを濟せとし刀雨ハ近頃無禮あれを翌朝村長節へ行給ひ此件訂ひ給われし候死去侍りなれば未た若輩四個の者弟妹と見らなハして行未力を添給は、思置事ハなるべしと起んとすれと自由ならず重き枕を漸小首のみ極て頼つ、泪ながらハ物語る息も絶けよ咳いれは源吾ハ湯煎の藥を吞せ睡壹與へ脊中を摩心願きと言給ふな爰は



平常に氣性者年齢さへ未だ老朽たるといふもあらず時候も追々涼しくなれば今も本復あるべきなりされども偶が安堵のため牙藏ぬしの祝言は明日目出度行ふべし又彼の二個と吾儕とは過世も深き縁なれば叟か憑みがなくとも豫て兄弟と思ふて居れど夫は此方より望ましけれ何にまれ氣を痛す心豊に養生して疾く本回を祈るなりと慰られて花介はいと嬉げに顔うち詠め唯一向に何事も任用せられてまつる宜し計ひ給ひねと跡と勞てまた眠る秋の夜ながら更闌てはや曉も程近く唄ひ連たる家鶏の鳥も八聲をあげぬれば源吾は靜に二個を起し霄に花介が依頼し件を言聞せ吾家に戻りて水莖にも件の心を得させなご兎角するうち夜は明ぬれば急ぎ村長の家に到り花介か代理に訪たるよしを言入て一伍一什を懇問へ懇應とてはなけれ共叟か心を慰ため一重に來臨を仰ぐあり言ば村長も承諾して午後罷出侍るべしと約束なして歸り來る家には水莖精悍しく孫太郎を脊に負て叟は生殿義理堅けれとど何くれと料理して膳部調へ村長さのにも

薦んと厨支度も調へこまづ阿玉も浴させ髪とりあげて結直す心のうちも圓鬘に眉毛は赤た落さぬと染る其齡も吳竹の千代のふしの粉鐵漿つけて今日予一世の時粉粧此母はろろか二世かけて妻と鳴海の單物袂か手繰の綿織も心裏なき丸帯ふ能似合たる花嫁子牙藏も手織の單物高宮麻(名産)の夏羽織親重代の讓物支度もてうご揃ひし頃村長蚰蜒兵衛(虫名)入來たり元し柄櫛に取添し魚は湖水の江鮮夫婦まつはど濡るてう祝ひの印と會釋して花介の枕邊ふ皆夫の座小着は源吾夫婦の心得て心勇く掛出る米盃の時繪ふは契も堅き巖に鷹羽を翼斗匏接ハ下酒のゑるし松葉壽留女ハ千代八千代俱小白髪の老松に巢をくふ田鶴のやがてしも善子儲て子々孫々の榮へ壽く目出度やと訛聲をはりあげて謠ひ柏子つ村長も酒充分に酔しかば廻らぬ舌に義理辭儀叟にも無かし嬉しかうめ今霄ハ天河を星合の天下晴ての新枕まつ僕と開きあん鹽梅加減いふやうお兎肴の限り貰て行き媽々の悦ぶ貌見侍うめと捉出したる塵紙の塵を遺さでおし包む澤家に環縁



を取着濕融らぬ懐紙の厚き馳走と辭し畢り頼く折に羔の碗に頭をうち中つ側くま、に翻る、汗の鼻頭につきたる味増精に雜る膏味の面粉菜玉露被りし池の鮒の泥も酔さる如くにて眼々踏々として退出り花介の重き枕も嬉さに病苦を忘れて極つ、源吾夫婦に扶け起され納戸に煤けし古櫃より脇差一腰提出させ借牙藏にうち向ひ柄箱拵の籠籠あれと心劍の志津兼氏なり親の譲の此品一個瘦田壹枚あき家の譲り甲斐なき事ながら血筋系る叔父甥を今日改めて聲引出妹脊親睦暮せかし阿玉もまの心得て稚兒馴染の従弟同士嬌て愛想尽さるゝな只此上の佐曾利君の兩君を親兄弟とおもふへて行末永ふ隨従まはれ刀雨の運命の開けなは汝も勢田の御館に仕へ足輕ながら譜代の筋目由利の家名を再興恐む言べき事い是のまあり之にて心安堵とりと混と枕ふ着たりしが再び起も得上らす漸次に衰弱ゆに終に文月十日の夜眠るか如くに息絶ぬ四個の今更驚かれて只管歎き悲しめと斯てあるへきにもあらざれを其趣村中へも爲知けるに常に花介律

義にて人交際も善りしかは皆うち集ひて懇ふ野邊の送りを營ける  
○第八回 蜘蛛丸膽吹山小狩して怪物に會ふ  
夫人は萬物の靈長にえてよく物を使役し物に制せらるゝ事なき常理なれども稟性姦惡にして暴慢の心生ずるときは魔君怪物其處に乘し詭の奇怪を爲そ事ありと爰小土師の蜘蛛丸は時今彌生の中旬過里の花は早散れど山には残る遅機岩踰も咲出て麗なる天の色野遊ふ程よき季節なれば熱兵かさへ膽吹山に狩倉せいと朝早より用意して列卒を四方に配りつゝ鎌切斧八其他の従者を隨へて先其日の出立の蜀江形の純子の半臂に赤地金襴の決拾かけ白羅紗小金糸もて蜘蛛の具織たる陳羽織小純子の小袴に熊の皮の行膝つれ足に六ッ乳の武者鞋をひき亦銅作の蜻蛉丸と号たる太刀小弦巻かけて佩ひ切羽の征箭を背貝の鞆に廿四指たるを管高に負て意藤の弓の正中握り髪白の茸毛の駒に金覆輪の鞍置かせ緋の厚総の鞆かりて紫の手綱のひぐり裏金端反の陳笠を頂戴々講々と訂たせたる其行儀



國主の符倉に等し先膳吹神社を本陳と定む抑此山は昔時日本武尊東征より還尾張小到給ふに近江國膳吹山に荒神ありと聞徒行し給ふ小山神大蛇と化し道にあたる尊主神の蛇も化しるを知給ひを還必荒神の使しめあらんと既に主神をたふ殺得ば豈其使者を求るに足んやとて蛇を跨て行給ふとき山道雲霧大に起り尊迷て路を失給ふて心醉るがとく身體煩悶し離れ至て清泉あり此泉を飲て始て醒給ふ故に醒井の名起れり尊の佩給ひし劔ハ乃ち紫蓋鳥尊八岐の蛇の尾より得給ふ處のものなり其蛇の靈窟物を獲んと欲して尊の道小當りしなり後神に崇て膳吹神社と云ふ貞觀元年正月廿七日神位從五位上を授給ふ他評休題つ此社内にて勢勅し山裾の能き所に待場を構へ合圖の狼煙を上ると等しく列卒は四方小鯨波を合せ貝鐘太鼓を打鳴ま割竹を持って叩立く狩出を小猪鹿免狐狸途を失て馳出るを待設たる射手の面々東西に馳せ南北小駈り遠矢にかけて射るもあり近く寄て突もあり思々に働くに予蜘蛛丸頻に興ふ入自己馬を乗出し獲物多く

八十四 紙 雙 廻 蟲

有ければいと誇顔に見へる時山間の茂林より白猿一頭飛出たり蜘蛛丸一拍入て驅出し勁勢強と發矢の狙ハ驚て射損じたれば二の矢を射て追駈さまふ又射れど其矢も終小中らねむ心いよく魚操て彼方此方と追回し道も難所に至りしるば面倒なりと馬乗捨て尙其跡を尋行に白猿は強ち逃もせず木小登り岩小攀鳥の木の間を傳ふが如く終に姿を見失ひ初て心着て後を顧れば續く從者もあらずして貝鐘の音も遙く隔る風のままにまふ聞へければ是ハ慮の外深入したりとつて返をに嚮ふは白猿を獲ま欲して道なき所を追來しなれば方角さらに辨かねて遠音に響く貝鐘を心當り歩行ける小漸にして樵夫の通ふ徑に出たり是なん盤小出る道さうめと爪先下り小辿りなるが行さもく麓に出ず路はいよいよ狭くなりて左右小熊笹生茂り一つの溪間小迷ひ出たり既ふはや日は昏て月は暈小樹間を照せど道滑小歩行勞れ殆困果たればとある岩か根に腰うちあけ益なき物に掛合らひて愚猿きと仕出たり开も此所は何國ならんと四丁を佐と眺れば

九十四 紙 雙 廻 蟲



十五 紙 雙 廻 蟲

弓手は絶壁高く聳ち雨過て天青壁小運じて潤ひ風來ての松玉屑を卷て  
寒く山勢奔騰して逸馬の如く水流屈曲して驚蛇に似たり妻手に少しく  
平坦ありて老松古杉枝を交へ蒼蔚と茂り合寂鬱たる樹林の裡に細小なる  
祠あり年歴にければ柱蔀は風雨晒され眞白の上小茸を生じ茅葺屋根は  
朽傾て青苔泥と生滋り何の神を祭るにかと歩行よりつ、社頭に至り半朽  
ふる濡椽お足踏かけ裡面を倩視みるに別小神体と覺しき者なく其形ち脚  
蛛に似たる大石壹個あるのみなり實や深溪幽々と遠にして氷西谷小壑き  
彩雲岫を出て清風洞に入道谷もし魑魅魍魎の栖あらずは定て是れ惡神魔  
君を封じざる處なうん何にまれ今宵ハ此所に一夜を明さんと膽太くも座  
を占て不覺慢々地と目睡と兒孫よくと喚者有り蜘蛛丸愕然と驚き覺て  
四丁を巖と見回すいと怪まき老翁の鼻幹口尖り眼の光りの金色ふてい  
と強惡の相貌にて頭より手足小至まで針の如き白毛斑に生ひ身に木の  
葉を蜘蛛の糸もて綴なせるを纏ひ手に一巻の書を携へ彼大石を上小座ま

一十五 紙 雙 廻 蟲

たゞ蜘蛛丸佩刀の柄に手を懸てやをれ汝は何物ぞ吾此山溪に迷入り心恍  
惚たる虚に乘し狐狸の淫かさんとする所爲あらん眼に物見せて呉んやと  
白眼詰てぞ居たりける其時怪物の完爾として打笑ひ噫勇一、一、吾汝が  
勇敢を愛して態々此所まで招寄しぞ心を傾て能開ね吾ハ昔時源頼光に亡  
されたる土蜘蛛が怨鬼なり此處ハ吾死骸を埋し處妄念山氣に和して人民  
を腦せしかを但人祠を建て神小祀れとされども怨恨尙去らず息災家に仇  
せんと思ふまゝと年久し然るに彼家希代の珍寶あり夫は蜘蛛切の太刀と鐵  
形の冑となり殊に冑の前立ハ閻浮檀金をもて作りたれハ幽冥の怨鬼近若  
と能す汝此二品を掠奪して深く秘置ときハ吾又彼家小入込で禍を爲さん  
汝彼家を押領せん志能く吾意に適り凡大志を懷もの助あくてハ協まし味  
方を集免敵を挫に究竟の一術あり今汝に授へし是を行ふときハ人を縛し  
其身を隠し又毛髪を抜て呪文を誦願敵に向て吹と死て大勢の分身を生  
先呪文を授くべし近く寄ねと招つ、其呪文ハ斯こそあれヒソアテラ(讀



翅族レビドプテラ(鱗翅族)オルトプテラ(直翅族)ヘミプテラ(半翅族)コレオプ  
 テラ(甲翅族)チウロプテラ(羅翅族)チアテラ(双翅族)荷嚙訶又其術を収納る小  
 文ありアランテユ(蜘蛛族)と三回唱言なりと教ける小森智に長たる蜘蛛  
 丸ちれば忽ち其文を暗記し試に印を結んで颯頰に忽ち山川鳴動し雲霧  
 四方に起り毛髪を抜て吹けれハ幾個の分身出現して進退駭引心の儘る  
 又解文を唱れハ忽ち雲霧收り分身吾に歸る不思儀と言も恐あり蜘蛛丸滿  
 面に笑を含み是は難有祖父君の慈愛斯る奇術を授る上は某不肖ハハさう  
 ちへさも志を勵して彼家を討亡し修羅の怨魂を晴すへし御心安く思召と  
 以ふに怪物又曰く汝若年にして好色の癖ある夫婦の結婚ハ人の大聚なれ  
 ハ許すべしされども大ひに淫奔に流れ且驕慢の心起るハ却て其身を害す  
 へし勉旃く」と曰かと思へばは一炊の夢にして身は松か根に安座して今  
 迄ありし祠もあらねハ驚死怪むこと限なくされども呪文は少しも忘れず  
 不圖側ハ一窓あれば捉上月影に透見れば是を魔術の秘書あれと是は夢に

紙 雙 廻 蟲

二十五

蜘蛛丸膽吹山  
 土蜘蛛の靈  
 會





して夢ならそ正しく祖父の怨魂吾に秘術を傳へしものあり感辱しと數回  
をし戴き塵うち拂て立あがれは數多の松明振照し大勢の人聲するを近侍  
みれば鎌切始め從者の誰彼主の在家を索かねて此谷間に來れるあり見る  
より互に無事を悦ひ其所を尋るに騰吹山の山間にて蜘蛛谷といふ處なり  
と主從打連て麓に出れば夜と朝に明にけり

第九回 源吾浪居に眼病を患ふ

歡びあれは悲みあり有爲轉變の世の習ひ牙藏夫婦が婚姻誓ひ歡ふ間なく  
親花介は死去て葬禮より引續き新盆の魂祭り迎火焚て靈柩に備ふ運の花  
介が記念に残る戒名の紙一片に替れども其像は眼み添て捧る物も在し世  
に嗜好の嗜のみ兎角四個の袖袂乾くひまみき朝露を浸して今日も水壺夫  
婦孫太郎を脊に負て香華院に至りつゝ布施を喜捨して讀經たのみ塚小詣  
て卒土婆を建しかして歸る道すから急に暴風の吹發り霖を飛し砂を吹立  
眼に入て堪がたけれと堅田浦の濱づたひの廣き沙漠の事あれと患ふべき

家もなく泣る孫太郎を賺つゝ漸家路近くなる頃霞の如き雨降出しが漸次  
に烈しく降酒ぎ夫婦ともに混濶にて辛じて戻りしが其夜よりして源吾か  
両眼痛強く暫時も開事能ざれば水壺始め牙藏夫婦もいたく心を悩せつゝ  
醫師といふも片田舎の接摩兼ての庸醫ふて果敢々しくもあらざれば買  
薬あさして療養するうち痛腦の追々去たりしが兎角見事の怕明けれと押  
て教兒等に物教へ手本なき與へしが葉月の下旬ふ至りて混と見るとの  
ならせして全く盲とありされを又今更に驚かれ宜と以ふ程の限り種々と  
手を尽せしが蟻ほどの利目なく愁悶て居りしか大津の驛に名醫ありて  
殊に眼病ふの神功ありと人の薦に嬉して急ぎ牙藏を走らして乞招ども生  
憎小最尊大の醫師にて里程遙なき村落へ駕もて此方より迎へねへ來る  
となしと言ふより止事を得ず立戻り翌日鑑輿を昇せつゝ漸ふして運來れ  
り醫師の慈しく座に通り兩眼を篤と診察て偕又舊の座に歸り扇子を丁々  
鳴しつゝ咳しつゝ言やうは是の一通的眼病あらす一兩年も其以前に砂瘴



の入り件あるべし其後大ひに心氣を勞し既小發らんと兆せし處へ過日の  
暴風小砂入て終小引出せし難症ふて所謂内障といふ症なり殊小療治を手  
延なれハ壁者婆扁鵲の神醫といふとも施すべハ術あるべし併我家秘傳  
の妙法あり一回之を服する時ハ天稟ての醫者なすハ如何なる難症とい  
ふと雖治ると疑ふ去ども一つの難事といふハ藥物一品難得ものあり萬  
一稀小有とても莫大の高價なすん迎も施を事能ふまじと苦りきつて演け  
るにぞ夫婦ハ大望を失ひ忙然としてあまなるが水莖膝を進せて思ひし  
よりは夫の難症譬得がと兒藥物にもせよ天地の間に在る物なすハ必ず得  
まじきをのにもあらず先其奇藥ハ何物あるや念晴しに承ととし聞し給へ  
と尋問ハ醫師は領き如何にも左なす其奇藥とは純白の鱈魚なり其肝を取  
り他藥に加味し一回服用なす時ハ開明なる事疑なま若其藥品の手に入ら  
ハ和殿等の幸福ありと忽々にして戻りしかハ夫婦を初灸疔藏阿玉も何と  
いぬべき言語もなく忙果て予居たりける源吾ハ頻小歎息し嚮小醫師の言

五十五 紙 雙 廻 蠶

る、には一兩年前砂毒の入たる事あるべしと夫に就思當れり去年の奉月  
館を退去せし時小栗津の列松ふて悪棍小出會其巨魁ある砂場の伊三五郎  
どかハふ奴を既に仕留んとせし時に彼奴死者狂に砂礫を投かけ吾面上に  
打當て終に其場を逃れ去が其時ハ左のみにも思はさり一に一年半余も過  
去て今此難病に罹りしも色情に迷ふて主親の眼を闔ませ館の法度を破り  
たる其罪已小出て己に歸る是則天命なりあまじ後室君の御仁慈にて命助  
かり其時前非は悔れども後悔先にた、ざる壁の如く如何とも詮方なく時  
節もあらハ一功立謝罪せんと明暮に思しものを淺問しや斯る言とあり果  
て世の活業もなり兼る身の果如何になるものと悔の八千度かこち言同  
ト思小水莖が夫の心慰かね何といふへ兒言の葉も泣沈て予居たりける牙  
藏夫婦も貰ひ泣二個の心中推量り愁然として有なるが牙藏を眼を數叩き  
涕うちかきて言るやう刀禰の仰もさるふとあがら一端過失を仕給ふとも  
大逆無道とぬふでハなす夫ハ表向成敗濟御館様の御仁慈にていハ再生

六十五 紙 雙 廻 蠶



紙 雙 廻 蟲  
りし兩君なれば其罪報ふ譯もあるまじ只一時の災厄にて新く難病を受給へど全く治する法なきふあらず壁高價の藥にもせよ世ふある物であるからん心を込めて索るば掌に入事もありあん僕嘗て聞しふとあり當國竹生嶋の辨才天の眼病擁護の御神にて昔時仁明天皇承和元年慈覺大師四十一歳の時眼病久しく愈ざりしに或夜神人枕頭に現れて靈藥を與て曰く我是竹生嶋辨才天ありまさにこれを服用すべし且修法護神の爲我本形を遣すありと夢覺て傍を見れん辨才天の小像あり乃ち大師感歎肝に銘し彼靈藥を服するに眼病立どて依ふ平愈せり後日此尊像を竹生嶋に送り奉る今安置する處則是あり斯る奇特をあるあれば内室に明日よとて僕か船に乗れ彼御神ふ祈誓をかけ日參な一給ひあは壁奇藥は手ふ人らそとも神力と不可思議なればあと感應の無べきしかせさせ給ひねと平常の牙藏に似も着す詞消しく説薦れば二個の大に力を得て是全く御神の告させ給ふも知るへからそ爾なりくと心を決し其翌日より水菫は氷若離して身を深え

紙 雙 廻 蟲  
八十五  
蛭藏か船に乗られて竹生島へ詣ける源吾の居間の欄干を探りて脚寄目は見へねども心當島の方を禮拜み眼病平愈を祈る抑此竹生島の當國淺井那に屬せし湖中島にして其頃天台宗の慧僧持にて本業寺を稱へり祭神の稻倉魂命(素盞烏尊御子鎮座辨才天女一名妙音天女千手觀音は行基菩薩の御作にて西國順禮第三十番の靈場なり聖武天皇天平三年竹生島の神大内小出現す行基又詔し辱くも天皇行幸あつて天女の寶殿を造しめ並又忍穗耳命大己貴命三社を祭し免又阿彌陀觀世音の金像を作りて以て本地佛となす相州瓊島藤州嚴島奥州金花山陵州富士山常國竹生島共ふ是辨才天の靈場あり偕も水菫の社頭より寶前小頼て一心不亂に合掌し夫の眼病平愈を祈り仰き願ひくの大慈大悲の神力を垂させ給ひ三七箇日の間に功現を露し給へと探返しつ、祈願り夫より日毎忘る事なく參籠をとげに

○第十回 水菫若節夫の眼病を治す



至誠感神といへり人苟も誠をたれば争でる神明佛陀の感應を蒙ること無  
ふんや借も氷莖は日毎怠るふとあく參籠なしけるが既ふ早二十一日目に  
もなりけれども未だ藥も掌に入らず夫の病も別に宜といふにをあらねば  
いと心を腦つ、猶一層志を勵し今日ハ彌滿願あれば今宵ハ社殿に通夜  
奉らんと晝より其用意して留守に夫の不自由なきやう食事其他何くれと  
皆枕邊に調置孫太郎を阿玉に頼み黄昏近く船を出し牙藏ハ翌朝迎ひに來  
んとて浪打際より漕戻し壹個社頭に詣りつ、社僧に通夜するよしを盲入  
て拜殿に昇り八幡圓座(名産)の上に座し寶前に頓て丹情を凝し祈りける其  
夜は社前に吾あられて二個の男通夜してありしが壹個ハ富家の主と見へて  
持たが病の革特鼻禪長濱縮緬(名産)の藍微塵袷衣に重ねたる治癒を浴衣も  
商賣の金に鳴海の鬼絞りはさげま帯は本場の博多舶來絹綯の旅合羽銀緞  
の煙草入世に活馬の目は秋けさ秋目一つもなき男又の壹個ハ田舎者にて  
地織木綿も幾度か氷に入たる古拾合羽の襟も小縁も垢と汗とに色變る干

草色の股引の膝ふ色紙は當れども風雅氣なき堅親仁草束ある髮風俗と伊  
勢の壺屋の煙草入ふるなる光と自慢顔群跨かきたる側に大やかなる畚を  
置たり煙草の火から知己の男同士は馴やすくて種々の雑談のうちにも時  
々畚の中にて魚の餌る音すれば富貴の主と怪みて何物なるやと尋るよ此  
方男答て曰やう是ハ吾大節の金箱なりと計曰ふては了解がたかるへし吾  
儕は越前敦賀の者親の代ふは相應の慕しもせしが吾儕讀を請しより年々  
の凶作にて終に身代表へて田畠ともふ他人に渡し無據なしの師掻生類捕  
る活業を年寄ては好ましめらねど耕へき田畑なければ心の外にうち過ぬ  
るに先頃此湖水續の沼に出て毎の如く漁せしに其日は朝より一尾もか  
らず殆困果たる時吾儕のまんか直りしか只一尾掻當て引填見れいと大  
なる白鰯しかも八ツ目でありければ一回ハ驚きしが世に珍敷物なれハち  
との金にハ成べしと家に歸りて人にも見せしに是ハ得がたき珍物とて廻  
々に買人がつき既よ五拾金にまで直が出来たれと新家の會弟ハ賢死者に



て都五條に住居する山師の親方小悪者れを其人許へ持行ときて百金の價  
のあるべしと薦に應じて照會狀を貰ひ今將持行代物なりされそ他人に買  
入ま田島も請戻し子供等に譲與へ貳合五勺買も樽酒つけて左り四扇の樂  
隠居斯うまんが直りしも年來信する此御神の深き悪と思ふおれは先道な  
れの參籠ま今宵の此所小通夜せしありと語るを水莖側小聞に飛立ばあり  
嬉しくて不覺側小寄とせし侯暫し森く胸をふま傾め心の中お想やう今  
の嘶に偽なくバ百金といふ大數の金調ふべし手段のなしされバ眼前其靈  
藥の有ものを買得ぬ事の恨しや爲左柱右と悶まが熱々物を案すれハ世ふ  
も得がとさ白禪をなふ満願の此神前に在といとも不思議な是予全く  
御神の深き利益の奇業か人には情も有もの予件打明て依頼て見んと心を  
決して進奇り彼田舎者に打向ひ近頃卒爾の事なかく今彼方にて承入れハ  
禪を持るとか妾ハ堅田の者なるが夫は永の眼病にて終に盲に成果侍り  
しか一醫師の言る、には白きハッ目鏡を得るときハ忽ち治ると聞により

此御神に祈誓をかけ日毎詣もけふにして三七箇日の満願なり幸貴所の持  
給ふハ世小難有靈藥なれハ曲て妾に賣給はすやといと懇懇に聞ゆれば田  
舎者の會釋えて儲く奇特を和女郎年若あれと夫の爲に斯まで心を盡せる  
、世にも稀なる心懸此方も終是賣物なり殊に生類の事あれハ遠々都に持  
で、多分の利益を見んよりハ少し價は下直とも此所よて賣ハ兩益なり同  
じ人手に渡すなら個の如き貞女に賣を賣る、御も仕合ならん先個に沽と  
して價ハ幾等に買給ふや今此且那にも語しと通り土地に居てさへ五十金  
都へ行は無言で百金の價の代物爰より都へ往復と在京中の諸雜費差引大  
負ふして八十金に賣べしあり夫で你的心と恚地といへど水莖返答あく真  
むひて居たりしが夫にて高價と思すなら強て沽度といふハありすと曰  
ふ水莖面をわけ赤面て言やうハ八十金てもいと安き品なるハ忸怩ながら  
妾か家の客歳の夏からの新世帯家作諸道具賣却たりとも央にも足ざるハ  
しまのし頼母も仁もあれハ翌日吾家迄來て給びね其上兎も角も談合す



べしと聞くに田舎者の不興氣ふ夫れの出來ぬ相談あり生類抱へし吾れを  
捉へて堅田くた同道一家を賣金調へてと有間うち此魚の揚た時ふ此  
蜂とらす終是愛まで來たものを寧都に持行べし縁なき者と歸給へと木で  
鼻く、る愛撥ふ何と言へ死言語もあく若此靈藥の掌に入らば夫の生涯  
盲となり夫のとあらず平常の氣質心焦て餘病でも出たる時如何にせん  
貧の諸道の妨どい今ある思當りたり有所にのある金のなき吾儂ふは無る  
らん嗚呼金要やくと夫を思一徹に愁悶て泣沈み余所の見る眼も哀なき  
此時富貴の男は進出嚮より兩所の談話を聞は教養の叟翁の言る、處實尤  
至極なり令姉か一圖に亭主の眼病治したさの赤心もいと便なき事ぞのし  
吾も此御神が信仰て此所に通夜した因縁で袖振合しも縁とやら見捨られ  
ぬが平常の生質令姉の心一個にて金の直様何でもなるが相談に乗氣のな  
きやと聞に氷莖胸森かれ妾か心一個にて金調ふどの如何なる譯ぞ教へ給  
へと彌奇の左様官氣あら咄して見んちと自腹き言分なから吾の草津の驛

三十六 紙 雙 廻 蟲

にては葛上亭の長虫名といふてちどの人に知れし者家の暖簾の豆班虫名  
とて妙な假名か僥倖に數多娼妓を抱置べ令姉の標致であるから三年結  
で百金を出しても憎うない代物常盤御前の例もある夫の爲なう是非がな  
い得心ならを今爰で金は備に手渡すべしと聞氷莖は飛立嬉さされと此身  
を汚して何分夫へ言譯た、す遊る、丈の遊れて見んと御信切なる其仰  
あんぼう嬉しう侍るかし嬌て一個の願あり忸怩ながら妾故夫も涙の身  
とあられ子まで産たる中なれを何卒此軀を汚さず小被遺まつる仕方無  
や妾幼稚より宮仕して習學ま絲竹の調へ新曲舞も奏はべれは如何なる實  
客の機嫌もとりなん夫のみならを裁縫厨の業も厭ひ侍らし只此上の情に  
は枕かひする遊女の務バのり許してよと合掌つ、伏拜バ夫では余程直  
が下る己も乗の、つた船なれの成丈と都合べし何を相談と早ひかよし叟  
翁もまア斯仕させへ相互互信仰する神の御前の相談なれば商賈離れて賢  
意づく七十金も負給へ左すれの教養より此所まで來た甲斐もあり令姉の

四十六 紙 雙 廻 蟲



蠱 麴 雙 紙 五十六

操も立といふもの價も年を五年に延て七十金にて贖ふべし掌を拍給へと  
氣も軽く流石それ者の扱あり田舎者は呵々と笑ひ貴方が鬆ひ氣質に職て  
彼是不肖と言ざるべし令姉の心は如何ならん水莖の天にを昇る心地して  
數面亭長を伏拜み妾の願も聞届て七十金の大數を下し給へる厚意生々世  
々忘るまし只何事も能やうに願ひまつると願て初て笑し愛敬へまた比類  
なれ手弱女なま長ハ夾袋より金取出し數改て水莖に渡ま田舎者に手渡し  
させ白鯁を番のまゝにて買取らせ是にて吾を心安堵ぬ商賣なから今宵の  
買物生た金遣ふより叟翁も善事せられ一と二個ハ頻りに喜悅て又四方山  
の咄に移りぬ水莖ハ心勇く番の蓋捉明見れば實にや實に看るもまをゆ  
き白鯁の鱗々としてありければ嬉し言はんやうもなく神前に合掌大願  
成就の賽し數回願きて一端夫子に分離とも尙行末ハ神方をもて一所に寄  
りしめ給へれと念じ終て座に歸り熱々思ひ回らせと翌朝牙藏の來りあ  
ば此靈藥を渡して遣り妾ハ草津へ隨行かん今一回逢て行たけれど夫でハ

蠱 麴 雙 紙 六十六

此方の得手勝手愁ひ顔を見るあらハ猶も別れの怨襟のらめ左ハ去るがら  
翌日よりハ嘸不自由ハ座らん倦も倦れもせぬ中を金故別る、悲しさよ斯  
る事とも知ずして昨日此所へ來る時の暇乞さへせざしよ又可愛の孫太  
郎毎よあく跡慕しか稚兒ハ神心虫か爲知てせし業の誕生月にもなりたれ  
ハ飯も少しハ食ふるれど急に親の乳に離れ虫氣にても引發さんかたハの  
一夜を懷を離せし事もなかりしを昨夜ばかりと阿玉ハ預け嘸待怪て居る  
ならん明夜よりハ如何ふして誰に憶れて眠らん強顔母と兒心も嘸の  
し跡で恨べしと先から先を相想泪にひまハ無りしか急度心を取直し嘸  
吾ながら愚猿けれ遣て夫へ一筆殘し又再會を契ばやと懷紙を捉出て長に  
乞て矢立を借勿躰けれと神前の燈明を借奉り件細々と書たれど兎角泪に  
眼も開て筆の歩行も見分を只命毛の断やらで再會の期を神かんで願上と  
書納重て暹文章に千万無量の心を籠結封じふ夫の名宛心も淨き水莖か流  
の末々いかならん夜明て牙藏は何氣なく迎にとて來しかと先願見ハ胸塞



リ且喜て奇薬を示し一伍一什を物語委細の譯は此文に夫の平愈せられな  
と兎に角一回は孫連て逢に來てと傳言して又孫太郎の一身の阿玉御前に  
呉るも願み聞へて給ひぬと跡は泪に口禁牙藏は愕然と驚きて俄に泪小く  
れけるか不思議に靈藥御手ふ入り此上もあき歡なれと又内室には憂務め  
一つ叶へは又一つ思ひ分べき方をなし刀禰の御眼の愈給は、僕夫婦力を  
合せ如何にも金調達て頓て迎ひに參るべし暫時の程辛抱して病氣はぬ  
やうして下され又兩君の御身の上は吾儂附添奉れと御心精給ふまよ之小  
就ても親仁どの今存命て居たならば宜き分別も有べきにと男泣にそ泣居  
たり亭の長は進寄貴方は此嬢の親戚の人か少しも氣遣ふ事はなし支那亞  
墨利加へも行人あり同國なる堅田と章津身代金さへ持來なは何時にても  
戻すべし御亭か尋ねて見へたあら快く逢すべし名残は何迄盡る事なし  
さ速くと責立られ是非も泣々波濤場ふ出二艘の船に乘移り西と東に漕分  
れ幾回とあく願面跡と白帆も見へすありぬ牙藏は泣々船を離し一伍一什

を物語殘せし一封を手渡せは源吾と驚愕且歎し何靈藥が掌に入りたり  
とか夫は此上なき欣びなから慙不便は水莖よ吾を思ふ赤心より蘇妓と迄  
なりたるのと殘せし玉章を手握り千ふと碎くる心の中流石夫婦が手前  
を耻て泣ぬに泣に大丈夫か胸を張裂ばかりなり阿玉も聞よりうち膝さ且  
欣ひ且悲しむ泣孫太郎を賺つ、平常の御氣質とは言ながら能く思ひ切て  
成されど比類稀なる貞女の鏡深志ばかりても刀禰の御眼の愈せ給はん  
内室の赤心の神に通じて此靈藥御掌に入しは不思議の利益探てたと御覽  
せよと番を源吾か膝に居蓋取除て手を持添是爰にと探る時小白障の  
一絃のねて一條の白氣を口より吐き源吾か面に覆ふと見へしかアツと叫  
喚で悶絶を牙藏夫婦の惚りし是は何事と狼狽て抱起して介抱し口に水を  
洒入れ心を髓に持給へこや喃々と呼活をふ氷の咽に通ししかウンと計に  
心若餘と兩眼見開きて其方の牙藏の此方の阿玉かア貴君は御眼が見へ  
ますかナ、眼か見へた是は何如にコハく不思議コハ不思議と三個の顔



を見合て忙然として居たりしが其時件の白蟬の番の中より蟻出湖氷を盛  
んて飛入しか波を蹴立光を放し竹生島の方へ飛去れり源吾の初て心着き  
噫勿肺や辱や神明氷莖か赤心を憐み給ひ不思議の利益を施し給ふか、れ  
の件の白蟬の至く神の化身ならんかされの水莖の身活しも皆神業のなす  
處歎くは却て恐あり吾儂か身の上も末頼母しくくと數回島の方を伏拜  
三個諸共合掌し姿をしたりける是より源吾を改て牙藏夫婦と兄弟の義を  
結び家も疊て同居せし小孫太郎も幸に阿玉に馴染母の如くに思ふ故大小  
心安堵つ、一日も早く氷莖を贈出さんと思ふより漁をもて活業とし名も  
源五郎と改て晝夜心を盡まけるに鮎を漁るも妙を得て日毎に數多の獲物  
あれは大津を始め諸方の市街へ持歸に皆荷葉に包て印とせしか源五郎か  
漁たる鮎の味殊に佳とて源五郎鮎と稱賛し當所の名物となりたるあり  
又荷包鮎の名稱も是より起れるものならんか

○第十一回 螻蛄被擧用て皂莢の寶器を奪ふ

小人閑居して不善をあすと聖教に漏ぬ蜘蛛丸の座邊に集會て皂莢家を  
倒すべき謀計を會識するに鎌切斧八進と出恭と去く言やう大玉探て望ませ給  
ふ皂莢家の重寶鉞形の冑を以つて元來朝廷よりの賜あれの時として禁中  
(金虫)に召入給ひ天覽ある古例もあれば之を竊に掠奪し深く秘蔵給ふ時は  
寶紛失の所以を以て彼家の落度を推へ二つに老臣天璣の其職重けれと  
罪免る、事無るへし幸某か姉に七節(虫名)といふ者祖父布葉(蟻)の所  
縁あるを以て攝政家小仕へ居れり古例小任せて冑を天覽あるへき旨を内  
奏させ彼家勅命下る時の止事を得て御寶紛失の旨を訴べし其時寶紛失と  
は偽りて内々彼家叛逆の企ありて朝命を拒奉ると披露し當家へ討手を乞  
請て不意に押寄攻亡し其時蝦蟇小内應させ所領財寶詣に及ばず玉虫炬  
で奪取りいよ、富貴を極給て、大王が御威勢天下に輝き草木に染く虫  
免らも皆御手に属すべしといと狩顔に解瀉れを蜘蛛丸満面に笑を含み寶  
に汝と吾爲の留候なりと稱賛へ今より汝を擧用ひ家の長臣と爲はさじに



萬小二あく仕ふべま夫古語にも謂すや名稱ハ體をまねた又名稱を以て人を威と汝が名の輕々しくして長臣たる者小ハ似合しからず左レバ今より改て螳螂左衛門斧通(虫名)と名稱べしと言つ、背を願て侍女に持せま太刀一振を押直させ是之吾家小傳へ來ま蜻蛉丸と號する陰陽二振の太刀あるが陰の太刀ハ先年蝦裂眼八郎小助にたるが今此太刀を汝に授く長く受納めよと有けれバ螳螂ハツト平伏し兩手小之を押戴き謹んで拜見されバ赤銅作り小金の象眼もて蜻蛉(虫名)を彫入より許可蒙り奉ると少しく席を退きて帛捉出て心刺を見るよ薄刃(虫名)ウスバカケヲウ勾ひの亂れ焼消光目を奪ひ冷氣人を侵し遠く見れ玉沼の春水の如く近く見れバ瓊瑤の瑞雪の如し見るも珍し優曇花薄羽カケロウノ卵の玉散るばかりの名刀あり側に直して兩手をつき無智短才の某を斯迄重く用給はる君恩何の世ふかは報まつらん婦ハ己を愛する者の爲に容裝士ハ己を識者の爲に仕ふと粉骨碎身して忠を盡さん今奉公の手列に彼館に忍入胃を奪ひ一個の功を立言さ

一十七 紙 雙 廻 蟲

ん此儀許御容下されたと願ふに蜘蛛丸領狀き夫ハ汝に任すべし去とも彼家武勇の者あり慥悍て過失すべからず能くせよかまと論一つ、夫より酒宴に時移り漸酣に至りし頃蜘蛛丸螳螂に向て言やう太刀ハ陰陽合休の作法ありと云へり然れ共一振ハ兩儀を具し物あり又二振に別てる物あり其區別如何あるものと汝刀劍の古寶ハ精一語て余に聞せよと有ければ兼通謹て答るやう某深くハ存知さふらはねども嘗て古寶家小間たる事候ひき夫太刀の作りやう品々多しまづ神太刀奉納太刀御帶刀陰太刀陽太刀公達作り隨身太刀無官太刀能太刀等に至るまで作例古寶大ハ六借金作り銀作りいがもの作り荒水作り虎の毛の上箱熊の毛の上箱等あり神太刀奉納太刀ハ陰陽あり其餘ハ皆陰陽の對する作例ありぬけなき御事あれども我國の御寶劍ふも日の御座の對するありとか又源家の重寶蜘蛛切丸に友切といへる對ひ是二振小別つの例なり漢土の太阿巨闕于將莫耶を此類あらんか又一振をもて兩儀を兼たるは多く御帶刀に用るあり夫は

二十七 紙 雙 廻 蟲



鑄は劍形分銅形を兼操入木瓜といふより作り目貫は表は六ッ裏に六ッ十二箇月大小の節度を表し四枚切羽は是四季の時候鑄の鍔形の内に陰精をあらはにし日輪の丸を彫りこれに丸蒿雀目いふにかけ七寸貳分の金の鍔末に二ツのふりく玉七十二候に晝夜の二ツ鍔の鍔形に陰精として月輪の丸きを釘隠にして是を打天下豐饒の第一と五穀成就を本とすよつて目貫を俵と号く其余の名所皆四大五常を心にこめ陰陽合体の形を顯す是刀劍家の故實なりと浪華濱松阿國が著述の書も又斯の如し只今某に賜りたる太刀の如に陰陽二振に分つ者にて陰陽の人にて取てハ夫婦の如く分離する事を厭ひ常に一所に集會らんよとを思依て考るに蝦蟇沃通息莖家を辭して御手は属する事も候はんかと辨舌爽に演けれハ蜘蛛丸始め坐中一統ふ感に絶大ひよ奥を添とりける借も蟻螂斧通て毎夜様子を窺居たるか頃ハ彌生の下旬霽より風雨烈しきを時こそ來れとうち歎ひ黒裝束に覆面一下に之設備の鎖帷子俾備補に身を堅先勢田の館に忍び寄る館と清渠

を回らして石疊高く崇塘あり容易く入へハ便を得ず尙も四丁を窺ぬに裏手の方の溝渠際ハ沼についさし竹藪あり是究竟と其中の程よ竹は登れハ纏の重き小竹たこみ溝渠を隔てし崇塘の内より生出たる大樹の松の水を望し指枝に程よく足のつきしかハ透き枝小探着て腰より用意の繩泥出し竹を其儘枝に結付け幹を傳ひて内に下とち忍ひくハ寶藏近く窺ひ寄れハ庫の弓手に番所あり網方燈の燈灯は消ぬをかり小味黒く内の容子を闚へハ番兵四五輩居たれども風雨の爲に怠りて厨の音の荒じければ折みそ能けれと寶藏の裏手小回り豫て覺への手斧にて壁を切破れ忍び入此所彼所と需る小唐櫃壹個錠巖重に下せあり是あんめりと錠扭斷蓋押明れは二重に箱あり急ぎ紐解き取出せば鳥羽玉の闇さへ照らす黄金の前立名器の奇特と心に欣び用意の袱包取出し包んで背に懸と負ひ仕合よしと外に出れと咎むる者もあふされば元來一道へ立歸り松の大樹小登んと近寄時しも彼方より提灯の火の見へければ見答られじと走上る其時天斑牛



之輔今宵宿直も更闕て宿所に退く歸り路の下郎此内(虫名)に提灯持とせ松  
 の木の下歩行寄る時小雨止み雲切れて月さし出れハ忠仲が何心なくうち  
 仰く松の梢小人影の夫と見るより大音揚曲者待たと呼れハ見顧されしと  
 斧通が早速の手裏剣發矢とうつ此方も名を得し武功の老人身を沈まして  
 柄にて受留免不疎追はんとする時に道の忽滑又足滑し不覺片膝撲地と突  
 く早曲者は松か枝に結びし竹の繩を解く取逃さじと忠仲か丁と打たる小  
 柄の早技此時早し彼時遅し斧通竹に捉着てザハと向ふへ跳越れば小柄は  
 松小マハと立忠仲今と詮方なく取と逃せしハ殘念あれど柄にのみれる并  
 蛭(虫名)後日兪議の手掛と帛に包で懐中し氣遣さハ寶藏あり此内來と其儘  
 小寶藏さして馳行ぬ是より嚮に番兵一個眼を覺し小便を足しに外小出れ  
 心雲はいつしか晴わたり白晝の如月冴る空を仰て噫し今宵は風雨に心安  
 堵二合半酒の濯足ふ常よりいそく酔回り誰彼共に轉寝しと又墜ハドウ密  
 生一思れに二讎れ三懸慕られか畜生の夜風引たう脊中より覺察すると獨



螳螂左衛門貞  
 英重寶鍬形冑  
 奪去圖



言其賊々で思出たり噫吾ながら怠たり序に一回巡回らんと庫を巡つて裏手に至れを是の開如何に是は如何に壁は壊れて盗賊の入し有様ふ松仰天俄に聲を張揚て事件々々と叫喚ければ番兵孰れも驚愕覺め是は何事の出来しやと途胸鐵把長脚鑽の得物々々を携て馳出る向へ老臣天斑夫と見るより二回恠り大地に平伏投首し事の始末を包によ一あく一伍一什を聽上れを天斑逐一聞取て汝等役目を怠りて斯る大事に及びし事返々も不届あり夫は又後に糺をべし先何品の紛失せしや改見んと糺提出し内に入つ、此彼と改るに彼重代の胃を納めし唐櫃の蓋取除て中箱の儘紛失せしかを愕然として驚つ、是は尋常の盜賊あらずと彼懐中せし并を火影に寫し照し見て心あり氣に領て借番兵ふ示すやう汝等役儀を盜畧ふし酒に酔臥し前後を忘れ斯く盜賊の入しも知らず殊に朝廷よりの御賜胃紛失なを上と其罪死刑に當ると雖とも此事世上ふ流布する時は館の瓊瑾此上あし吾また思ふ子細あれの件穩便に計ふへし汝等後悔の心あらずば一命助け得さす

六十七 紙 雙 廻 蟲

る間必他言を演て密々に盜賊の在所を索め召捕て差出せし又復實を與るを一番注意し此後怠ることあるれと寛仁大度の計ひに初て蘇生する心地して只管天斑を伏拜み歡ひ涙にくれふける夫より天斑下司を招き急ぎ寶藏を修理せしめ尙餘重小警護けり

帶拾貳回 蝦蟇被捕て隠形の術を施す

恠て天斑牛之輔の宿所に歸り再び彼并を熟視に金の蜻蛉を象眼にて彫入さるが何となく見覺ある心地をこれ此盜賊外より入たるふとあつさるべし孰れ被官御家人の内ならめ表向僉議せば風を喰て逐電せんか如何せん

と種々工夫を凝しけるが佐度一計を案じ出へ来る卯月八日の姫君宇治へ御入興なれば其前諸士へ祝宴を賜ふと披露し總出仕を命じまかして竊に穿鑿すべしと心を決し其旨一家中へ達しける既に其日にも成けれの諸士の面々遠侍ふ至るまで今日を晴と飾整て早朝より登殿し皆失々の溜々に伺候なり天斑の精に服心の力士を撰ひ頃哉と首の擲捕んと被檢査重んじ

七十七 紙 雙 廻 蟲



さり巳の刻より姫君奥殿の大廣間へ出座あつて諸士へ名殘の對顔を許され  
れ孰れも御流頂戴す天斑の姫君の側へ侍座し始終眼を配て油断せず其間  
監察官の諸士の溜々を巡視して佩刀を改るに豈圖や蝦蟇眼八郎か佩刀の  
持彼符と符合すれを其旨天斑小内應を此奴憎き悪漢かと思共先君邊は  
事故なく禮拜濟せ其席々に於て酒飯を賜ふ物練たる忠仲なれば蝦蟇の伺  
候の席小到り殊に彼は其座の筆頭なればいと寛爾やかに相對ひ今日の祝  
詞を互ふ演蝦蟇氏ちと談あり此方へ來り給ひねと自身先に立ければ何心  
なく眼八郎長廊下に出る時忠仲大音小喚るやう蝦蟇眼八郎御不審あり者  
共ソレと言より早く襖の小蔭小潛伏たる捕手の方士三五輩顯出て御錠さ  
ふと聲掛て矢庭に蝦蟇を捕て鏡へ捕持曳立て文注所にて連行たり眼八郎  
は何件とも思ひ計らぬ絆なれば阿容と曳立られ文注所の大床小引居られ  
座上を見へ奉行頭入監察官總々堂々と居流て中央小天斑牛之輔忠仲少し  
席を進出扇子を膝小突立て蝦蟇を佐眼へつ、ヤヲレ眼八郎承れ汝大膽に

を御寶藏へ忍入重代の御寶藏形の冑を偷取何に秘匿たるや又何等の趣意  
有て斯る悪事を働しや荷擔同類も定めて有へし眞直小白狀せよ包隠さは  
罪又いたく重かるへし速く言すやと有ければ眼八郎忙果一圓合點行され  
ハ漸有て言やう何等の御不審かと存せし處驚入たる御尋達も覺悟仕らす  
某不肖には候へ共累代館の被官として鴻恩小浴る者如何として斯る大逆  
を行ふべきや將他品と事替り人も知たる當家の重寶盜取て何にかせん察  
る處某に意趣ある者議を構て訴るもの尙疑しく思されなば監察官小被命  
自宅を御穿鑿有たさありと言を天斑うち消て否不存とは言れまし既に體  
の証據あり過夜宿直の歸さに崇堀を越る曲者あり某見答聲かえしに其時  
打たる此手裏劔汝か佩刀を改見るに露不違象眼の摸樣察るとる此符は  
指添ふ仕込し物ならん是にても猶陳辨ありやと目先に突付指示せば眼八  
郎寄て熟視る小寛小吾佩刀の符と割符を合せし如くあれは愈疑ひ暗やら  
す何如ふも某か所持の品と毫末も不違とも某の佩刀は御手にあり一物も



欠るふとなし篤と改見らるへし又外に指添は候ハす天然トハ此佩刀は汝  
素より所持せし物か蝦あま否いな不然館の旗下土師蜘蛛丸が贈し物なり天他人  
小佩刀を贈るは尋常の懇儀にあらそ何の所以を以て受納し予其時蝦蟹の  
心中に思やう豫て蜘蛛丸に阿諛て姫君媒妁の事を委託せしれ其時贈るれ  
さる物なれとも白地に言ときハ件面倒なりとされハとよ某素より持倉を  
好み膠吹三上を山回歩行こと常なれば土師も又好人にて終入忍仕ぬ彼  
人又當家の旗下なれの親交よりとて何の妨か候へき斯る分明ならざる儀  
を以て強て某を糾弾せらる、と近頃老職の御計とも不存慮なり宜く御置  
察を仰くと更に屈する氣色なれば天斑篤と思慮するに蝦蟹か申立理な  
きに非す必定空賊ハ蜘蛛丸か手にあるべし彼人近來驕奢ハ喜心得ぬ振舞  
あれハ野心ありやも知へからす併彼も大身なれば容易に手ハ下しがたし  
先蝦蟹を止置て緩々穿儀の仕方もあらんと眼八郎にうち向ひ汝の答辨一  
理ある小似されとも盜賊分明あらざる聞ハ御不容の廉免るべかすす習く

十八 紙 雙 廻 蟲

文注所ハ止置る、處あり其旨心得罷在へしと一家ハ閉籠め番兵數多附置  
て嚴重に警衛けり眼八郎と一室に閉居せられ如何なる今日ハ惡日にて  
る災厄に罹りしると愁然として腕組一情件を案る小全く此盜賊ハ蜘蛛丸  
の所爲なるべし彼人當家を押領せん志ハ吾齋に推置せり彼も知勇の郎  
等あれば先重代の胃を掠奪し事を起さん謀略無にしもあすされハ容易  
に盜賊の出べきとも思ハれそいつ迄も如斯苦められ終小出る期なかるべ  
しよし又赦免を得たりとも一端嫌疑を請たれば未果敢くしき事はあか  
るへも又蜘蛛丸と入忍せし上と諸士の思ハくも如何なり寧ろ透電して土師  
を待み彼に隨從きて身を立んか妻も去年死去されハ今ハ獨身の心易し併  
警衛の嚴重なれば如何にして逃出んと種々工夫を凝しけるか不斗思ひ出  
せし件あり吾家隱形の術を傳れども色相を斷されハ其術不行と聞し故終  
小心ともせざりしが今此窮厄を免る、ふハ此術に勝るものなし今日より  
情欲を離て修法すべしと他見ハハ恭順の形容を見せ一心不亂に呪文を唱

一十八 紙 雙 廻 蟲



へ修法を心中に執行するに不日其妙所に至りたるは家傳の奇特にや奇ならん蝦蟇の心中大ひふ歡び時節を待居よりなるふ或夜雨頻りふ降て四丁蕭然たゞしかば是幸と呪文を唱へ印を結んで試るに雲移身を覆ひ自然と一室を抜出たれども番兵皆眠て知る者なし仕濟たりと因に扱て封印せし吾佩刀を提出し其儘腰に手狹て終る館を逃出行術も不知失にり夜明て番兵一室を見れば蝦蟇のあらざるに驚愕し四丁の締を改見るに更に變ることなし开も如何ふして逃出れんと或天井或床下殘る隅を探索るに其甲斐更ふ無りまかば孰れも身の上ありと愁傷して急に天彦に訴出さず忠仰暫く沈思して曰るやう彼家隱形の術を相傳す聞しかば彼の極て好色されば行ひ得ること無るべしと思ひしふ全く其術をもて逃出たるあらん是本草綱目に所謂取蝦蟇反縛着密室中閉之明且視自解者也といふ語に合へりされども又王荆公字說曰蝦蟇蝸土取置遠處一夕復還其所と見へたり凡士たる者邪術を憑んで其身を逃るゝ如き大丈夫の爲る處あり何程の

二十八 紙 雙 廻 蟲

事をか仕出すへき遠かうす自然獲る處あらんと自若として居たりしが實ふ天彦が先見の如く後に予思ひ當りたり

○第十三回 蝦蟇蝸輪を荷擔て蜈蚣を誅す

儲も蝦蟇眼八郎沃連は隱形の術を以て難なく館を逃出てが指て行へき宛も無けれと先蜘蛛丸を待まんかと曉吹の方へ志し辿々て野洲川の渡に來にけり此水南より北に流れて前面ふ一座の山ありて其名を三上山となん喚ける遙ある三上の山をめぐりかけて幾瀬渡りぬやすの川波と新勅撰集にも歌ありて數へられたる名所なれと沃連川邊に立添ふて彼の山を見渡せば山根は地角に盤りつ頂は左のみ高からねど形ち楯盆に似て恰も駿河の富士山の如し深谷幽谷常に雲霧を起し遠く望ば山嶺杳靄の間に出没し近く見れば蒼翠袤延屏を列か如く寶や延喜八年藤原秀郷の亡す所の大蜈蚣は此山に栖たりとか左もあらんと咤なから渡るべき船やあると彼方此方と索れど船二艘もあらざれば波守は向岸なるとん喚ばんにも夜は更たり如

三十八 紙 雙 廻 蟲



何ばせぬと思ふ處に遠川向に火の影の朗見へて漸次に此方へ来る容なれば心嬉しく待うちに早川邊に近接して沃連は聲かけて旅客なる予渡すべしと言に彼方も應と返答て頓て船を潜寄ていざ乗り玉へといふを見れば鏡笠着たる船人二個夜中大膽と乗移れば街と船を潜出し船櫃とる間も二個とも頗に沃連を顧視つゝやがて壹個か言やうはやよ滑七よあの鳥見たりや肉のあるなしは分らぬと見かけも假成立願にて二本の足か直價がある岡に寄て鷹かけたら翌日の充分へレキヤといふに此方の達箇の言やう又してを九次六か捉らぬうちかよ香相談しかし余程益がある處か運うふじやが二羽の鷹なら氣遣あるまひといふを沃連うち聞て匹丁を見れとも間の夜の鳥は何國にあるとも見へす心の中に思やう此奴等の面魂還刺等には非るや合點の行のぬ言語の綾しかに何程の事を為んと思ふうち船へはや向岸へ着しめば悉と陸に上り行んとするを呼止て刀雨の忘し物の無やといふ沃連振歸り笠一蓋持たぬ身か忘るへき物もあしと思行

んとする袂を扣へ乗遊との曲がよい舟賃置て行給へといふ沃連うち笑て何國の浦ても武士の無錢で乗の旋なり左れと強無錢ふあうす所領の高より出てあり知ぬ和郎等の素人よといふ時矢庭より後より九次六脊を抱止るを兩の腕を左右へ掉解前より滑七胸下捕を逆返して拂除け汝等如き蠅蟲等に手籠にせよる、吾あらんやと又来る二個の腕頭を丁と捉て衝飛し四丁を疾視て卓爾たりソレと聲かけ滑七九次六有合櫃を押捉て左右より打てかゝるを身を沈ましてのひ潜れを空まぐ地を打滑七の樹の節利にはつさど折たり不透沃連拾捉り又打込を受流し一往一來虚々實々時に山風吹下来て船の篝火を吹消の後々冥々と黑白も別ぬ鳥羽玉の闇を三個か挑々一所に寄ての頭顔合うち驚きての逡巡聚散離合の閑路を相撲か如く遊ぶか像く鹵奔擊にうち合を音を目的に滑七九次六肩と腕とを相討に撲地と打たれてアと叫ぶ聲を徹に沃連か二個を左右に擲と捕へ地よ引敷て乗かゝる時に又風起り煙りいたる篝火の發と燃つゝ、四丁を照せば



沃連指添抜放し憎き虎落奴懲免に芋指にして吳んとす既まらふよと見へ  
る時二個の頻み聲を揚げア、暫し待給のれ言上る件のあり仰仁慈々々  
々と歎寛解れを刀を扣へ殿と疾視へ此期に及で何をかいふイザ言へ聞ん  
と教團て最早敵對て仕らそ御手を緩め下さるべしいかでくと頼の沃連  
可笑く衝造て敵將なさバ切捨んと身構あして搦立擧れは二個は其儘轉起  
兇肩と腕とを摩搦地に平伏て怯く頭を擡て言やう思に勝たる刀禰の御武  
勇吾々とても心から追刺する氣の無なれ共無據斯の仕合案此川の波守に  
て候が此三上の山中小天龍蜈蚣ノ異名太郎と自稱たる山賊住近郷近在を  
横行なすやへ終に渡の往來も絶へ船賃とても取事ならず詮方あしに天龍  
か配下に屬一渡舟にかゝる旅客あれハ或ハ追刺又ハ山寨へ連行もあり然  
るふ今宵は吾々二個外ふ同類の無を幸ひ内證仕事以爲んものと見立違て  
二ツあき命を既に被失處命惜さに盗もすれ只今志を改めて再ひ山寨へハ歸  
ま一命計は御助下され借又刀禰にて何國より何所へ行給ふかの知ぬとも

本街道は此川下是より先途ハ人家もなし夜明ぬろちに川下まで吾々御供  
仕とんといふを沃連うち聞て必ふ一計を工みしかバ汝等直實ふ歸伏せそ  
命ハ助て得ぞすへし其代り吾を山寨へ案内せよ世の人民に害をなす大龍  
太郎を亡きべし开も配下の何程あやさん候配下の左のと多くもあらそ  
吾々加に八九人されど巨魁の天龍ハ武藝早技人に勝れ其上吹針に妙を得  
て危き場舎に望ときは針を敵の眼に吹入る、に其早事電光の如し其故彼  
に敵對者なし危き事を爲給はずと是より街道へ出給へと言とも沃連聞入  
そ吾儕思ふ子細あれを必氣遣事なかれ時に此邊に人家あらば汝等の内登  
個行て鶏壹羽求めて來へしと言時九次六進出鶏御用候は、得ふ吾々か倫  
みし物あり寶と天龍山寨へ鶏を入る事を禁すれは今宵彼所の小屋ふて食  
はんと嚮に物せじもの、あり此方へ來ませと先ふ立廠小屋に連行て彼鶏  
を見せけれを沃連大きふ歡て其腹を割て血を搾り尿囊を提出し一壺の器  
に収つ、是を二個ふ渡まで言やう謀はしかく、なり能爲よかしと言含免



設備既に調し頃雲吹晴て東雲の空に輝く太白星の光よどして蟲み行く時  
分はよしと沃連と態と其身を縛せて出衆へとと曳れ行く羊腸たる阪路を  
攀て漸く高きふ至り又下る此道老樹蒼鬱として雨霖滴と苔滑ふして歩行  
に腦めり又登り又降れば既ふして一帯の溪河あり水氣蒸騰り騰騰として  
前途を辨たず激浪巖を嚙で盤渦怒濤し幡樹風を起して雲霧を巻く處に  
を沿ひて行くに大岩二個建て自然門の形容を爲そ是を人れハ數百歩の平  
坦あり爰に圓木を以て造營たる賊寨あり是天龍太郎か樞家なり家の奥に  
大洞ありて天龍屈と號く是昔時大蜈蚣の栖たる處なりと滑七先内ふ入て  
言やう昨夜僕九次六と例の如く野洲川に出て待處にいとく酒に酔たる武  
士の來をけれと方便に擲捕是迄召連て候あり彼か面魂一掃ありて降降を  
さバ一方の御扶とも成べき者と存なりといと誇かに演けるふ天龍點頭夫  
と出來したり吾自己試ん此方へ連來るべしと有ければ纏て蝦蟇を廣問に  
曳出たり沃連其席の体を見るに正面の中突ふ天龍太郎段々條の大丹前ふ

天鵝絨の丸絆帯をいめ白猿の皮を以て製たる袴羽織を着し熊け毛敷皮の  
上に座し側に鹿の角の刀掛に金作の山刀を掛け後尾螺に髣髴たる銀の大  
煙管に煙草燻左右ふ配下の小賊共列座て扣たり沃連怯る色もなく座の中  
央に座しけれハ天龍蝦蟇を嚴と視て开も汝ハ何國の者にて何等の故に昨  
夜此籠を徘徊せしや「蝦蟇吾ハ所謂天下浪人日本武者修行を爲者なり」天龍  
と何を學ひたりや「蝦蟇されをよ弓馬鎗劍は武門の常取て珍とも爲ざる處  
あり兵書ハ六韜三略の奥義を極め加るに張良孔明が秘決を看破り八門道  
甲の隙法最も吾か得意とする處なり」汝夫程の武勇智略ありながら何と  
て隘々と吾配下ふ擲免られしぞ「吾性酒を嗜の一癖あり昨夜酔興に乗じ  
不圖船に眠る故す擲られし是等ハ一時の戯事ふて何ぞ耻辱とするふ足  
るんや然れ非吾又遊んと思ハ、何時にても遊るべし只大丈夫大志を懷か  
ざるを蚯蚓とす」汝如何ある大志を懷や「蝦蟇吾ハ武勇智略を以て天下不順の  
惡黨を制し萬民の憂苦を救んと欲す汝か如く僅の山寨を恃み一身の樂樂



を極ん爲に農民商家の肝油を絞りし財物を掠奪り剩人命を害ふ如き鼠賊  
輩との大に異り實の吾汝か無道の行を責て正に歸せしめんと思ふ大慈悲  
心あり今より志を改めて吾も隨從せば汝か幸福此上あかるべしと懐慮も  
なく演れれと天龍憤然と怒を發し滿面熱したる聚の如く赤ふして聲を利  
鬼晋やう汝酒氣未醒すや種々の戲言を吐て吾を愚弄す速小打捨ん奴なれ  
ども人も無げなる廣言の憎さに今汝と雌雄を決せん其上汝を殺すべま蝦  
蟻の完爾と打笑ひ夫の吾も望む處なり先吾か縛を解べしと繩を解かせ爾  
個庭前小跳り出身構あして相對ひ一回に端嚴白刃の光り丁々發矢と擊合  
せ互に劣るぬ早速の煉磨右と左小衝と別れ蝦蟇の法相天龍の清眼小構へ  
透を窺ひ白眼へたり天龍設がとくや思ひなん豫て合とし吹針を蝦蟇が  
上に吹かけしに忽ち姿の雲霧と消て鏡の見へされバコハく不思議と晴  
露處を思も寄ぬ後よと窺ひ寄し滑七九次六隠し持たる鶏屎を撲地と天龍  
小投付し眼暈身體麻木不覺たぢくと倭僮とき再び蝦蟇の顔て終小頭

を剝落し大音聲に喚るやう小賊共今よ里して吾も隨從な者命を助て  
得させべし若敵對なす者は一々首を列んと擧立舉て疾視たし孰れも忙然  
として居たりしが急に庭上に飛降り皆地上に跪き今より御手小隨て君を  
大王と崇むべいと皆万歳を唱つ、急ぎ天龍屈の額を外せば蝦蟇の怒ち筆  
を揮て蝦蟇仙洞と改めつ、洞中に入て改見る小金銀米粟山の如く貯され  
バ其半を配下に分與へ山ふは滑七九次六の二個を止め其他と野洲川の邊  
を開墾させ多くの水田を開き夫々産業を營せければ皆恩徳も伏まつ、田  
父君蝦蟇別名とぞ稱賛けり又蜘蛛丸にの敢て隨ふにのあふされども思ふ  
子細の有けれを以て懇に交りける

○第十四回 蜘蛛丸道小玉蟲廻を奪んとす

去程小火垂息菴の兩家小の豫て設備も調ひしかば卯月八日と黃道吉日  
廻の規式あるべしと今日入興の行列は對の先箱狭虫名掛し油籠の羅々  
毛虫虫名結ぶ真紅の對の紐解る今宵の嫁御良契もあがき長刀や徒士侍に



先うとせ四丁輝く玉蟲姫其名小耻じぬ玉の興ふ、あ長縁か唐綾のうちか  
けまくも恐きは千早振代の神結び眞實に今日は吉日よ髪下虫(虫名)の侍女  
輩前後を圍て徐行免り中局の松川の萬指揮えて油断なく跡には盛傘爪  
折傘夫に操立傘や濡る簀箱福卓履茶瓶を守護する茶道の行彌(虫名)行夜ナ  
ナ他仮ニ本文ノ如シ)色も濃茶の茶たて虫(虫名)平常に手馴し五徳より十徳  
の袖ひらめかま心得顔も引添たり少し下りて老臣天斑今日行列の総押へ  
掲布素袍士烏帽子栗毛の駒にうち跨り武備嚴重にうたせたり武士の矢馳  
の渡し近くとも急ハ回れ勢田の橋早うち過て風戦く粟津の松原越るとき  
怪むべし誰かそいらす松の木影の彼方よと弦音高く響きつ、強と飛來る  
箭矢の規は少し下りしか鞍の鞍を射削て右の股にぞグサと立此物音小馬  
驚愕き前脚あげて突立上れば流石武功の天斑も鞍に得絶す眞逆さま後  
控と落ふける仕遣たりと木影より弓矢投捨螳螂左衛門顯れ出つ、組子を  
下知し玉虫姫か駕目懸無二無三に切入れば侍女輩はいふに及はず徒士侍

も不意を被討防んとするに途を失ひ思はず四方へ散亂す組子の得たりと  
駕ふ取着奔去んとひりめくを女あがも松川が左のさせじと薙刀あつ取  
り先小進みま組子の奴原二個三個薙倒此間に天斑起直り手早く矢疵を布  
もて結ひ何者なれば斯る狼籍なき尋常小名乗ぬる比興未練の蛆虫めらと  
破と疾視で卓爾たり又も此方の殺よと一手の組子顯出其頭人ぞ竹笠節平  
眞先小進ま出大音聲に喚ゆるやう蜘蛛丸大王の命よと吾々此所又網を  
張り待とも知るぬ倥傯いざ尋常は姫を渡し蜘蛛丸王小降参をば命ハ恥  
て得さすべしと調籠にはさびて晉れば天斑怒の聲振立憎き廣官其所動な  
眼小物見せて呉んすと一刀拔よと見へたるが唳喊て飛で入對者をハ拜打  
馳違ひてそ車切袈裟掛梨子割二ッ瞬一瞬間に七八個枕を並べて切倒す案  
の外なる天斑か手管も恐怖て組子の者共浮足亂して切立られ二三段引退  
く節平組子を激て高の知れたる老悖に不覺を取る事やとある引包んで討  
取と烈しき下知に組子の面々足立直して追取番此時松川も敵を切立俱中



扶て駈來るを戦ひながら天璣聲のけ敵の幾個ありとても此場は某引請と  
り備の姫居を守護なして退死給へ速々と諒に松川實をと黙頭き取て返せ  
と駕輿丁も皆逆失てあらされば詮方なけれの姫君を御想より助け出し  
さ迅く落させ給へかしと御掌を捉て進れども姫の俄の騒動に驚愕給ひ只  
戦慄と震ひ懼れ一歩も進ま給へぬば斯ては果しと氣を苛る折柄馳來る茶  
道行彌夫と見るより松川聲かけ姫を脊に負せつ、其身も精悍しく附添て  
唐崎の方へ志し一町許を落行しか思懸あき木蔭より蠶螂左衛門顯出待を  
甘露の日和とやら斯くあるべとの豫ての算用二一天作算の玉虫姫を渡  
すべし又汝等も降参せよ生死の堺の相場割夫の汝等か胸算一の否と言は  
忽ちに眞向割算袈裟掛算開平法の一言半九、開口て見よと句句は松川憤  
然と聲利鬼人非人のゑせ廣言憎をもにくしと切か、れの行彌も扶けて  
討のゝる蠶螂からくくと打笑ひ小黙の振舞こと可笑しや汝等如兒蠶虫が  
總捲ふ掛るとも見一無刀頭て事足なんされと暇さるも面倒あり此世の暇

四捨五入切あげ呉んと一刀引抜き三個を敵手に切結ぶ松川魚操て打太刀  
を蠶螂弓手に受流し行彌も透を窺て後より切つくるを物々しやと身を轉  
し左足をあげて助骨のあたりを丁と蹴る急所の痛手にアと叫び尻居に控  
と平張伏ば透さず蠶螂行彌を踏へ力ふ任せて蹂躪れを行彌(行夜)を愛す一  
生懸命放つ放屁のつ、けうち黄氣紛々と立登る此惡臭に堪かねて前後も  
不辨忙然たり是る行夜の最期屁とて屁あき虫の名へ起れり此時磯松の何  
方より弦音高く飛來る矢蠶螂左衛門か胸板に裏かひでころグサと立流石  
不敵の蠶螂も灸所の痛手ふ何かの縁ん後ふ捏と倒れたと松川見るより姫  
しやと踏込來て肩先切込其儘上に乗か、り止の刀指たりしが嫌弱女の慈  
まきハ最前より戦疲れ其上數箇所の手紙なれば敵を仕留し氣の緩又伏重  
て息絶たり姫と驚愕さかけ寄給ひ混と取若これ乳母よ心を飽かに持てた  
も杖柱とも思ふ其方萬一の事の有ときは此身は何に爲べき予これく痛  
と揺動し戀給へと返答なれば是は何とせん悲しやと聲を限りに就位給



六十九 紙 雙 廻 蟲  
 ふ此時松の木影より手甲脚半小腰袋結し漁者壹個顯出弓矢投捨走寄り死  
 骸に取着抱起し勢田の入り日の夕榮に面を見ればコハ如何に叔母松川にて  
 有ければ是は開も如何と驚愕て叔母御前ノウ源吾にて候る叔母御くと  
 耳に口よする血筋の縁の糸曳れて肝に應てや心着たる松川かウンと計り  
 に眼を開けは二個は嬉しく左右より取絶つ、介抱あす源吾は言語を激し  
 て數箇所の痛手に座れや灸所と委く除たれば心儘かに持給へ某斯て候上  
 は御心安く思召左へ去あがら斯る珍事如何ある子細に候やといふ顔熱う  
 ちまもり思ひ懸なき甥源吾絶て久しき對面に苦痛を忘て吻と息突嬉しや  
 源吾無事なりしか不計き今日の厄難蜘蛛丸奴か無道の振舞迎も妾は此深  
 疵助るべくもあらざれば其方は姫君を守護なして天斑殿に御渡まふし夫  
 を御託の種として舊の武士になりてよと言つ、姫を熟視り恐多き御介抱  
 何國までも御供と思へや叶はぬ此深疵甥源吾か舊の過失御免を蒙り只今  
 より乳母に代りて御供を御許願ひ奉る惣御悼しの姫上や懐しの氷莖や一





目見たいと言聲も漸次に弱る臨終の際二個の顔をつくくくと名残らしげに三井の鐘諸行無常と告渡り其儘息は絶にけり二個は今更驚愕れさきく撫恤介抱なせどもしるまだふなきから亡骸崎の松音信る小夜嵐散を栗津の草の露娑婆冥土と隔ては又逢がたき石山の月も入雲の雲間より鳴かしたる雁の聲生者必滅の道理も逃かた、の(堅田)の會者定離比良の高嶺の雪あらで積る哭の主従か泪の車手向の水恃む六字の阿彌陀虫陣笠虫ノ別名寂滅爲樂とさくからに修羅の苦患を免れて安養漁土へ導引給へと伏拜つ、念する折又を四方に貝鐘太鼓數多の軍兵奇來容子は一大事と火急の場合止事を得ず死骸を其儘湖水に沈つ、姫を脊に負河岸に到り聲は止たる宮舟に押隠しつ、續解き川の只中は漕出す時に追手の軍兵か追々陸着怪しき宮舟返せ戻せと吠えくを聞へぬ形容に駭を押し立堅田をさして落延けり

第十五回 蜘蛛丸息英の館小夜討す

愛に勢田の御家人は雄鯉弄丸(虫名)といへる喜師あり夫が一子小推丸(虫名)とて天性英敏にして且勇剛の者なり天班牛之助か教兒の壹個にて師も其秀才を深く愛て殊に男兒をあらざれば後々の家を譲るべし下必にて先細子として幼君鯉弄丸か側らに侍らせ文武學問の相手にあし置けるか歳齡も鯉弄丸より一年増りにして今年十五歳にありなる今日、姫君の宇治の館に入興ありて若君にも朝夕一所に居給ひし姉君の座さねの何となく心寐しく御座それの扈從の面々心を盡して興を添しか園藝雙六も倦させ給へば推丸も何かな慰め來うせんと工夫せしが豫て球を捉る事に工とあれは田樂法師の真似して御覽に入んと初二個よとして漸次に數を増し五個の球を左右の手小捉り參差に投上るに始終三個の空小在て縁もて釣たる如くなれば甚た興ふ入給ひ夫より夜にも入たれは和漢の昔話に余念なき時急ふ正殿の方騒しく御注進々々と喚て廣庭さして來る者あり後室若君驚愕き給ひ推丸速行て承れと仰にハツと障子を明け天班か郎



等録蟲平(虫名)大庭に控と座し陪臣の某恐あれ共主人天斑か命に依て言上  
仕る一大事の姫君宇治へ御入興の途中既に粟津の松原まで御駕を進ませ  
給ぬとき松の木影に鳴吻と發と矢先ふ天斑か股を筒深く射させたれば馬  
驚て刎上り落馬せられし其時に左右の列松の間より顯出たる數多の軍兵  
中に頭人喚るやう土師蜘蛛丸か指揮により螳螂左衛門竹筒節平姫君を奪  
ん爲に待受たりと御駕目懸て狼籍あす局松川薙刀押拵敵を防ぎ戦ふ隙に  
天斑矢疵を手早く結ひ此場ハ某引請たり速く姫君を守護なして立退せ參  
せよと言つ、敵にうち向ひ四丁に當て防ぎ戦ふ推シテ姫君の御先途ハ  
さん候松川殿守護せられ唐崎の方へ落れ、其御行衛安定あらを推シ  
テ親人は「刀禰」に敵と戦ながら某を被召つ、蜘蛛丸か野心疑なし氣遣  
しきハ館なり今宵夜討を懸るもしれす吾歸館あを迄ふ汝推丸に力を合せ  
能く敵を防ぐべしと仰ふ隨ひ敵を切抜け只今馳歸て候ありと言に就れも  
驚愕てコハ开も診事と首問もなく四丁に貝鐘鯨波聲頃敵の奇たる予某

物見仕らんと推丸松の梢に攀り小手を捕て見てあれと勢田山原に靡す旗  
の紺地に蜘蛛巢の紋所正しく蜘蛛丸ふ疑なま憎き森者一泡吹かせんと松  
の枝より飛下り某防矢仕ん館には出陳の御用意あつて然るべし汝も續け  
と馳出す畏たと蟲平か跡に引添走出たり却説天斑牛之介ハ敵を漸く切拂  
ひ姫の御跡慕ひ、彼方此方と索るに更に知よしあかりければ是ハ敵ふ被  
捕給ひしか松川ハ如何ふせしと尋倦て立居たり、が算を亂せし死骸の中  
に茶道行彌の倒れてあましを夫と見るより走奇と近倚見れハ虫の息懐中  
より氣付取出し漸にして呼活し事の容子を尋問に行彌は苦き息をつた  
松川殿と諸共ふ爰迄姫の御供せしか螳螂左衛門理伏して既に姫君を奪ハ  
んとす吾々兩個死力を盡して防しか吾儕も終ふ負傷て松川殿にも數箇所  
の深疵既ふ危き其所へ彼の松の樹間より矢一筋飛來て螳螂か胸板小拵付  
しかば大事の疥手小倒る、所を松川殿仕止られしが終ふ其儘悶絶す其時  
壹個の漁夫來り松川殿を介抱し漸く心着ま時源吾といふ事耳小入しが其



内吾儕も氣絶して先後を更に覺侍らず姫君松川殿の見給ひぬハ必定源香の救ひしものかと言を漸次に息急速しく終ふ空しくなりふなる天班更に合點行のす源吾といふハ佐曾利か事か彼等漁夫と零落て此邊に在るものか何ふまれ姫君を扶參らせしと有かろハ御命にと別條あるまじ只氣遣しきハ館なぞ不意の珍事の無にも限らず嚮に蟲平を以て注進せ一ハ先館に引歸さんと嚮に乗たる吾馬の荒回りて勞れしが野草を食て居たるを見付是幸と飛乗て館を登して逸參駈時に勢田山の方に當て貝釘の音頻りなれば是ハ仕舞とぞ早敵の攻入しかと墮泥だてく空を飛して駈若見るに館ハ職員最中宿直の侍死力を尽し追つ返しつ切結ぶ中に推丸一際目立小腕ながろも希代の勇者五個を敵手小働けぞ洞傷一ヶ所負すして四丁に當て駈騰す天班殆感激し末頼母まき冠者かなと自身太刀抜き馬駈寄せ取悉奴原切立建立無難推丸を救出し小脇に抱込館をさして引入たり館の内殿ふハ老若男女上を下へと狼狽騒々を天班制して御前へ出れも後室君も若

君も夫と見給ひ左右に縫り嬉しや無事で戻りしハ姫と如何に姉上は又今宵の此騒動如何はせんと歎かせ給へハ天班愁然として言上やう姫君の御行衛知ざれども源吾と言者救ひ奉るよし承知ハ十に八九は御別條あるよし差當今夜の大變左右言上る詞あく忍入奉る處なり御家人等身命を抛て防戦ハ仕れども不意に起て無勢なれを迎も防ぎ得るふと叶候まし某一つの謀計を設け推丸蟲平等に言合されぞ今暫くは踏泳候べし乍恐御兩君共賤者の體に御身を棄し一先館を御開あつて再び良策を施より外は候はし若君は重代の御太刀蜘蛛切丸を佩させ給へ某御供仕らん頼ふくと言上すれハ後室若君は泣々も準備既に調たれハ天班も足輕あどの体小身を盛し館の内此所彼所小火を放し裏手の小門より忍々に落給ふ推丸蟲平ハ館小火の手に上るを見て時分のよしと凜々然鎧以中門颯と開くを見れば先なる武者の出立は黒系威の大鎧天班か家の重代二本角の前立打たる背を頂ぎ栗毛の駒ふうち跨り其次は大將と思しくていと美童總角の紫威の鎧



着て鉄形の胃は態と從者に持たせ鷲の羽の征矢を森の如く小脊小負虎の  
皮の尻鞘かけたる太刀を佩黒き駒に跨りて重藤の弓の真中を握り馬の邊  
ふ白地ふ二ツ引籠の旗を押立てたるは言ねと知るは御大將先なる武者は進  
出大音聲に喚るやう遠からん者は音にも聞け近くば寄て目にも見よ清和  
源氏の嫡流六孫王經基後胤多田滿仲の末孫勢田大領鳥茨蜻蟻丸并老臣天  
班牛之輔忠仲最期の一戰逆賊蜘蛛丸自身出て雌雄を決せよと晉れハ蜘蛛  
丸陳頭馬を進ませ逆賊喚はり事可笑しや汝蜻蟻丸大頭の威に矜り旗下  
諸將を設り且老臣天班牛之輔權勢を恣よ一國政不整により吾朝命を奉り  
其罪を正せ處なると其時蜻蟻丸曰るやう汝累代吾旗下に屬恩澤に浴まな  
がら野心を企卑怯にも不意を襲ふ何る逆賊ならざらんや吾若年と雖も源  
家の嫡流家小傳る弓勢の程を見よやとて滿月の如く引絞り深と發せハ過  
たず蜘蛛丸か胃の具向射たりまに只木偶を射たるが如く又個ふ同じ出立  
の武者願れ出土師蜘蛛丸是ふ在此所を射よやと咽輪を指示すに予二矢を

刺て發矢と射るふ矢坪ハ少しも差ねど自若として動く事なく又側ハ蜘蛛  
丸あま差詰引詰射ると雖も幾個の蜘蛛丸あるを知らず此時天班押留め彼  
妖術を行ふと見へたり只討入て駈腦ぎんと咽喘て突て入り四角八面ハ駈  
立當を幸ふ難立れま名に負勇者の死者狂ひ寄手も近倚まと能すして四丁  
へ跋と退きさり蜻蟻丸ハ聲かけて端武者原の手に懸らハ死後迄の別辱な  
りいざ此隙に生害せん天班來れと言ながら猛火の内に引入ぬ隨ふ從者の  
兵士共早是迄予と互小聲かけ敵と組で落るもあり差違て死するもあり皆  
悉く討死しけれを寄手ハ凱歌三回場け城門に乗入て燃殘たる火を懐た蜘蛛  
丸自身巡見するに大廣間と覺しき處小男女の死骸多くあり其中に襦小  
見たる胃の焼てありけれハ後室蜻蟻丸天班共に皆自盡してけりと大小欣  
悦是より驕奢いよく寡れり是より嚮天班牛之輔ハ後室若君を誘引て難  
なく館を忍び出道いと暗き闇の夜を照す光りの仕馴し我本城ふ立登る炎  
の影を案内ふて泪の露の玉鉢の道を辿りて落行とき荆葦原の茂みより埋



伏したりし敵の軍兵顯れ出必定此所を落べしと張る蜘蛛の網身の  
獲しても疑なれ姥玉御前小蟬丸搦捕んと隠の天班後ふ二個を捕ひ吾々  
名もなき賤者不意又起り一戦に討死せんが怯しさに妻兒を連れて逃るなり  
許して通し給ひねと作り聲えて託れども言語戦無益なま夫曳縛と群りか  
、る今は是非なく殺はなし前後左右を柱へ戦ふ時よ黒裝束に覆面し問諒  
出立の大男矢庭に後室を引捕へ設備の駕へうち込でソレと言より走り出  
す夫遣ていど蟬丸切てり、るを彼男のひ潜とと刀も抜かす飛蝶の  
如く彼方此方と飛退て勢田と石山との別れ路道案内石の側へ寄かと思れ  
ば其儘に容姿と消て失にけり蟬丸の忙然とまて立たる所へ天班漸く敵  
を切伏せ韋駄天の如く走り來りナニ後室を奪れしとや夫の一大事と追懸  
しが早何國へ逃去ぬん行衛と更に知ざりけり蟬丸の打哭き母公なり姉  
君なり皆他手に捕られ吾のみ一個逃れたりとて何ふか爲ん早是迄と控と  
座し御帶刀に手を掛給へば天班急に押し止め御錠のさること小候へとも未

た御兩君は御存亡も安定あらず死の一端ふして安く生は難し某とても情  
からぬ命を阿容々々存命るも御家回復を思ふのと恐れ多き事ながら後室  
君なり姫君なり御家ふは代られす只御身を全ふえて御家御再興を思召せ  
斯言うちも敵寄なハ臍を噛とも益あかづんいざさせ給へと御手を携へ石  
山寺へと落にり

○第十六回 源吾館の魚土小主の骸を探索む

凡人一生の中或ハ聚或ハ散し會合常にしもあつざる浮萍の風に從て西東  
せるさまに似たり借も源吾は姫を笠船に隠來らせ敵の陸地より追かけて  
射かくる矢橋唐崎のかうき命を免れて力の限り船を押立難なく堅田へ歸  
りし先姫を奥まりたる座敷に招え奉り軒藏夫婦にも一伍一什を物語れ  
は驚愕こと大方あらず先茶を薦奉るにいたく怖畏給ひしかは只憂々と戦  
へ給ひて物をも果敢々々しくの宣ねば急ぎ藥を奉りさま／＼勞傳きて  
そこ一落着給ひしかば源吾の牙藏夫婦を見参させ借恭敬く言やう危急の



場所小望しかば禮をも言上ざりまが开も又今日如何なる日を斯る災厄に罹りたまひ某今暫時運參かろと終に陸郵に奪われたまふへきを主従の縁盡すして不思議に見參奉つるは亡父全蝸か亡魂の導引しにや候はん且松川か忠死の際願まつりし某の謝罪恩免聞届られ御供叶ひ侍りしいと恐くも有難のりき玉樓錦織の内に傳れ給ふ御身にて斯る恒憤茅屋に壁一夜の假初にも宿し參す勿体なき御悼しさの限に侍り明日と某早朝より館に推參仕御慈なれよし注進をし迎へ奉るやう計ふべし併某御勘氣を蒙る身にて候へは御書簡一封給るべし夫を証據に罷出さん暫時の間に候へは只何事も堪させられ御心痛給ひろと言時阿玉か持出る膳部行儀作法はしら粥に只管恐れ煎鶏卵きと君か爲にと調し心づく一筑紫の梅干小添し砂糖も田舎家の赤き心ろ知るれなる器敬く手をつかへ珍膳珍味に飽給ふ高貴御身なれば迎も御口ふは入まじけれと今朝よりの御辛勞心神疲勞給ふぞめ強て御箸を取せ給へと頻り小薦たてまつれば僅に箸はあげ給へと胸

閉りて食れ終は御寝なる方宜らんと宿衣さへ取出てまづ敷妙の木枕小御頭へ着せ給へとも深閨のうち生長錦の衾襖綾の褥に纏れ給ひし御身あれは垢着ぬども地織の木綿肌寒して眠り給はず頻に松川か忠死を憐み天班とじ免侍女等何如に合せし痛しや館にて速く此事の聞へたりか奈何ならん母公のじ免蟬蛸丸が嘸かじ案じ給ふら免と種々駒に小來て泪にひまそなかりなり夏の夜あれの明安くて早起させ給ひれと先御手水を捧べしと源吾か指圖に持出るの塗盥み引換て竹籠の小盥の中へ灰もて磨ても爐に燻りし藥鐵の湯湯桶ふ代し氣配の心ばかりの尊敬なり姫君の頼て御文章認給へん源吾の速より設備去て是を懷中に収つ、妖蟲夫婦小留守の事いと細々と言合め絶て久しき兩刀の底を拂て出で行く源吾の道をがふ思ふやう此年月館の事を忘る、日とての無りしに不圖姫を救參せ其功といふで無れれど先御使を許れしに此上もなき身の幸館小到着の斯言んか天班大人小對面もせと歸參の推舉を待て見ん夫につけても水



室か居らぬ無かし欣喜べし姫君にも御馴染あれば何角ふ都合か宜るべきに儘ならぬが浮世あれ又永々の涙々に斯凄しき姿して御館に推参たらんふは古朋盡ふ笑れんか否夫も厭まし替補衣を纏ふとも心だふ潔からばなと耻ることのあるべきやと心裡ふ問心裡に答へて足を空ふ歩行しが石塙の邊まで来りまに松の根元ふ腰掛て烟草燻らる旅人の夢の浮世とは言ながら累代の名家なまし勢田の館の如何ふして一夜の内ふ亡しやと言を源吾が耳に入ぎつくり胸に應しかば不覺足を踏止りはて訝しき今の咄勢田の館と言から外ふの有べき筈なし何にまれ尋問て見んと彼旅客にうち對ひ今風聞の何とやら勢田の館に變ありしとか知らせ給ひ、教へてよと言に旅客の會釋して吾儕も其場を見らるふあら本と昨夜正子刺遇る頃土師の蜘蛛丸とかいふ人か夜駈に館の不意を討れ終に防かねまにや御大將を初として皆討死をせられしとか大津邊で専ら評判其餘の事ハ知り侍らすと聞より源吾は胸墮この開奈何なる珍事かな壁蜘蛛丸野心を懐き録

に夜討したればとて彼方も智勇の御家人あればさう果敢なく亡ぶべきや大將討死し給ふとの最訝まき事共なり世の諺ふ言如く針程の事棒とやら夫等の類にあらざるか左は去るのら噂ふも形あき事ハ言もせし咄半分として見ても孰變事は有つるなうん是ハ何と爲ん氣遣しやと躊躇て居たりしが爰ふて物を想んよと行先まで行て見んと一層足を早めつつ人さへ來れハ尋問に皆同じ噂のみいよく、心を腦せつ、歩行力も無りしが心を氣を取直し漸く勢田山に近着は實に咄の如くにて爰等も戰場の街ありしか死骸ハ此所彼所ふ倒伏ま太刀薙刀は散亂し血は流れて混々より酒も過んで向ふを見れば大手の門ハ其儘あれば先駈入て内を見ればさしも凄然と建列糸一大廈高樓一字も不殘皆焦土となり果て殘るは儘ふ此所彼所夫さへ全き所はなく土藏或は雜物蔵も皆破却して其中には只一物も在されを源吾は惘て忙然と腰さへ抜て立事能えず噫奈何爲く昨日は何たる悪日予や館さへ姫君さへ降か、りたる災害ふ斯く果敢なくも成ものか今更



何とも詮方なし過ては御亡骸を探索んと立んとすれど覺て幾回尻居小倒るを刀を枝小起上り躍く足を踏し死て漸く中門の邊小進入れ此邊の一層烈しく戦しと見へて討死も最多く中には見識る死骸もあれの愁然とて佛名稱へ尙奥深く探り入る小像て覺へし館の容子此所より玄關彼所の書院と漸次々々に尋入奥殿の大廣間と思し死邊の焦爛たる男女の死骸いと多し其中に疊を多く積上げて未だ燻りて有ければ掻分取除掘出すに未だ火の廻らぬ所もありて焦爛たる首なき亡骸二個あり殊に一個は女にて下になりたる處に白綾の衣装焼残りされば疑もなき後室君にて今又一個は小體にて赤地の錦の直垂の衣の端まで残りしは紛ふ方なき若君と見る小眼も暗心も消へ餘の事に涙を出ず又側に一個の骸見覺のある天班か家の重代二本角の冑は焼替て側みあれば是も又天班小相違な一推察とよろ天班が御兩君の御首隠し然して自盡せしものなごん後室君は御仁慈厚く天班無二の忠臣にて能く補佐し奉り仁政を施されしに何とて斯く

果敢なき終りをし給ひけんと膽吹の方を發佐と疾視へ汝蜘蛛丸奈何なれハ累代館の高恩を蒙る身に有るか新無情ハ爲し奉りしぞ吾生て汝か肉を食はされは死て怨鬼となつて蹴殺し呉んと拳を握卓爾あかり狂氣の如く晋りしか伏てハ死骸に取籠り前後不覺小號泣し吾と心を取直しまづ尊骸を隠さんと松の樹の本深く堀り夫に兩君を埋め參らせ側に天班をも埋葬て石を轉し重と一遙下りて平伏し生たる人よ言ふ如く恐入たる御身の果何と言上べき詞もなく御無念の程骨髄に徹し推量たてまつる處なり幸ふ姫君無恙渡らせ給へバ不肖に候へとも源吾補佐を奉り御家再興の謀を巡しまふすへし萬一夫迄に至らすとも怨敵蜘蛛丸を誅戮し修羅の怨魂を慰免奉らんと又天班か墳墓に向ひ云々のよしを演べ頻に佛名を唱へつ、數回伏拜み空うち仰見ハ既に早日西山に入相の無常を告る三井の鐘時を急く群鴉聲又愁の増り來て泣々館を立出けり



諸も天班忠仲は播磨君蟻蝮丸を補佐誘引石山の山中より獅子飛岩の間道を  
經て宇治の御館(火垂家館)に播君を待參らせんと志し山又山を分行り當年  
の潤月のありたる故か時今四月の初めされと迎梅雨の日和癖雲さし覆ひ  
ていと、なほ聞え夜道を辿りつ、嶮を越へ尖を渡り物凄き限りなり然ぬ  
だに旅の癖き習俗なるに況て播君は住馴し館の兵徒の灰燼とあし親同胞  
ふは生離れ今と何國も甚麼して如何なる憂目ふや逢ぬらん殘る吾さへ落  
人の腸を断つ嶺の猿梢に宿る烏鳥の聲も追捕の喚るかと聞こぞ毎も魂消  
へ尙も追捕に曉得て捕囚となる其時ハ翌日の性命も憂速なみのよるべや  
甚麼にあらるものぞと涙も路も見へ分す此行腦み給へるを賺し勵し奉れど  
噫御悼しや昨日まで近江一國を領地して勢田の館と仰がれ給ひ只假初の  
微行も前驅後從に圍繞せられ傳かれたる御身なりしも今日ハ隸添者として  
の只此忠仲一個の心とかりは狂くとも吾さへ年齢も小動の五十歳の坂  
も越ぬるふ昨日よりの戦場に數回の敵兵を切抜て其上矢疵も負ぬれば心

神疲勞傷痛み歩行がときは播君に物想はせじと踏しめく播夫の道ふ  
を便りに幸じて石山寺ふ出れハ曉雲東の空に薄塵に諸鳥啼を出て鳴き  
夜は天明と明にり开も此御寺ハ天平勝寶六年良辨和尚の開基にて本尊  
は如意輪觀世音を安置し西國順禮第十三番の聖場あり然れど當時ハ今世  
と異り人の交加も稀なれハ先御堂に參詣ばやと主從寶前に額衝て蟻蝮丸  
合掌せ大慈大悲の眉稍を垂させ給ひ救世圓通の佛力を以家の禍鬼を護ひ  
給ひ母君姉上の身命に恙ならん事を祈り尙忠仲ハ後ふ在て只管播君御  
武運開け御家回復を守らせ給と幾回か願まつり數回額衝て諸無益の側角  
よいたり欄干に身を寄て腰より準備の團飯を捉出し堂守の僧に白湯を乞  
て先づ播君に薦參らせ其身もうち食儘かに足を休免けるが此舞臺ハ越前  
守爲時か女上東門院の侍女あとし藤式部が天台一心三觀の理を究先源の  
光公を本據として源氏物語を撰る處なり其言莊子の寓言に效ひ觀を以て  
眞となき然れども筆端蠟舞の妙國字莊撲の中最も奇勝たり就中若紫の卷



詞言絶妙あるを以て時の帝(圖融帝)名を紫式部と賜ふ又日本紀に通じたるを以て時人日本紀局と稱す是より齋圖融院帝雪後山を眺望給んとて式部玉座近く侍るを帝其才を試んと慮慮て俄頃(いつしげ)に香爐(かうろ)峯雪(ほうせつ)の如何(いか)と宣(のたま)へハ式部徐(ゆる)起(た)て前出(まへで)懸(か)御(ご)簾(れん)を捲(ま)上(あ)り帝不(な)斜(さ)其(その)秀(う)才(さい)を賞(あ)し給(たま)ふ是(こゝろ)唐(たう)の白(しろ)鸞(らん)天(てん)が香爐(かうろ)峯(ほう)雪(せつ)撥(は)看(かん)といふ詩(うた)句(こ)を記(し)憶(おく)して帝(みかど)の御(ご)意(い)を悟(さと)るなり後(のち)左(ひだり)衛(ゑ)門(もん)佐(さ)宣(のたま)孝(たか)に嫁(よめ)して大(だい)貳(に)三(さん)位(い)辨(べん)局(きよ)を生(な)む一(いち)條(じょう)院(いん)の御(ご)時(とき)正(せい)曆(りき)三(さん)年(ねん)に卒(す)す因(よ)に日(ひ)源(げん)の光(ひかる)公(こう)は仁(にん)明(めい)天(てん)皇(こう)より出(い)で左(ひだり)大(だい)將(しょう)右(みぎ)大(だい)臣(しん)に任(たづ)給(たま)ひ延(のび)喜(ぎ)十(じゅう)二(に)年(ねん)三(さん)月(げつ)十(じゅう)二(に)日(にち)薨(こう)す壽(ことほ)き六(む)十(じゅう)九(きゅう)一(いち)説(せつ)に鷹(たか)狩(かり)の時(とき)盪(たう)中(ちゆう)に馳(は)入(い)其(その)骸(がい)見(み)ず是(こゝろ)波(なみ)邊(へ)黨(たう)の元(もと)祖(そ)なり話(わ)省(しょう)饒(にぎ)舌(した)主(ぬし)從(したが)ひ暫(しば)時(とき)疲(つか)勞(らう)を休(やす)しかハ再(また)更(さら)ふ立(た)出(で)て街(まち)道(みち)より行(い)行(い)時(とき)は他(た)目(め)たちて惡(わる)からんと山(やま)間(ま)を徑(へ)廻(めぐ)りて獅子(しし)岩(い)の方(かた)へと志(こゝろ)し道(みち)を辿(たど)りて歩(あ)行(い)けるに忠(ちゆう)仲(ちゆう)か股(か)の天(あま)傷(きず)漸(しだ)次(じ)に腫(は)れ痛(いた)み其(その)上(うへ)至(いた)る全身(しん)鷄(けい)の毛(け)を塗(ぬ)り如(ごと)く毛(け)孔(こう)だち寒(さむ)慄(りど)を生(し)生(し)し苦(くる)痛(いた)いと一(ひと)難(たが)堪(た)げれと兎(う)も角(かど)もして宇(う)治(ぢ)の館(たて)まで護(まも)送(おく)奉(ほう)る迄(いた)り心(こゝろ)弱(よわ)てかた(かた)としと氣(き)力(りき)を勵(こ)し杖(つゑ)に頼(たの)り漸(しだ)く獅子(しし)岩(い)の邊(へ)ふ池(い)り着(つ)き道(みち)に一(ひと)

帶(おび)の河(か)流(りゅう)あり此(こゝろ)水(みづ)源(げん)の湖(うみ)水(みづ)より出(い)で下(くだ)流(りゅう)ハ宇(う)治(ぢ)川(がは)あり此(こゝろ)所(ところ)は川(がは)巾(きん)も左(ひだり)のみ廣(ひろ)からず川(がは)中(なか)ふ奇(き)崑(こん)突(とつ)出(で)して其(その)上(うへ)を飛(と)越(こ)て濟(わた)るあり故(ゆゑ)に獅子(しし)飛(と)岩(い)の名(な)あり此(こゝろ)川(がは)縁(えり)を沿(よ)りて宇(う)治(ぢ)ふ到(いた)るの間(ま)道(みち)あり勢(せい)田(た)の橋(はし)より這(こ)え這(こ)えと里(さと)程(ほど)凡(およ)四(よ)里(り)あれども道(みち)えき處(ところ)を來(き)しあれは凡(およ)六(む)七(しち)里(り)に及(およ)ぶへし勞(らう)足(あし)に苦(くる)痛(いた)を忍(しの)びて歩(あ)行(い)なれハ日(ひ)は早(はや)黃(わう)昏(こん)に近(ちか)くして心(こゝろ)をりて焦(こ)燥(そう)も痛(いた)腦(のう)ます一(ひと)烈(はげ)しくて眼(め)暈(くら)きて今(いま)ハ早(はや)一(ひと)歩(ふ)も行(い)こと難(たが)なれハ不(ふ)覺(かく)尻(し)居(い)に隠(かく)き伏(ふ)し瑤(じょう)君(きみ)咄(はな)嗟(な)と愕(おどろ)き給(たま)ひ小(こ)腕(うで)なからに抱(だ)起(た)し忠(ちゆう)心(しん)地(ぢ)ハ甚(いた)く度(た)ぞや藥(くすり)ハ持(も)持(も)すや道(みち)は如何(いか)ふしてよかんあんと脊(せ)摩(ま)搦(な)り介(か)抱(か)し給(たま)ふ忠(ちゆう)仲(ちゆう)ハら一(ひと)と落(お)涙(なみだ)し其(その)手(て)を止(と)め嗒(は)と息(いき)吻(くち)天(てん)を仰(あ)ぎ嘆(なげ)息(いき)ま大(だい)殿(だん)御(ご)在(あ)世(よ)の御(ご)時(とき)より數(かず)度(た)の戰(いくさ)場(ば)に御(ご)供(たま)して矢(や)傷(きず)も負(お)たる事(こと)あれども物(もの)の數(かず)どもせざとしが驚(おどろ)馬(ば)に劣(おと)る譬(たと)の如(ごと)く年(とし)老(ら)てて難(たが)適(た)ものにて僅(わずか)一(ひと)筈(はず)の此(こゝろ)矢(や)傷(きず)に苦(くる)をくゝハ可(たが)事(こと)不(ふ)惜(しやく)あらぬ命(いのち)存(ぞん)命(めい)と想(おも)ふハか(か)りを恃(た)にて是(こゝろ)迄(いた)り御(ご)供(たま)仕(つか)せ今(いま)ハ早(はや)是(こゝろ)あり瑤(じょう)君(きみ)ハ下(くだ)を打(う)と



捨て此川縁を何國までも落させ給と、宇治の郷に出るなれば光明卿に御  
侍あつて再び御運を開せ給へ在下昨夜館にて推丸蟲平等小言合たる事も  
有バよも討死は仕らじ彼等は謀計を仕課て十に八九の落たるならん然  
は不日宇治の館へ参上へし今一個の心持の昨日唐崎にて姫君を救参せし  
と行彌か終命に告たりし漁夫源吾と言せし者は必定佐曾利源吾あらん果  
して然らバ彼等若氣の愆よて館の嚴禁を破りしかバ既に御手討になるべ  
きを後室君の御仁慈にて助命の上に御金賜り惜々地に追放仕りぬ彼等今  
は零落て彼邊に居るものなうんか密々に探索め姫君にも御對顔あつて彼  
等か舊過恩免あらバ素より志ある壯俊なれば一方の御力とはありぬべし  
這ハ娘水莖に關係有たる一件なれば在下より言上はいとも鳥許なる事あ  
れとも國家の爲には他を憚に追おし仁恐孺君にも御年齢早十四ふなうせ  
給へバ心雄々しくあし給ひ怨敵誅伐御家再興を只一向小思食せ讓て御働  
にも言上し如く昔日武内宿禰は年齢十四の時景行天皇の勅命を奉り北陸

及東方諸國巡察し百姓の叛るを治たり同帝の第二の皇子日本武尊稚名を  
小碓と言奉りしは勇剛比類なく在て御年二八の御時に單騎筑紫に下り給  
ひ熊襲が魁師川上梟師を誅し給ひきとて言とも取て又血氣に慄慄は一夫  
の勇よして大將の爲さる處なり夫仁義禮智信と人皆天より稟たる所貴き  
も賤きも五常の心あからんや然れとも世の庸人は通て人慾の私に迷ふて  
遂に執喪ざる者は稀なり就中大將たる者ハ智仁勇兼備せされは一日も天  
下國家を治がたし三徳の内仁を以て基礎とす譬は仁は竹なり義禮智信は  
節の如し然バ孔子も仁ハ輒く許給ざりしは素是天と其徳を等くしがたま  
所以なり自然なるを天と稱へ人に在て仁といふ縦至仁に至らせられず  
とも婦人の仁に倣ふとあく今より勉て殺生を好給はず忠恕惻隱を心と  
せば先事足候との世に武士の業としも太刀を帯弓箭を拿て君父の爲に  
仇を防ぎ身を護る物ふしあれど只當前の敵を撃て降るを殺さず走るを捨  
て人を征するに徳をもてせば則忠恕の義も稱んか言上る事ハ是のみあり



必勉給へかし在下落命仕るをも魂伯の猶身に添て必ず守護奉らん思ひ  
しきかると叫びしる忠勇義膽の忠仲か氣の張弓も折朽て終に其儘悶絶す  
鱗鱗丸の慌忙き混と取若喃天斑よ忠仲よ心を髓に持てとも杖とも柱とも  
思ふ此方斯う果敢なく成果てハ警敵も討れじ家再興も覺束あし斯あらと  
館にて兎を角もなるべきを怒ひに逃れ來て吾のみ一個存命て生耻を肆ん  
より潔よく死するにしかじと其儘其所に座を占て短刀に手を懸給に急小  
腕凄麻木拔ことあらねば是ハ甚麼と愕き腕く其時に忽地傍に音ありて少  
年天壽を愆つことなけれ吾爾們が忠孝の赤心を憐て教示べき件れあり心  
神を落着て能聞ねと言ふに再び驚愕て頭を回して後を顧れば一個の神  
仙卓然たり其容鶴髮童顔よして額に一個の肉刺生て自然の清高徳姿の氣  
韻洋々として四丁をのらひ赭褐色の淨衣に紋紗の道服を着し手に一壺の  
雀簍刺蟲ノ巢スゞメノサカツホト云を携へ徐々と天斑か側に歩行より靈  
内を悉く診察て股の矢傷を篤と見つ、是ハ箭鏃骨に中り碎て肉中に烈た

九百 紙 雙 廻 蟲

るに其上山中を征歴して山嵐の氣に犯されたれを終に破傷風になりたる  
なり六脈既に絶たれば救べかざるの難症なれども吾に神仙の靈藥あり  
と那の壺中より神藥を速しく摘出し嚙碎て瘡口へ塗着推容て關りたる齒  
を推開て餘る藥を沃き入るに石滴を掬ふ療養に手の届たる進退精妙技起  
して背を三四拳撻いかせ死せりと見へたる忠仲ハ神藥胃中に下ると舐て  
忽地に蘇生り眼を開き息を吐き一霎時夢然とりけるが氣力漸く吾に復り  
て四丁を顧み神仙孺君の在を見て且驚愕き且欣喜急に跪て神仙を禮拜  
し在下爰に悶絶して冥暗の中を行と思ひしハ忽然一條の光顯れ神人頻に  
喚給ふ御聲耳に入しかも忽地ハ蘇生して心神爽ふなり侍りぬ在下が老命  
ハ惜むふ足ねと吾死後の孺君を外ハ補佐る者を無れば甚麼成行給ふん  
と夫の心懸しに不思議に神仙の冥助によつて君臣無異の幸福を得た  
り洪恩詞に盡す難一拜を神仙には如何ある神よて在すやと主従數回頓  
首問ハ神仙ハ完爾と打笑み吾ハ觸角僊虫名ハさて書を乾坤と等うし宇宙

十二百 紙 雙 廻 蟲



を家とま露を呑み風を食ひ或時の蓬萊に遊行び或時の藐姑射に住き近來  
思ふ子細のあれば此石山に杖を曳たり开も此山は觀音の淨土補陀落山と  
も謂つべし吾又備們ふは深き所縁の有ものなれば今其危急を救るなり定  
に天整愆たを備們忠孝の赤心なれば争か此幸福あらんや是皆因あて果  
あり夫禍福は糾ふ纏の如し哀しむべからず歎べのうす治乱興廢の塵世の  
常治窮れば乱生り乱極れば又治る一回の衰へ一回の榮ふ譬ば秋風飄乎と  
して草目落葉をるの嚴冬根を培養て春夏の花實を結ばしめんか爲なり然  
れとも盛衰ふ長短あて夫の善を行ふ者は榮久しく惡を行ふ者の忽地ふ亡  
ふ惡人と雖ども跋扈あて一時の榮花に誇るは天地に風雲の起るが如く天  
定れば再び晴天白日を仰く是所謂人盛あれん天ふ降ち天定めんに人  
道理あり今息英家房長入道逝去より家運一回衰へ終ふ種々の駭死ありし  
も今て早裏運の極度なれば速らそして開運出世の時至らん暫く退て身を  
慎み英氣を養て時の至を待みそ宜れ幸此尾上に吾願崑崙あり先彼所に

至るへし緩々諭示事もあり此方へ來ねと先子立て導引と主従大きに力を  
得て其後遂に隨行よ路のあを檢岨ふて熊徑鳥路の羊腸たるを辛じて登る  
に凡半里許よして山の中復にいたり平坦ある處ふ出たり水は緘々として  
奇崑の間小流れ松の亭々として涼風秋に陰す異草地に滿て親熟さる花馨  
林鳥梢に集て耳珍しき聲したり道に一個の崑崙ありて中よと新しき草越  
三枚敷てあり處の外に明くしていと涼しく岨の後を見上れば山の慶雲を  
吐て奇峯を累ね風の松濤を起して彈琴に似たり靈芝石上よ粘て五彩眼に  
美しく飛泉は底雷を見はして深淺を料るに易かり東南の方へ開けて湖水  
の眺望眼下にあり走船の白帆の幽に一葉の波濤に漂ふに異ならず況て岨  
の夕陽小群飛光景と百花の春風に翻に似たり然れば補陀落山の秋の月も  
夜く茲に隈なかるべく祇陀竹林の春の鳥も朝々暢ひ來ぬらんと思ふばか  
りの靈場佳景實ふ是塵外の一天地にして神仙の栖家なり

第十八回 息英主從仙洞に入て神藥を相傳す



其時神仙の二個に言やう今日よりと同宿の友あれは左様懇懇窮屈ふする  
ことかハ儂解きて居るべしと袂より二顆の甜瓜を提出(獨角倦熱シタル  
甜瓜ノ香氣ヲ好ム瓜ヲ近キ處ニ置ハ下ニ角ヲ入テ轉動ス因テ方直ウリコ  
ロバシ)ノ名アリ(長途に嘸かし飢つらん先是を食よと手に手に投られしウ  
バ請戴死てたうべしに其味蜜の如く只一顆にて飽滿て氣力まそく増加  
たり彼是するうち天斑が矢傷頻と痒を生じ後に絶がたき迄に有けれ  
む其趣神仙に尋問ふ獨角倦は點頭て夫の速く言べかりしを忘れたり醫小  
も和子に示せしごとく箭鐵骨にあたり其碎片肉中にてのこりたれば忽地歎  
衝を發したるなり吾施せる神藥と螻蛄の肉一箇と巴豆半箇とを研碎きて  
製練たるものよして其痒絶がたれば鐵の碎片撼振るの故なり此方本編螻  
蛄の條下附方小出つ昨日唐崎の邊に螻蛄の死骸あるを吾か仙術を以て知  
たれば取寄置たる物にまて(偶粟津の松間にて螻蛄左衛門か爲よ射られと  
る矢傷今又螻蛄か肉を以て治す因縁と以ふべし螻蛄價を射て姫を奪んと

すれば後に漁夫あつて又是を射る這を又因なと果あり世の縁に梢に蟬あ  
り螻蛄之を捕まぐす樹間に雀有て之をねらふ又其後(意あつて其雀を殺  
んどす只人を征する事をのみ想て身を守る事を講ふる警戒なり是彼遺理  
相同しと説明せハ天班頻ふ嗟嘆して(諸言やふ神變不思議の天眼通を得給  
へハ尋問奉る件(のあり姫君既に賊手に奪はるべきを漁夫救奉りしよし承  
りぬ夫ハ凡慮にも味方の者ならんと推量る處なり後室君を奪去しハ始先  
吾儂を取圍たる者どハ別人にて敵とも味方とも計知られず吉凶禍福を指  
示し給へど尋問れと神仙領て姫の身體ハ你的推量(の如く一箇の大丈夫在  
て救たれハ吉あれども苦心多ま又後室の身の上ハ一婦生命危かりしも慮  
の外なる扶ありて(行仕座臥却て安かり忠伸你的五指の内(に苦心憂慮甚し  
き者あり是又因果應報の爲す處なれハ免かたし然れども終に禍變して吉  
にいたらんと你們主從(宇治に到んの志あれどもそれは甚ハたよろしから  
ず暫く此所に止りて時節を待べし天運循環(せば吾又教ゆべし余り天機を



漏すは恐あり再び又問ことなかれ吾蜘蛛丸か運氣を見るに惡威盛にして  
 未だ敵しがたし又彼には不思議の妖術あつて容易き敵にあらず吾ふ一箇  
 の神法あり務成益火丸と号く後ふ必ず用る處あらん今其處方を授ん益火  
 鬼箭羽蕤各一兩雄黃雌黃各二兩令羊角煨存性一兩半礬石火燒二兩鐵鎚  
 柄入鐵處燒焦一兩半俱細末とし鷄子黃丹雄雞冠一具を以て搗千下丸さ杏  
 仁の如くし三角の絳囊を作り五丸を盛り左臂上に帶おれば從軍五兵白刃  
 を辟け居家戸上に掛れど甚盜賊を辟く又能く疾病百鬼虎狼蛇蝎蜂螫の諸  
 毒を治す明日より勉て其藥物を採集め調劑製藥すべし吾の先祖は唐山の  
 太古神農氏より出て代々醫師を以て業とす其証據より孫頼上に肉刺を生  
 す中古祖道士尹公漢の冠軍將軍武威の太守劉子南に此方を授く永平十二  
 年劉子南北軍に於て虜と戦ふ敗績れて士卒略盡子南圍れて矢下ること兩  
 の如し其矢子南の身に中らる數尺にして矢輒地墮つ虜以て神とす則免る  
 ことを得たり後ふ子南其方を子弟并に部下の將士に教ゆ皆な未嘗傷を蒙

二百二十五 紙 雙 廻 蟲



獨從主英皇  
 角仙の神  
 藥相傳也



むらす漢末青牛道士此方を得て安定皇甫隆に傳ふ隆又魏武帝に傳ふ一名  
冠將丸又た武威丸といふこの神仙感應篇に詳甚にして雁安常か總病論  
も亦極て其效驗を言曾て之を試用するふ一家五十餘口俱ふ疫病染只四人之  
を帶者不病と許叔微の傷寒歌にも亦これを稱すと説放也れを忠仲感嘆限  
りなく斯る奇藥を授るうへの剛兵妖術も何か恐んと雀躍して喜悅べば其  
時神仙又曰く妖術を折くの又別に法あり夫は擲に望て授べし神仙凡夫と  
の氣力大きに異れは先備們は眠るべしと吾の是より行處あり翌早朝ふ睡  
るべしと忽然と雲に昇り姿の見へすありにけり主従の意外の不思議に且  
忙れ且欣び洞中にの蚤蚊もあらず草を敷寝の眩枕心寛のふうち臥して自  
然と仙術を得たるが如く憂苦も更ふ忘れ果心清々として眠りけり夜明て  
天斑の眼を覺て四丁を顧れを早神仙の洞中に歸りて泰然としてあま  
れを驚きながら額を衝此年來眼敏くて夜の幾回か目覺るが常あるに昨  
夜ばかりの如何しん夢も結べて熟睡したり寐相惡容貌を見せ奉り老年

詮あく忸怩しと禮を述べ神仙は快けに打笑ひ凡心には忘想多く眠ハ種  
々の夢を結び覺れを又眠がとし爾們昨日仙顆を食し此仙境に居なれば心  
餘念を離れ精神安逸ある故に然予かし童兒は慈心少なければ能く眠るが  
如し爾と心正直にして自然ふ仙骨の趣あれハ功成名遂て其上ハ吾儕が群  
にも入まどあらん勉えられしよと曰ハ天斑はよく心嬉しく孺君を喚覺  
し石滴ふ顔洗漱き洞に歸りて傍を見は大きやかある米俵あり崑崙の入口  
にハ昨夜まで有とも覺へぬ地炕あまて鍋をかけるの餘ハ碗折敷手桶柄抄  
播盆菜刀燧匣味噌も又側ふありて早蕨山獨活の芽なぞ添てあれは主従太  
く愕て這も又神仙の賜かざるにても甚麼して此山中へは運送給ひま外に  
ハ夫もあらざるにと曰に神仙は完爾として取寄たるハ吾ハ通力あれと退  
と皆爾們的の所有の物あり一昨夜取果てのち兵糧土藏雜物部屋ハ皆悉く  
焼ざりしを蜘蛛丸委く掠奪り睡吹の邸へ運送する其中の物なれば心置な  
く食られよ凡夫ハ米と味噌とを食されを生命を棄難し是のみあらハ事足



なんと聞ことく、に愕かれ只感涙に胸塞りものいふべくもあらずりける  
天班精悍しく米精げ枯木を拾ひ飯を焚け汁を煮て主従俱小食終れば先や  
薬と採集んと神仙の立出れば二個は後小隨て山中を此所彼所と駈回り指  
圖の如く需に更に疲勞することもなく一箇の溪間に出けれ櫻桃の枝も撿  
ふ盛熟たるあり神仙の一霎時此所にて憩べしと其實を採て食なごするう  
ち蟪蛄丸は萬事賢くは在すれと流石の雅心にて溪河の岩間に壹角の飛  
生蟲の居たるを見着て既に捕んとし給ふを天班急に押止先夫は本草綱目  
に曰唐山江南溪毒ある處に此蟲あり名稱て溪鬼蟲といふ此物足角弩の如  
し氣を以て矢と爲し水勢に因て舍沙以て人影を射る中毒者病を成せと急  
不治して人を殺すと是姪婦感亂の氣生所也といへり常小人家野邊にある  
物は未だ其毒あるを見ざれども斯る深溪に在物の其毒無とも言がたし過  
あふの千悔するとも益なかつん大切の御身に在せは只管萬事を慎み給へ  
と諫れハ蟪蛄丸の淳直しく忽地其手を止め給ひ吾愈り許せよと少しも注

違給ぬを神仙殆感激し君を思ふの赤心より過せせじと諫れハ君又能く  
言をいれて少しも爭違ふことなく君臣の間能く和睦し其君にして其臣あ  
り比類稀ある主従か那然はれ此蟲ふつひてハ一箇の物語あり詩經小所  
蠶ハ和名をイサゴムシと當て本草綱目又説處の溪鬼蟲なり其形狀本邦の  
飛生蟲小能似たり時珍の曰處の射工イサゴムシは本邦の田龜又田蠶共虫  
名なり江南溪毒ある所に偶今蟲を獲るに其形ち猗猗醜惡又因て氣を以て  
矢とし舍沙以て人影を射る即ち病を成と言て中華人の甚た之を怖れ咎を  
此二蟲小歸を素より此物人を害するの意なし夫ハ本邦の兒童此二蟲を捕  
て翫弄物と爲と雖ども毒螫の患あし是其證據とする一あると溪毒と言ると  
深壑の淵熱山嵐の瘴氣なり獨り本邦栗氏の蟲譜(文化年中法眼栗本瑞見翁  
輯録千蟲譜ト號)小此物の無科を訴ふれこれハ二蟲も積年の惡名を消てさ  
こそ嬉しと思なら免吾彼們に代て一言を訴する處たり(編者曰以下は余カ  
推量ノ説ニテ未穩當ナラザレドモ本編ノ趣向ニ就テ言所ナレハ看客各々



ルコトナカレ又和漢三才圖會には本綱を引書て獨角仙一角天牛は天牛の條下に置き飛生蟲も同く天牛の別類とし註に狀喙切如く頭上角あり其角毒なしとあり足を以て之を見れば溪鬼蟲とは別物ならんか蟻と字説に胡麥切似詰合沙射人為害如狐又和名イサゴムシといふを以て考れば假に本邦砂授子と當て如何あらんか授は字説に蘇回切擊也碎也とあり此蟲宮堂の椽下陰濕の地の土中凹ある處に住て蠅蚋蟻の類到る時は土中より跳出て口の缺を以て土中に引込食ふ若外に一箇を捕て凹なる處に入れと戦て不止恰も牛闘の如し好で逡巡る故ふアトヒサリ又ウツムシ等の名あり又唐山別ふ沙授子と言小虫あり墨客揮犀云有蟲狀如蟬形小而圓好隱於屋壁及書策中一前有兩長足一如蟹螯觸後則旁行觸前則卻行有鄭秀才戲以手指再三撥之欲觀其行忽所螫痛臥數日遇良醫治之得愈醫云此名惡蠅不治殺人是又栗氏の蟲譜に出たり此物本邦に有を聞かず毒ある物は無こそよけれ海外諸國には怖べき毒蟲多ま一二

を言は琉球の飯匙唐山の全蝸の如に其毒に觸る者立所に死に至る尤も全蝸は小兒驚癇よと闕べからざるの藥功あれども又人を螫の大害あり本邦には如斯き劇毒の蟲なし夫は東海の君子國天地和順に四時調ひ氣侯穩當なればなり是皇國人の無限き幸福と謂つべし夫仙家には各愛翫するものあり或は鶴小乗り或は蝦蟇を使役ふ吾此物を愛すること年久し今試に其奇特を見せべしと礮打々々と拍手の溪問より數萬の飛生蟲群出て皆神仙の前に集合る其時神仙の主従か携持たる採藥の數品を別て皆其角に掛け又礮打と掌を拍せし蟲は一齊小飛翔して須臾に崑崙に運送けり主従の傳くこと大方あらず就中天班は讚嘆限りなく且慙愧し在下不學淺見よして斯る所以を識らず神仙の教なけれは此惑何かの晴なん夫を迅速く看破られたる栗氏の寔に皇國蟲學の魁祖といふべしと數回賞讃したりける是より此溪を試の谷と名稱しとかや神仙又主従小示すやう時芒種五月ノ節五日を過り今夜よりして夏至五月ノ中(の後五日)に至るまで十五日の間益



群集をべし北の勢田橋を限り二町許南供江が瀬に至て二十五町其間小在  
物を藥品とすへ一然れとも強て追撲ふ及バそ自然と地に墮る物を拾べし  
と教ゆ、うち連岳岨に歸りける實に神仙の教の如く其夜よりして數萬の  
螢群飛事高き十文許火燃の如く或ハ數百集て塊の如し北の橋を限り東南  
の川を限り其他一箇も有ることなし不思議といふも愚あり此谷を又盤谷  
とも稱ける既小十五日過ければ螢悉く山城の宇治川小下る凡三里許の内  
群集を夏至より小暑六月ノ節の間最を盛なり西又宇治橋を限りて下らす  
是火垂家の所領の塚なれなり是よりして今世に至まで斯の如し實に一  
異といふへし夫より主従ハ違は山中を徘徊して藥石藥草を採集め夜は露  
間小下りて螢を拾ひ神藥調劑に怠りなくぞ勉ける

○第十九回

蜂菴地膽山小後妻を媒灼す

人の腹中ふハ九箇の蟲あり伏蟲といひ蛇蟲といひ白蟲といひ肺蟲といひ  
胃蟲といひ鬲蟲といひ赤蟲といひ燒蟲といひ肉蟲といふ又尸蟲あり此蟲

人と共に胎肉より生ず又寸白蟲あり以上十一種或は白蟲は酒を好と云ふ  
又恩を蒙りて却て讐を以て報るハ之を讐子身中蟲といふ爰小大津の  
驛に走り餅屋と名代を取し立場茶屋あり先年由利花介が跡を買得て請繼  
し今の餅屋の主といふハ地膽山蟻兵衛アリノヲヤチ地膽ノ一種ナレハ  
地膽山蟻兵衛小作ル阿姐已ハ元來竹節虫ナレド仮に本文ノ如ク作ルと稱  
做て元來は賭夥の群なりしが初老の年より堅氣になり僅し世話も利者あ  
れハ親仁くど尊敬られて内証合も相應小表面ハ餅屋にて密々窩主を渡  
世とせしが妻ハ一昨年没死て年齢も五十歳を小動の波の寄邊も子もなけ  
れば心不娛し兒折柄に豫て出入の針醫なる密門蜂菴蜂一種が薦小より此  
頃都より流浪來て近兒邊に小家を借り裁縫洗濯を活業とせ阿姐已と稱  
る婦婦あり年齢ハ三十歳を越たれど己が心の氷姓に洗ひあげてや垢ぬけ  
て賭夥の群にも最負せられ蟻兵衛の家にも折々の立入者にて有ければ彼  
だに嫁ぐ心あらは此方に左右ハなきものかふ媒灼してと頼みければ或日



の黄昏時庵の阿姐己の家に至りつゝ、表口よきし覗き令姉と内かと呼門  
て些談合とき件のありと言ふ阿姐己は完爾と蜂庵老か上り給へど物總敷  
紙側に寄れり蜂庵箱火鉢の前に坐し談合といふは外ではあり令姉も豫て  
得得させ走り餅屋の親仁との嚮小内儀か没死れて後妻欲しと言ふ、につ  
け備に依頼の請ねども人の疝氣を頭痛に腦が針や按摩の活業がら察し過  
たる談合あれを備も裁縫洗濯で生涯婦婦で暮せもせまじ彼所の家と聊貯  
金もあり可養世子もあく勞神は外にありけれども些氣憤き生質にて余程に  
年齢が違ふなれり其所が定めて不足あらんが至て鑑鑠の親仁との未充分  
立派よる役ふたつ壯年亭主がよかんなれど注文通りに行ぬか浮世此不景  
氣に女の手ひとつなるく仕課るものではない此所が所謂一六勝後親仁  
との、機嫌をとり三四年も御馳走して五二やりといつた結果の貯金身代  
いふまでなく窻の灰まで備の物先方の充分氣の有談ことに備の標致と世  
辭て客商賣には當任相談にのる應のなきやと言ふ阿姐己の笑しげに實に

ぬしの言るゝ如く針と糸との手業ふて細き煙りの立るもの、油元結髪結  
湯錢鼻紙から煙草の小買宿料にも追るゝばかり鱈子一尾口へ入らす一  
盃炭ふ世を送りひがなき暮しをするよりは何程氣憤しい親仁とのても機  
嫌のとれぬ事ハ無ん先方でさへ承知あら妻ハ明日にも嫁りたし立しく  
依頼参らすと言つゝ、立て裏口の戸明け惣厨に行形容ふて隣家の女童に何  
か耳語兒再び舊の坐に歸り火鉢の炭團を掻發て繼加たる炭手捌ハ有聚ふ  
舊の御所方に宮仕せし者なると折柄裏口の戸を明て女童ハ携たる酒一外  
上り猫も居置て嫉御よ此所に置侍る今一品ハ役より來ると言ふ阿姐己ハ  
高勞て帯の間より捉出せ幸福袋の口を開け鳥目二三孔捉出し能く遣して  
好兒や少しけれども駄賃なりまゝ來てたび手と手に渡せば女童は歡び  
出て行く引違て蒸籠一荷蕎麥店の運送兒か持込バ燗燗に酒を移して藥籠  
ふ納れ信樂燒名産井に香物盛做て朽木塗名産膳ふ置せ蒸籠諸共持出て燗  
婦尊の器財もなく肴とてと無れども心祝に酒一盞あがりてたびねと差出



せの蜂庵元たる頭を摩被止れの宜りしふ道の事外き心遣ひ併相談か團然  
て吾儕も太く炊然と然らば馳走に預らんとまづ盃を捉上て術と呑干器の  
表裏轉し見て這の爛場と一對ふて京清水の焼なふんが形ちといひ摸機と  
いひ最珍かある好みあると言は阿姐已の領て夫の妾の仕へたる上様の御  
好みふて焼上たる器小なん侍を大概器賊の活たれど是のみ残し侍とぬ  
都にて思出たり一昨日知已者の來て土産にとて貨たる北山の鹽松茸道も  
善休にと提出せは這の一染の珍物なりと壺の壺とり鼻蠢動し香氣松茸佳  
味續草ことに今日の相談には幸兆のよき肴物儲ころ千代をぬるもの、若  
木の松も若やぎて親仁の、生物も纏て賞翫あるべしと戲言交りに祝し  
つ、献つ酬れつ日は昏て二更の鐘の鳴ぬ間ふ傾さけらま舛の酒足こと知  
らねの未飽ねど主も客も然ばかりに皆醉ざるにあふざれの蜂庵の卒退ら  
んと盞を辞し歡を舒て頓衝なから漸くに身を起し襦小脚下殆やと阿姐已  
が乗れる方燈の夜風に靡く片明日送り果て門鎖し殘物には福がある身

の幸福か向さるかと残りし蒿麥を土鍋に移し松茸さへも割入て是る所  
笑假面蒿麥他見なけれと遠慮なく皆うち食て膳突出し爰が婦の氣安け  
れと是からは左は右くまじ支度の無の承知なれど此儘ふても行れまし  
衣も帯も科あくて轉物屋の縛を受させたれの開も此縲細を如何にして免  
れしめんと思索しつ鏡臺と計匣だけり持て行かん平常衣の袂包と包とし  
て其余の物は賣却なさんと心裡に目算て聽て臥簾に入にける翌日蜂庵ま  
た來り昨日の禮を舒なとして借いふやう迅速先方へ談せし處慮の外又欺  
ばれて一日も速か宜かなれど親仁も有繫に天保兒曆を繰り明日の執と  
るどハ則裁斷の意ものごと決し定むるよ吉然れを婚禮小用て吉なり下段  
ハ天赦万吉天萬物を養て諸の罪を赦とありよ明日と決したり你も  
其準備せよれよかし身纏だふ小して疊建具はいふに及ばず庭溜調度も函  
火鉢も皆悉く沽こそよけれ骨董家も故衣商も皆相識かあるなれば今から  
行て憑で來ん你か自讚の堪汰ぶけハ吾儕世話賃の賃なんと何から何まで



世話やひて既に準備も調つ阿姐己は其夜の蜂庵許に一泊し翌日朝飯も備  
けられ錢湯に浴し髪を梳せ爪を剪り鉄醬染て薄粉粧よさす口紅の外面似  
菩薩内心は誰かの夜刃としら紙に願際領元拭とりて火桶にかんし切櫃の  
綿伴の朱を奪ふてふ紫の胴ぬき太織の惣襟下着上に變て岸線の手付盤  
し下締しめ反せる腰に小柳の心裏ある表裏帯十式分に裝つ再び鏡臺の鏡  
に向ひ口と耳とに紅さま添ふ時よ門の戸入來るは是餅屋の子分よて手回  
器賤を運送者なり里親兼ての媒妁蜂庵接摩針でも替へ衣なりと京郡内の  
下着の上に黒袖の五箇所紋黒縮緬の無雙羽給て得意先よりの賜あふん鮫  
柄の脇指小扇を添て淨起挿し頭さし延て突袖し祝の酒の香たさふ心せき  
駄の音高く阿姐己に添て出行ぬ蟻兵衛の方にと年老ての再縁あれは只客  
分よ引取と近所合壁へ披露はすれど子分を始若若遊藝の群も數多聚合  
有繫活業柄として外飾に物せられ柄樽蒸籠を積もあり或は目録を贈るも  
ありて賑々しくぞ見へにれる蜂庵のさし心得替夫々に揖讓して阿姐己を

名乗對面せ後に大に酒宴を開き献つ酬れつ唄つ舞つ皆十二分小酔もの  
から其黄昏に蜂庵のトめ執も開散したりける阿姐己は日毎搗餅の米の糺  
舂量りても米櫃覗く苦勞も免けて萬不自由なきものから萬事を慎しみ嗜  
る酒も多く飲す只管蟻兵衛の意をとり立入るにも愛想よく往來の客に  
も世辞能けれを自然と餅の賣もよく皆令姉と尊稱つ、蟻兵衛親仁の幸福  
者山神の没死て福神か舞込たりと他人も評判する程なれは蟻兵衛の大死  
に安堵して阿姐己を無雙ものふ思ひ慎むがさきの酒色にて先妻の没死て  
より二歳起し絶て久しき侶宿の床に結ふや夢の浮寝鳥彼岸忽地回轉り後  
生菩提と爪線一數珠の百八煩悩心慾海深く沈ては始に還る黒潮に染るや  
頸の腰蓑ならて濡つ、袂樂ふ耽りける  
○第廿回 惡漢毒婦奸淫を逞うを  
木質の儘にて製造たる器物の年歴とも兀ることなし拭はますく光澤を  
増す途たる物の始めの最も美しけれと終にそ兀損じて下地を顯す然れは



阿姐己も始は生質を覆ひて外面裝飾萬事身を憚しみて専ら蟻兵衛の意を  
とりしもの蟻兵衛も終に彼が色香に惑され況て老年のことにしあれぬ  
も鑑鏡なる更なりしも此程の疲衰へ咳きへ太く出けれぬ醫師小侍て治療  
を乞は是全く虚損の症なれぬ第一色慾を慎まされば本復受束なしと説諭  
されて始て酒色の過度なるを悟り年輪太く違ひたる妻を迎し慾を今更悔  
く思を詮方なく彼も此程の始と異り酒を嗜み只管自己の衣裳髪飾の飾化  
粧作りにのみ實を入れて偶是を禁戒むれば河豚の如き面搦して喋々と口唇  
し子分の者を晉懲し客應對も悪けれと十に七八の言を止ぬ然るれ離別  
する程の箇條もあく去とて又醫師の教戒を嚴重なれぬ何となく臥床を別  
ふしたりなる阿姐己は素より姪婦なれぬ夫蟻兵衛か年老ひたるは末果敢  
くしくと非るべしと豫てしも思ふものゝ出入する子分の中ふ頭取と  
る壯俊にて砂場すなばの蜃郎しんろう第四回に伊三五郎ふ作る故有て本文の如く改以下  
下同くといふ者あり自己より年齢の三四つ若くして勇肌なる男姿に似と

戀慕せて彼か賭博ふ負たる時の内證ふて本金を借し子分の頭といふを名  
義として酒を飲せ自己も對手し折々眼を以て報知れは所謂蛇の道は蛇  
の譬の如く下地の好あり厚意のよし居膳食ぬと男兒の耽辱と杓子定規の  
理屈をつけ偷食せし縁のなし同氣需る悪姦毒婦終に無差別中とすなりぬ  
爰に又蟻兵衛か子分の中ふ蟻藏といふ者あり蟻兵衛か先妻の甥にして生  
國は越前敦賀の者にて家太く貧しくて其上兄弟も多けれぬ繁華の土地に  
奉公せんと兵蟻衛を便りて大津ふ來し其頃叔母の病氣ふて終に果敢な  
くなりしかの何れに奉公せんよりも吾家に居て店を助て貸たしと叔父の  
依頼に止められて商業の餅を製へ薪水の業も手傳て居たりしか年齢未だ  
十八あれと最律義の生質ふて叔父蟻兵衛の言まであく後妻の阿姐己よま  
て心限なく物せしが此頃阿姐己と蜃との氣浮來を怪まど悟りまかど迂闊  
に叔父にも告がたく外面と無何氣風情にて悄々地に心を着いたり借又蟻  
兵衛の情行末を考るに家を讓べた子もなれぬ蟻藏か生質温潤にて眞實



なれば彼を養て子とせんと情と地小蟻藏にも言合先病氣も此程快くて氣力も大祇つきたれ一回敦賀へ立越て蟻藏か實父にも相談し慥と事を取極めんと阿姐已ふの故意と此件を言すして先妻没死てより獨身あれば久しく親戚を訪ざりしか今この偶の在なれと留守に氣遣事なければ敦賀へ一回行て來なん暫く留守を護りてよ又蟻藏を殘し置は店の事は彼ふて足なると言に阿姐己の心に欣び又一計を工とつ、夫と妻も欣び侍る蟻藏ぬしの居たふんふの何角に都合と宜れども偶の此程大病にて漸く快氣といふもの、年老て在まれば一個にての心元あし然ればとて他者ふての氣遣し彼人連て行給は、妾も心安堵侍らん留守ふの子分の衆もあるものなれ朝な夕の餅搗だけけの交々に來て貰はん妾女子一個ふて留守するも何となく影護けれの蜂卷ぬしの内儀を憑と夜々泊りて貰ふべけれの心安堵て行給へ蟻藏ぬしも久々にて親の顔も見さから免いかてと進められ一理なきふしあられの終ふ其言ふ随ひたり蟻藏の豫て思ふ子細も有な

れば留守の程の案事らるれと叔父一個やらんも有繋にて俱に其意に任せけと仕儻したりと阿姐己の歡び勇々旅の支度を調へ既に發足させたりける子分の甲乙皆送りて驛の棒鼻より歸りしが中に蟻は信實しく又二三里も送出別れに望んで言やうの乾父留守と案事紛ふな吾儕子分の中にても人の上にも建たれたれバ吾儕まづ先に立て能く留守は護りなんと言は蟻兵衛は悦て阿姐已とても近頃にて世間の事を能知らる何角の勝手は你予知る子分の者も多けれの喧嘩をさせぬやう能きに計ひ憑むと袖を別て出行を見送果て蟻即馳てぞ歸り來にけれバ家には子分の甲乙四五人蟻の歸を待居たれの蟻の酒貳舛許携へて令姉よ着と何かあるべま些皆にも相談を先一盃呑がよしといふ内着も出けれの皆車座に茶碗酒程よく酔の回りし頃蟻郎か言やうの嚮又乾父に別る、時諄々依頼言る、にの偶は子分の中にても頭取とる者あれの留守の間は家に居て蟻藏か代りまて貰はにやならぬと言れたれと爰に一箇の難儀がある其譯は令姉も未だ青年



なれば乾父と承知でも世間の口か腌臢からふ然ればとて大勢聞々入込で  
食倒えと其時は所謂最負の曳倒し留守には物のかゝらぬやう爲か留守居  
の役目なり這て如何にして宜らんと言時阿姐己は罷出夫の舐ぬま氣遣な  
し親仁どのも言れとり舐て自己か子も同前留守に何事も相談せよ自己  
あらも依頼で行くと旨付られのしたるれを妾思ふに若者二個當面で居た  
なら人の想像もあるものあれハ蜂菴ぬ一の内儀を憑み夜だけ泊て貰ふ  
筈あり然れハ互ハ安心なりといふに大家呼と感ヒ令姉を舐も見上と了前  
義理堅き心であんあれ夫を見貫たる乾父ハ有樂に又隊長だハ長ハ旅と以  
ふでもなし遅ふて半月早ふて十日争で世間を厭ふ事ハ吾々則証人あり  
萬一東行南行と言者あらは何奴でも敵手せり憚ながハ説明さんといふハ  
舐は呵々と笑ひ然う乗人か言て呉れハ夫よて自己も安堵とり衆も折々見  
回て手助をして呉りやれよと實まやかハ欺けハ皆鈍くも謀れて何の間に  
やら日は昏たり卒退らんと身を起し各が隨意く歸りける後見送りて恐

姦毒婦互に面を見合て完爾と笑つ、表を鎖し忽地二個ハ夫婦氣合雜譚か  
らぬ當面蝶脚の膳對坐に豫て準備の肴物所映まで置並べ彼一ハ吾一ハ相  
譚ひながら飲食ハ餓鬼ハ飛脚に來ま如く箸も放さず食盡し臥筆儲を今夜  
よと兩枕に孤被臥さもよしや三布蒲團四疊許の小坐敷に相譚ひ明を愉々  
映々巫山の雲は溺愛の袖より起りて夢を載せ楚臺の雨ハ戀憐の窓を打ど  
も人不知舐蝶花に戯て屢露を食れどもなを飽す蜻蛉水に尾を浸して拮抗  
すれども興安を盡ん心蕩け魂浮れ網の如く膠の如く守宮の肉に咬入しに  
似て霹靂の鳴時ならでは離るべしとも見へざりしか鴉は屋上ハ阿房と暗  
き合歡眼覺て花既ハ開けと驚愕あがら起出けり夫より二個は夜となく盡  
となく折々興に乗してと調戲ハ涯りを盡せども外に憚の眼あけれハ樂し  
み多しと思ふものから待ぬ月日は過安くて十日餘も速立てハ或夜阿姐己  
は兼譚ハ斯う樂しくはするもの、明日にもあれ痴夫親仁の歸りなば隨意  
よも會合あらじ寧二個て閑落して何國の浦にも身を隠さんかされとも金